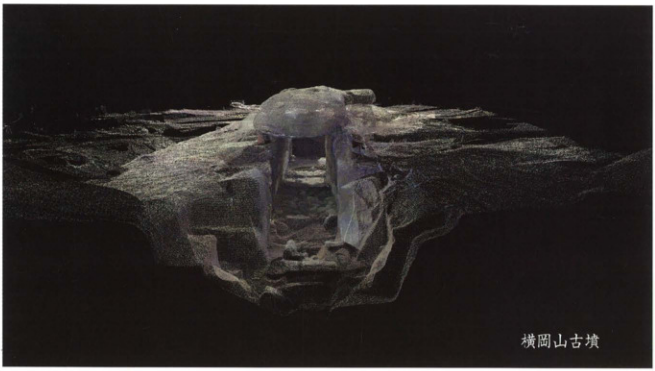
横岡山古墳　城所山古墳群

附　高松市立浅野小学校展示鉄製品の調査

池谷窯跡　山下墳墓跡

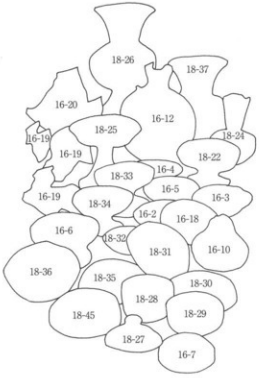
古田1号塚　古田2号塚　池谷1号塚　天神岡1号塚


横岡山古墳

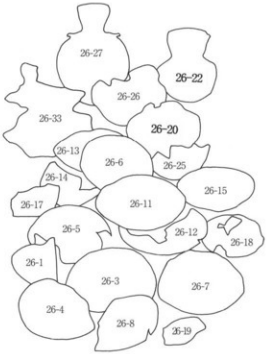
2008年3月

高松市教育委員会

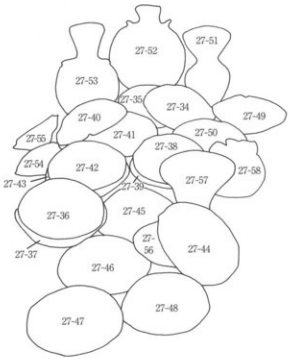
1．横岡山古墳　石室正面　－平成 19 年度調査時－



2．横岡山古墳出土須恵器・土器



1．城所山１号墳出土須恵器



２．城所山２号墳出土須恵器

例　言

1．本書は旧香川町・香南町における埋蔵文化財調査報告で，これまで未報告であった横岡山古墳，城所山古墳群，池谷窯跡，山下墳墓跡，古田１・２号塚，池谷１号塚，天神岡１号塚の調査報告及び浅野小学校展示の鉄製品調査報告を収録した。
2．横岡山古墳を除く発掘調査・整理作業は各旧町教育委員会が行い，整理作業については高松市教育委員会が引き継いだ。
3．平成19年度に実施した横岡山古墳の調査は，川畑　聡・小川　賢・渡邊　誠（高松市教育委員会文化振興課文化財専門員）・中西克也（文化振興課非常勤嘱託）が行い，片桐節子，中島美香・三好雄一（徳島文理大学）の協力を得た。
4．調査から報告書作成に至るまで，下記の関係機関ならびに方々の助言と協力を得た。記して謝意としたい。
浅野正尋，岡　泰正，津森重邦，津森　明，中原耕男，青木　敬・小田裕樹（奈良文化財研究所），大久保徹也（徳島文理大学），片桐孝浩・森　格也・信里芳紀（香川県教育委員会生涯学習・文化財課），草原孝典（岡山市教育委員会文化財課），松本和彦・高木敬子（香川県歴史博物館），松本豊胤（四国学院大学），渡部明夫（香川県埋蔵文化財センター），香川県教育委員会，香川県歴史博物館，鎌田共済会郷土博物館（順不同，敬称略）
5．本書の執筆は，第２章７・８・９を渡邊，第２章10・第３章５の鉄器を西澤昌平（平成18年度文化振興課非常勤嘱託），第４章を中村茂央（文化振興課非常勤嘱託），それ以外は編集作業と合わせて小川が行った。
6．遺物写真撮影（委託業務）は，杉本和樹（西大寺フォト）が行った。
7．本文の挿図として，国土地理院発行1/50,000地形図「高松南部」「白峰山」，香川町都市計画図1/10,000・1/25,00，香南町全図1/10,000，香南町管内図1/2,500を一部改変して使用した。

目　次

第１章　地理的歴史的環境……1
第２章　横岡山古墳……8
第３章　城所山古墳群……36
第４章　高松市立浅野小学校展示鉄製品の調査……47
第５章　池谷窯跡……51
第６章　山下墳墓跡……52
第７章　香南町の塚調査……54
　１．古田１号塚……54
　２．古山２号塚……54
　３．池谷１号塚……57
　４．天神岡１号塚……57

≪挿　図　目　次≫

第 1 図　高松市香川町・香南町全図（1/62,500）
第 2 図　香南町遺跡位置図（1/30,000）
第 3 図　香川町遺跡位置図（1/30,000）
第 4 図　香川郡浅野村剣山古墳（横岡山古墳）略図（1/40）
第 5 図　横岡山古墳位置図（1/10,000）
第 6 図　横岡山古墳位置図（旧都市計画図 1/10,000）
第 7 図　地形測量・トレンチ配置図（1/200）
第 8 図　第 1 トレンチ遺構平面図・トレンチ南壁土層図（1/40）
第 9 図　第 2・3 トレンチ土層断面図，第 4 トレンチ平面図・トレンチ北壁土層図（1/40）
第 10 図　（現状）玄室平・立面図（1/50）
第 11 図　石室，前庭部平・立面図（1/50）
第 12 図　石室，前庭部上面図（1/50）
第 13 図　羨道，前庭部排水溝平・断面図（1/40）
第 14 図　前庭部トレンチ平・断面図，北壁土層図（1/40）
第 15 図　羨道，排水溝遺物出土状況図（1/20）
第 16 図　平成 19 年度調査出土遺物（1/4）
第 17 図　遺物出土位置図（石室・前庭部 1/40，遺物 1/8）
第 18 図　（伝）横岡山古墳出土土器（1/4）
第 19 図　（伝）横岡山古墳出土石器（1/2）
第 20 図　（伝）横岡山古墳出土鉄器（1/2）
第 21 図　（伝）横岡山古墳出土鉄器復元図・展開図（1/2）
第 22 図　城所山古墳群位置図（1/5,000）
第 23 図　城所山 1 号墳
第 24 図　城所山 2 号墳周辺図（1/200）
第 25 図　城所山 2 号墳石室上面図・立面図（1/40）
第 26 図　城所山 1 号墳出土須恵器（1/4）
第 27 図　城所山 2 号墳出土須恵器（1/4）
第 28 図　城所山古墳群出土耳環・玉（1/2）
第 29 図　城所山古墳群出土鉄器（1/2）
第 30 図　城所山古墳群出土馬具展開図（1/2）
第 31 図　（伝）万塚古墳出土鉄器（1/2）
第 32 図　（伝）万塚古墳出土馬具（1/2）
第 33 図　（伝）万塚古墳出土馬具展開図（1/2）
第 34 図　池谷窯跡位置図（1/5,000）
第 35 図　池谷窯跡出土遺物（1/4・1/2）
第 36 図　山下墳墓跡位置図（1/5,000）
第 37 図　土器棺出土地点
第 38 図　山下墳墓跡出土遺物（1/4）
第 39 図　古山 1 ・ 2 号塚位置図（1/5,000）
第 40 図　古田 2 号塚周辺地形図(1/1,000)，トレンチ配置図(1/200)，塚平・断面図(1/40)，採取遺物(1/2・1/4)
第 41 図　古田 2 号塚周辺地形図（1/400），塚平・断面図（1/40）
第 42 図　池谷 1 号塚位置図（1/5,000）
第 43 図　天神岡 1 ・ 2 号塚位置図（1/5,000）
第 44 図　池谷 1 号塚周辺地形図（1/1,000），トレンチ配置図（1/200），塚平・断面図（1/40）
第 45 図　天神岡 1 号塚周辺地形図（1/1,000），塚平・断面図（1/80），略図

≪図　版　目　次≫

巻頭図版１　１．横岡山古墳　石室正面－平成 19 年度調査時－
　　２．横岡山古墳出土須恵器・土器
巻頭図版２　１．城所山１号墳出土須恵器
　　２．城所山２号墳出土須恵器

図版１　１．横岡山古墳　遠望－鎌田共済会郷土博物館所蔵－
　　２．横岡山古墳　前面－鎌田共済会郷土博物館所蔵－
図版２　１．横岡山古墳　塚穴最後部ノ外面－鎌田共済会郷土博物館所蔵－
　　２．横岡山古墳　側面（向テ左ハ前）－鎌山共済会郷土博物館所蔵－
図版３　１．横岡山古墳　遺物（土器・刀破片・鉄鏃）－鎌山共済会郷土博物館所蔵－
　　２．横岡山古墳　遺物（石器・鋼環・小玉）－鎌田共済会郷土博物館所蔵－
図版４　１．横岡山古墳　石室正面－平成 19 年度調査時－
　　２．横岡山古墳　玄室奥壁－平成 19 年度調査時－
　　３．横岡山古墳　玄室床面－平成 19 年度調査時－
図版５　１．横岡山古墳　玄室左側壁－平成 19 年度調査時－
　　２．横岡山古墳　玄室右側壁－平成 19 年度調査時－
　　３．横岡山古墳　玄室前壁－平成 19 年度調査時－
図版６　１．横岡山古墳　石室袖部－平成 19 年度調査時－
　　２．横岡山古墳　羨道（玄室方向から）－平成 19 年度調査時－
　　３．横岡山古墳　羨道天井（羨門方向から）－平成 19 年度調査時－
　　４．横岡山古墳　前庭部トレンチ排水溝・ピット－平成 19 年度調査時－
図版７　１．横岡山古墳　羨道側壁（羨門方向から）－平成 19 年度調査時－
　　２．横岡山古墳　羨道礫床（玄門方向から）－平成 19 年度調査時－
　　３．横岡山古墳　羨道遺物出土状況１（玄門方向から）－平成 19 年度調査時－
図版８　１．横岡山古墳　羨道遺物出土状況２－平成 19 年度調査時－
　　２．横岡山古墳　羨道遺物出土状況３－平成 19 年度調査時－
　　３．横岡山古墳　羨道遺物出土状況４－平成 19 年度調査時－
　　４．横岡山古墳　羨道遺物出土状況５－平成 19 年度調査時－
　　５．横岡山古墳　羨道部排水溝（羨門側）－平成 19 年度調査時－
　　６．横岡山古墳　羨道部排水溝断面（玄門側）－平成 19 年度調査時－
　　７．横岡山古墳　前庭部トレンチ南壁東部土層－平成 19 年度調査時－
　　８．横岡山古墳　前庭部トレンチ南壁西部土層－平成 19 年度調査時－
図版９　１．横岡山古墳　前庭部トレンチ－平成 19 年度調査時－
　　２．横岡山古墳　前庭部トレンチ北壁土層－平成 19 年度調査時－
　　３．横岡山古墳　前庭部トレンチ縦断土層－平成 19 年度調査時－
図版 10　１．横岡山古墳　第１トレンチ（西方向から）－平成 19 年度調査時－
　　２．横岡山古墳　第１トレンチ SD １（西方向から）－平成 19 年度調査時－
　　３．横岡山古墳　第１トレンチ SD １土層断面（南方向から）－平成 19 年度調査時－
　　４．横岡山古墳　第４トレンチ SD １土層断面（南方向から）－平成 19 年度調査時－
　　５．横岡山古墳　第１トレンチ墓壙検出状況（北方向から）－平成 19 年度調査時－
　　６．横岡山古墳　第１トレンチ SX １（西方向から）－平成 19 年度調査時－
図版 11　１．横岡山古墳　第２トレンチ（西方向から）－平成 19 年度調査時－
　　２．横岡山古墳　第３トレンチ（北方向から）－平成 19 年度調査時－
　　３．横岡山古墳　第４トレンチ（南方向から）－平成 19 年度調査時－
図版 12　１．（伝）横岡山古墳出土須恵器（浅野小学校展示品と香南町歴史民俗郷土館旧保管品との接合資料）
　　２．（伝）横岡山古墳出土須恵器（浅野小学校展示品）

図版 13　1．（伝）横岡山古墳出土須恵器（香南町歴史民俗郷土館旧保管品）
　　2．（伝）横岡山古墳出土石器（香南町歴史民俗郷土館旧保管品）
　　3．（伝）横岡山古墳出土須恵器・土器類（香南町歴史民俗郷土館旧保管品）
図版 14　1．（伝）横岡山古墳出土須恵器（津森明氏所蔵品）
　　2．（伝）横岡山古墳出土刀・刀装具（香南町歴史民俗郷土館旧保管品）
　　3．（伝）横岡山古墳出土鉄斧・刀子（香南町歴史民俗郷土館旧保管品）
　　4．（伝）横岡山古墳出土馬具（香南町歴史民俗郷土館旧保管品）
図版 15　1．横岡山古墳　平成 19 年度調査出土遺物 1
　　2．横岡山古墳　平成 19 年度調査出土遺物 2
図版 16　横岡山古墳　平成 19 年度調査出土遺物
図版 17　1．城所山 2 号墳（墳丘背面から）－現況－
　　2．城所山 2 号墳正面－現況－
　　3．城所山 2 号墳石室－現況－
図版 18　1．城所山 2 号墳遠景（西方向から）
　　2．城所山 2 号墳墳丘背面－現況－
　　3．城所山 2 号墳石室上面－現況－
　　4．城所山 2 号墳石室奥壁－現況－
　　5．城所山 2 号墳石室左側壁－現況－
　　6．城所山 2 号墳石室右側壁－現況－
　　7．城所山 1 号墳比定地点遠景（2 号墳から）
　　8．城所山 1 号墳比定地点
図版 19　城所山 1 号墳出土須恵器 1
図版 20　城所山 2 号墳出土須恵器 1
図版 21　城所山 2 号墳出土須恵器 2
図版 22　1．城所山 1 号墳出土須恵器 2
　　2．城所山古墳群出土耳環
　　3．城所山古墳群出土頸飾り
　　4．城所山古墳群出土刀・鍔
図版 23　1．城所山古墳群出土馬具
　　2．城所山古墳群出土鉄鏃
　　3．城所山古墳群出土鉄鎌
　　4．城所山古墳群出土鉄斧
　　5．城所山古墳群出土刀子
　　6．城所山古墳群出土鉄器 1
　　7．城所山古墳群出土鉄器 2
図版 24　1．浅野小学校展示鉄器
　　2．浅野小学校展示馬具
図版 25　1．古田 1 号塚調査状況
　　2．古田 2 号塚
　　3．古田 2 号塚調査状況
　　4．古田 2 号塚検出土坑
　　5．池谷 1 号塚調査状況
　　6．池谷 1 号塚塚石
　　7．池谷 1 号塚集石遺構
　　8．天神岡 1 号塚
図版 26　1．池谷窯跡出土遺物
　　2．古田 1 号塚採取遺物
　　3．山下墳墓跡出土遺物

第１章　地理的・歴史的環境

１．地理的環境

高松市香川町・香南町は，香川県のほぼ中央部に位置する。南部は阿讃山脈（讃岐山脈）から派生する丘陵山地が東西方向に伸びており，中央部では両町の境ともなる香東川が丘陵山地を抜け高松平野へと北流している。

地質学の所見によれば，この丘陵山地は領家花崗岩類と呼ばれる花崗岩山地，及びこの浸食により形成された段丘からなり，段丘は更に高位に位置する段丘（丘陵）とこの下位に相当する段丘（台地）とに分類されている。花崗岩山地は香川町の南端部，東谷地区の周辺で広がり，谷が発達した川に沿って渓谷となる他，小規模な谷が入り組む複雑な地形を呈している。また香川町北部，浅野地区の周囲に散在する低山は，浸食作用から逃れ島状を呈するが，その基盤は同系の花崗岩とされている。

高位の段丘（丘陵）は本来旧香東川による扇状地とされ，香川町鮎滝，下倉地区から香南町の西に位置する千疋地区にかけて認められるが，次第に旧綾川の影響が大きくなり，この西方では同河川の複合扇状地となっている。下位の段丘（台地）は高位の段丘が形成された後の河川による扇状地であるが，現在ではこの台地を刻んだ川筋が谷池，皿池といった溜池を繋ぐ微地形において認められ，鮎滝付近を起点とし香川町では北東方向，香南町では北西方向へと下るのが観察される。香川町では新池から浅野地区に点在する池を経て平池に至り，古川から春日川へ，あるいは高松平野中央部の溜池へと延伸することが分かる。一方の香南町では，高松市西部を下る本津川が西庄の琴谷池を源流としており，音谷池等周辺に点在する池から発する川とも合流する。その東方の岡地区奥谷池も古川，小山池を経て北西へ下り御厩町北端で本津川と合流し瀬戸内海へと注いでいる。

平野部については，ほぼ現況の流路となった香東川の堆積により形成されており，両町を跨ぎ両岸にその氾濫原をみることができる。香東川は阿讃山脈の大滝山，三木町津郷を源流として，塩江町を流れる複数の河川と合流しながら香川町岩崎付近で平野に至る。これを頂部とし扇形に開く高松平野を北流しており，その形成にあって多大な影響を与えたと考えられている。このほか，現況でみられる主要道のうち，徳島県に繋がる塩江街道は馬の背と呼ばれる岩崎，川東上を頂部とし高松平野へと下る往時の幹線道であり，この塩江街道と交わり東讃，西讃域へ抜ける三木綾南線が東西方向を横断する幹線となっている。

このように高松平野を見下ろす立地は平野形成にかかる歴史を留めるものとして，また香川の中心に位置し高松の奥に相当する地理環境は東・西讃，阿波地域を繋ぐ場として示唆に富んでいる。

２．歴史的環境

香川町・香南町内において認められる遺跡・遺物では，弥生時代のものが初見となる。香南町で発掘された岡清水遺跡では，弥生時代後期に属する集落跡が確認され，竪穴住居跡，井戸，柱穴，土器棺墓，土坑墓などが検出されている。住居跡の形態から播磨地域との密接な関係が指摘されているほか，赤色顔料が付着した把手付広片口皿などの土器や台石から集落内での儀礼が推定されている。香川町では，当該期の遺物として山下墳墓跡の壺棺（本書掲載）が挙げられる。発掘調査の事例はないが，当該期とされる石器の包蔵地に浅野八幡遺跡があるほか，舟岡山，新池で石庖丁及び石鏃，龍満山の東斜面，油山の北麓・南西斜面，川内原の鈴向においても弥生土器が採集されたと伝えられている。同様に香南町でも，延禰神社遺跡，小山池西遺跡，奥谷遺跡が石鏃・サヌカイト片の包蔵地となっており，香南小学校周辺，旧由佐小学校校庭で石器が採集されたことが知られている。また出土にかかる経緯は不明だが，香川町安原下の下倉八幡神社に奉納された４Ｌ分の平形銅剣が注目すべき資料としてあり，青銅器を保有する政治的色彩に加えて，分布の集中する伊予・西讃域との交流が想定されている。以上のように発掘調査の事例は少ないが，上記の地点を中心に当該期における遺跡の所在がうかがわれる。

古墳時代では集落の確認例はなく，古墳についても不詳なものも多いが前期及び後期後半にその造営が認められる点で，旧高松市内と同様の状況を示す。前期に属するものとして，舟岡山山頂に築かれた舟岡山古墳が挙げられる。墳丘の測量調査において双方中円墳，あるいは前方後円墳と円墳とされており，本墳出土とされている剣抜式石槨（浅野小学校保管）や特殊器台にみられるように，現状で墳形及び時期の詳細については流動的となっている。後期古墳では，横穴式石室の発掘調査・石室実測などの調査実績を

第１図　高松市香川町・香南町全図（1/62,500）

もつものに，方塚古墳（香川町浅野），横岡山古墳（香川町浅野，本書掲載），東赤坂古墳（香川町浅野），舟岡古墳（香川町浅野），八王子古墳（香川町浅野），龍満山１号墳（香川町川東下），城所山１号墳・２号墳（香南町岡，本書掲載）がある。香川町では浅野地区で確認されている横穴式石室が，舟岡古墳を除き（確認調査のみ），片袖式のもので占められ当地区の特色をなしている。一方，香東川を望む川東下地区，龍満山西麓の谷部では，３～５基の群集墳である龍満山古墳群が所在する。１号墳については発掘調査が実施されており，両袖石が羨道より内側にせり出す両袖式の横穴式石室であることが判明している。このほか川東下地区では，群集墳とされる油山古墳，清谷古墳が知られるが詳細は不明である。また香南町においては実態が判明しているものは少なく，城所山古墳群において断片的な調査記録や出土遺物が残る。他のものについては，佐賀神社古墳，高野神社古墳で横穴式石室とされる巨石の露出がみられるものの，大半は小規模なマウンドのみを現況とするようである。

古代における香川町・香南町は，律令制の行政区で讃岐国香川郡に属し，このなかで大野・浅野地区が大野郷，川東・川内原・東谷・由佐・安原の一帯が井原郷に比定されている。これに関わる資料としては，長岡京出土の木簡（荷札）に「讃岐国香川郡大乃道守在万呂白米五斗」とあり，大野郷が奈良時代末期まで遡るものと考えられている。遺跡として挙げられるものでは，香南町西部で大坪窯跡をはじめとする須恵器窯がある。現在，確認された窯跡や須恵器の散布地は音谷池に集中するが，新池窯跡，池谷窯跡（本書掲載）もあり，木津川へと下る開析谷周辺で更に古窯址群が分布する可能性も考えられ，西方に広がる陶窯跡群との関係が注目される。当該期の寺院・集落跡については未確認であるが，香南町由佐に所在する冠纓神社は，貞観３年（861），智証大師円珍による創建が伝わるほか，香南町岡に位置する奥谷の寺跡では，複弁八葉蓮華文軒丸瓦など平安時代後期～鎌倉時代における瓦の散布地として知られている。

中世に入ると，香西氏と同族で，源平の合戦において功があったとされる大野氏が知られるが，これより後の讃岐国守護，細川氏に由来をもつ寺社・城館が多くみられる。室町幕府の管領三家の一つである細川氏は，南北朝の動乱期において足利尊氏を助け瀬戸内沿岸の要所で活躍，近畿に勢力を伸ばしたとされ，京都の鏑流を上屋形，阿波・讃岐の守護を下屋形と呼んだ。このうち讃岐守の細川頼之に従った由佐氏，岡氏，森氏，佃氏，二川（龍満）氏，漆原氏が，大野や井原に城館を築いたとされ，現在に残る地名や墓，地割などから各々の比定地が挙げられている。この中で由佐城，龍満城については，一部発掘調査が実施されている。由佐城は「お城」の地名や土塁跡が一部残っており，発掘調査では並走する堀跡や柱穴が確認されている。龍満城は，現況で幅 18～20 mにわたる堀の痕跡が認められ，東西 156 m，南北 170 mの範囲に屋敷地が推定できるもので，発掘調査では廃城後に建立された薬師庵の土塁，石垣を確認した他，これに先行する土塁も確認されている。細川頼之は宇多津を本拠として，貞観元年（1362），南朝方で白峰の高屋城に拠った細川清氏を討ち，また康暦元年（1379）には，阿讃両国を率いて，予州の河野氏に勝利している。予州の合戦に際しては，氏神とした冠纓神社や大野石清水八幡神社に祈願したと伝えられている。戦国時代になると，これらの氏族は細川氏の後に三好，長宗我部へと属することとなり，豊臣秀吉の四国平定時には知行を失うが，多くが生駒藩において登用され，この後も旧家として残ったようである。このほか，碑石「大兎讃」は，生駒藩に仕えた西嶋八兵衛の書を刻むものとされ，大規模であった香東川の治水を今に伝えている。

＜参考文献・資料＞
香川町，香南町埋蔵文化財包蔵地調査カード
香南町教育委員会・香南町史編集委員会 1970『香南町史』，1996『香南町史　続編』
香南町教育委員会 1997『山佐城跡』
香川町誌編集委員会 1993『香川町誌』
香川町教育委員会 2000『龍満城跡』，2005『舟岡古墳』
香川町教育委員会・高松市水道局 2003『龍満山古墳群～１号墳～』
香川県教育委員会 2003『国道 193 号改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　岡清水遺跡』，2001『香川県中世城館跡詳細分布調査報告』
瀬戸内海歴史民俗資料館 1985『香川県古代窯業遺跡分布調査報告Ⅱ』『瀬戸内海歴史民俗資料館紀要』第２号
高松市教育委員会 1992『弘福寺領讃岐国山田郡田図調査報告書　讃岐国弘福寺領の調査』

第２図　香南町遺跡位置図（1/30,000）

第1表　香南町の遺跡一覧

遺跡番号	種別	遺跡名	よみ	所在地	時代	調査実績	備考
0001	古墳	奥谷古墳	おくたにこふん	香南町岡奥谷	古墳	—	高松空港建設時に消滅か
0002	包含地	冠纓神社遺跡	かんえいじんじゃいせき	香南町由佐	弥生	—	石鏃・サヌカイト片採集
0003	窯	西庄窯跡	にしのしょうかまあと	香南町西庄大坪	古代	—	詳細不明
0004	古墳	赤松古墳	あかまつこふん	香南町西庄在所	古墳	—	立地:平地,範囲:径5m,形態:円形,時代:中世,塚か
0005	古墳	大坪古墳	おおつぼこふん	香南町西庄祇園	古墳	—	立地:平地,範囲:径5m,形態:円形,時代:中世。塚か。直上に祠
0006	古墳	下田井古墳	しもだいこふん	香南町西庄下田井	古墳	—	立地:平地,範囲:径5m,形態:円形。塚か
0007	経塚	西庄山経塚	にしのしょうやまきょうづか	香南町西庄	中世	—	立地:山頂,範囲:東西5m,南北7m　井原神社古墳と同一か
0008	窯	大坪窯跡	おおつぼかまあと	香南町西庄大坪	古代	—	昭和12年発見。登り窯
0009	古墳	若宮神社古墳	わかみやじんじゃこふん	香南町吉光	古墳	—	立地:平地,範囲:11m。墳直上に神社
0010	古墳	佐賀神社古墳	さがじんじゃこふん	香南町吉光	古墳	—	立地:平地,形態:円墳,時代:古墳時代後期,遺構:横穴式石室。封土が流出し石室・石材が露呈。石室天井石直上に祠
0011	墓	古田1号塚	こでん1ごうづか	香南町池内197-1	中世	調査:昭和60年7月23日～24日,調査主体:町教委	立地:平地,範囲:径1m,高さ0.3m。昭和60年度土地改良整備事業に伴う発掘調査により消滅
0012	墓	古田2号塚	こでん2ごうづか	香南町池内194-1	中世	発掘調査:昭和59年11月1日～同年同月12日,調査主体:町教委	立地:平地(畦),範囲:径1.5m,高さ0.5m。昭和59年度土地改良整備事業に伴う発掘調査により消滅
0013	墓	古田3号塚	こでん3ごうづか	香南町池内183-1	中世	発掘調査:昭和60年12月5日～同年12月23日,面積:75㎡,調査主体:町教委	立地:平地,範囲:1.5×0.8m,高さ0.3m。昭和60年度土地改良整備事業に伴う発掘調査により消滅
0014	墓	尾崎塚	おざきづか	香南町横井	中世	—	立地:平地。範囲:1.2×1.9m。高さ0.9m
0015	古墳	城所山1号墳	じょうしょざん1ごうふん	香南町岡	古墳	発掘調査:昭和46年12月23日～47年1月5日,調査主体:町教委	昭和46年岡地区奥谷において開拓パイロット事業として開拓中発見,原形をとどめず記録保存
0016	古墳	城所山2号墳	じょうしょざん2ごうふん	香南町岡	古墳	発掘調査:昭和46年12月23日～同47年1月5日,調査主体:町教委	昭和46年,開拓パイロット事業として開拓中発見,調査後保存整備
0017	その他	条里跡	じょうりあと	香南町横井,由佐,吉光	古代	—	詳細不明
0018	城館	池内城跡	いけのうちじょうあと	香南町池内	中世	平成12年踏査,調査主体:県教委	立地:平地。十河氏一族,池内氏の居館
0019	城館	吉光城跡	よしみつじょうあと	香南町吉光	中世	平成12年踏査,調査主体:県教委	立地:平地,「堀ヶ内」「ホリタ」の地名をもつ100m四方の区画。城主尾崎宮内俊光は,横井城主尾池玄蕃の幕下
0020	城館	横井城跡	よこいじょうあと	香南町横井	中世	平成12年踏査,調査主体:県教委	立地:平地,一辺約50mの方形区画。城主は細川家に仕えた尾池玄蕃頭,後は横井丹後守光政
0021	城館	由佐城跡	ゆさじょうあと	香南町由佐	中世	発掘調査:平成8年9月3日～30日・10月14日～18日,調査面積:約771㎡,調査主体:町教委 平成13年踏査,調査主体:県教委	立地:平地,由佐氏居城。「お城」と呼ばれ,土塁跡が一部残る。発掘調査では,並走する堀跡や柱穴を確認している
0022	城館	行末城跡(岡城跡)	ゆきなりじょうあと(おかじょうあと)	香南町池内城	中世	平成13年踏査,調査主体:県教委	立地:段丘,岡氏の居館だが,或は参考地である大福寺の可能性も有り
0023	城館	岡館跡	おかやかたあと	香南町岡	中世	平成13年踏査,調査主体:県教委	立地:段丘,細川氏の館,一辺約250mの屋敷地か
0024	包含地	小田池西遺跡	おだいけにしいせき	香南町池内	弥生	—	石鏃等のサヌカイト片,須恵器が出土
0025	墓	天神岡1号塚	てんじんおか1ごうづか	香南町西庄	中世	発掘調査:平成3年6月12日～14日,調査主体:町教委	立地:丘陵上尾根先端
0026	墓	天神岡2号塚	てんじんおか2ごうづか	香南町西庄	中世	試掘調査:平成3年1月14日,面積:20㎡,調査主体:県教委	立地:丘陵上尾根
0027	窯	茶園窯跡	ちゃえんかまあと	香南町由佐	古代	試掘調査:平成3年10月2日～5日,面積:25㎡,調査主体:県教委	大坪窯の東方150m。坏蓋,短頸無蓋高坏等出土。平成3年10月5日試掘調査で窯体を確認
0028	墓	中下の塚	なかしものつか	香南町吉光	中世	—	詳細不明
0029	窯	池谷窯跡	いけたにかまあと	香南町由佐3411-1	古代	—	昭和60年11月16日,土砂崩れにより須恵器片出土
0030	墓	宝三地の塚	ほうさんじのつか	香南町横井	中世	—	立地:水田。範囲:2.5×1.5m,高さ0.8m
0031	墓	横井の塚	よこいのつか	香南町横井	中世	—	立地:水田。範囲:2×1.5m,高さ0.7m
0032	古墳	井原神社西古墳	いはらじんじゃにしこふん	香南町西庄	古墳	—	立地:井原神社西方の山頂(標高132m)。西庄山経塚と同一か
0033	墓	高野神社西の塚	こうやじんじゃにしのつか	香南町岡	中世	—	高野神社古墳の西方100mの平地
0034	古墳	高野神社古墳	こうやじんじゃこふん	香南町岡	古墳	—	平等寺山東方250mの平地。範囲:径15m,:円墳。遺構:横穴式石室の石材が露呈
0035	墓	七人塚の五輪塔	しちにんづかのごりんとう	香南町岡	中世	—	立地:平等寺山の裾部。遺構:五輪塔と思われるものが11個並ぶ
0036	寺院	奥谷の寺跡	おくたにのてらあと	香南町岡	中世	—	立地:城所山2号墳の北方150m。平安時代後期から鎌倉時代の瓦が出土
0037	包含地	池谷遺跡	いけたにいせき	香南町西庄	中世	—	立地:池谷神社の北方100m。平家の落人ゆかりの地,屋敷跡がある。土鍋脚11本が出土
0038	墓	冠纓神社南の塚	かんえいじんじゃみなみのつか	香南町由佐	中世	—	立地:冠纓神社の南200m。塚頂部に小祠。平成3年7月24日試掘調査で遺物なし。圃場整備のため取り壊す
0039	包含地	奥谷遺跡	おくたにいせき	香南町岡	弥生	—	立地:低台地上。石鏃・サヌカイト片の散布地
0040	墓	城1号塚	しろ1ごうづか	香南町池内	中世	—	詳細不明
0041	墓	城2号塚	しろ2ごうづか	香南町池内	中世	—	形態:2×1m。高さ1.2m
0042	窯	新池窯跡	しんいけかまあと	香南町西庄	古代	—	立地:台地上。灰原・窯体の遺存は良好と推定される
0043	窯	音谷池東岸窯跡	おんだにいけとうがんかまあと	香南町由佐	古代	—	灰原の一部は破壊,窯体は未発見
0044	散布地	音谷池西岸遺跡	おんだにいけせいがんいせき	香南町由佐	古代	試掘調査:平成5年1月13日・14日,面積:50㎡,平成5年11月4・5日,面積:165㎡,調査主体:県教委	須恵器散布地。周辺状況からは窯址の可能性は高い。平成5年度の試掘調査により窯本体は確認されていない
0045	集落跡	岡清水遺跡	おかしみずいせき	香南町岡清水	弥生	発掘調査:平成11年4月1日～同年11月30日,面積:5,600㎡,調査主体:県教委	弥生時代後期(竪穴住居・壺棺墓・柱穴・土坑・井戸状遺構・溝状遺構・土壙墓)・中世(掘立柱建物跡・柱穴)・近世(掘立柱建物跡)・時期不明遺構(炭焼き窯)検出
0046	城館	西庄城跡	にしのしょうじょうあと	香南町西庄桜木	中世	平成14年踏査,調査主体:県教委	立地:丘陵裾,城主松本氏。「本丸の山」と呼ばれる南北38m,東西25mの範囲
0047	城館	御所原陣所跡	ごしょはらじんしょあと	香南町池内城	中世	—	長宗我部元親が陣を置く。御所原の地名が残る
0048	塚	池谷1号塚	いけたに1ごうづか	香南町由佐2696-2	中世	調査:昭和62年9月4・25日,調査主体:町教委	石積みは残るが,遺物は出土しなかった

第３図　香川町遺跡位置図（1/30,000）

第２表　香川町の遺跡一覧

遺跡番号	種別	遺跡名	よみ	所在地	時代	調査実績	備考
0001	板石			香川町	中世	—	詳細不明
0002	古墳	万塚古墳	まんづかこふん	香川町役場(高松市仏生山町甲3126-44)	古墳	発掘調査:昭和45年1月10・11日,調査主体:町教委	立地:丘陵上,遺構:両袖式の横穴式石室,玄室幅1.8m,長さ3.98m,羨道幅1.2m,長さ3m,棺台あり,出土品:金環,小玉,ガラス玉,鉄刀,鉄鏃,やりがんな,馬具,須恵器
0003	城館	大野南城跡	おおのみなみじょうあと	香川町大野谷口	中世	平成12年踏査,調査主体:県教委	立地:平地,天正10年,長宗我部元親の侵攻により落城,字城の名が残る
0004	包含地	浅野八幡遺跡	あさのはちまんいせき	浅野宮尾一帯	弥生	—	立地:台地上,出土品:石鏃
0005	塔	吉広守五輪塔多宝塔	よしひろのかみごりんとうたほうとう	香川町東谷久保	中世	—	
0006	古墳	剣山古墳	つるぎさんこふん	香川町川東剣山	古墳	—	
0007	古墳	横岡山古墳	よこおかやまこふん	香川町浅野剣山東中腹	古墳	昭和6年,地権者による発掘	立地:丘陵上,遺構:片袖式の横穴式石室
0008	古墳	東赤坂古墳	ひがしあかさかこふん	香川町浅野東赤坂	古墳	—	立地:丘陵上,規模・墳形:直径19.7m,高さ3.5mの円墳,遺構:片袖式の横穴式石室,玄室幅2m・長3.7m,羨道幅1.3m・長さ3.1m,その他:開口している
0009	古墳	船岡古墳跡	ふなおかこふんあと	香川町浅野船岡	古墳	確認調査:平成17年9月1・2日,調査主体:市教委	立地:平地,規模:10m以上の墳丘,遺構:横穴式石室
0010	古墳	船岡山古墳	ふなおかやまこふん	香川町浅野船岡	古墳	昭和52年測量調査,調査主体:県教委	立地:山頂,規模・墳形:全長51mの前方後円墳と円墳,若しくは72mの双方中円墳
0011	古墳	山下墳墓跡	やましたふんぼあと	香川町大野山下	弥生	発掘調査:昭和47年6月,調査主体:町教委	[illegible]
0012	古墳	八王子古墳	はちおうじこふん	香川町浅野八王子	古墳	発掘調査:昭和47年11月6日~昭和48年3月3日,調査主体:町教委	立地:台地上,遺構:片袖式の横穴式石室,玄室幅1.7m・長さ3.2m,羨道幅1.04m・長さ1.35m,出土品:銅製切子玉,耳環,鉄器
0013	碑石	大鬼婆	だいうば	香川町大野中津	近世	大正元年,大野東区住民が香東川の川普請の際に発見	西嶋八兵衛の業を刻む碑石
0014	古墳	油山古墳群	あぶらやまこふんぐん	香川町川東上・川東下	古墳	—	立地:油山の南面,その他:30基以上の横穴式石室があったとされる
0015	経塚	経塚	きょうづか	香川町東谷下谷	中世	—	
0016	寺院	岐王山極楽寺	ぎおうざんごくらくじ	香川町東谷天神	古代	—	五輪石のみ
0017	塚	道満塚	どうまんづか	香川町安原下第3号下倉	中世	—	
0018	城館	鳥屋城跡	とりやじょうあと	香川町安原下鮎滝	中世	昭和54年,(平成13年踏査,調査主体:県教委)	立地:丘陵先端,当佐氏の居城。城山は,三方が谷となる自然要害
0019	城館	大野北城跡	おおのきたじょうあと	香川町大野中ノ村	中世	平成12年踏査,調査主体:県教委	立地:平地,絵図(香川氏系図)と共に屋敷跡割,及び香川肥前守義成の墓とされる石塔が残る
0020	城館	乾城跡	いぬいじょうあと	香川町川東下乾	中世	—	立地:平地,森氏の居城。南以外の三方に堀跡が明治時代の地籍図で認められ,40／60mの城郭跡と推定される
0021	城館	矢萩(浦生)城跡	やはぎ(うらしなう)じょうあと	香川町川東上浦	中世	平成12年踏査,調査主体:県教委	立地:平地,浦原氏の居城。「城之内」,「公城」,「城之内神社」から,大正年間の流路跡以前の集落地を推定
0022	城館	東谷城跡	ひがしたにじょうあと	香川町東谷	中世	平成12年踏査,調査主体:県教委	立地:丘陵裾,推定地。16世紀中頃,岩部氏は岩部屋敷より,この地に移り住んだとされる
0023	城館	吉広城跡	よしひろじょうあと	香川町東谷	中世	平成13年踏査,調査主体:県教委	立地:丘陵裾,「吉広分」,「シロヤシキ」の地名が残る。城主,吉広兵庫守は讃岐平定の合戦で戦功を上げたと伝わる
0024	城館	龍満城址	りゅうまんじょうし	香川町川東下	中世	発掘調査:平成11年11月8日~12月20日,調査主体:町教委 平成12年踏査,調査主体:県教委	立地:平地,居館:三川氏の居館。発掘調査では,保存された薬師堂の土塁,石垣を確認。幅18~20mで見られる溝の痕跡から,東西156m,南北170mの範囲に城域が推定される
0025	墓	荒神	こうじん	香川町川東下	中世	—	回想のための積石か
0026	板石	(相場武夫宅)			中世	—	詳細不明
0027	墓	安部清明の墓	あべのせいめいのはか	香川町川東下	中世	—	詳細不明
0028	墓				中世	—	詳細不明,源平合戦時の落ち武者の墓と伝わる
0029	配石			香川町川東下	中世	—	詳細不明
0030	配石			香川町川東下建設	中世	—	詳細不明
0031	配石	臼井の塚	うすいのつか	香川町川東下	中世	—	五輪石有り,開墾時の積み石か
0032	配石			香川町浅野	中世	—	原位置を留めないものか
0033	配石			香川町川東下	中世	—	詳細不明
0034	配石			香川町川東下	中世	—	詳細不明
0035	古墳	清谷宅一宅古墳	きよたにはいいちたくこふん	香川町川東下	古墳	—	立地:山裾,遺構:横穴式石室か,石室は人頭大の石で組まれていたとされる。出土品:金環,須恵器片
0036	古墳	清谷古墳	きよたにこふん	香川町川東下	古墳	—	立地:谷,規模・墳形:直径8mの円墳か,遺構:横穴式石室の残骸,その他:周辺に数基の横穴式石室があったとされる
0037	配石			香川町川東上	中世	—	詳細不明
0038	配石			香川町役場	中世	—	詳細不明
0039	包含地			香川町浅野	古代	—	詳細不明
0040	配石			香川町川内原宮下門	中世	—	詳細不明
0041	古墳	龍満山古墳群1号墳	りゅうまんやまこふんぐん1ごうふん	香川町川東下東立満	古墳	発掘調査:平成14年9月18日~11月15日,調査主体:町教委	立地:丘陵斜面,規模・墳形:直径15mの円墳,遺構:両袖式の横穴式石室,出土品:須恵器,土師器,耳環,ガラス玉,鉄器
0042	古墳	龍満山古墳群2号墳	りゅうまんやまこふんぐん2ごうふん	香川町川東下東立満	古墳	地形測量:平成14年9月18日~11月15日,調査主体:町教委	立地:丘陵斜面
0043	古墳	龍満山古墳群3号墳	りゅうまんやまこふんぐん3ごうふん	香川町川東下東立満	古墳	地形測量:平成14年9月18日~11月15日,調査主体:町教委	立地:丘陵斜面
0044	古墳	龍満山古墳群4号墳	りゅうまんやまこふんぐん4ごうふん	香川町川東下東立満	古墳	—	詳細不明
0045	古墳	龍満山古墳群5号墳	りゅうまんやまこふんぐん5ごうふん	香川町川東下東立満	古墳	—	詳細不明

第２章　横岡山古墳（よこおかやまこふん）

１．調査の経緯・経過

高松市香川町浅野に所在する横岡山古墳は，昭和初期，地権者によって発見され発掘が行われた。この後，当地は果樹園に開墾され，石室内は果樹園のための水溜施設となっていたが，昭和61年には旧香川町の指定史跡となっている。出土品については，一部の須恵器が復元され剣山古墳の出土品として浅野小学校で保管されてきた。そして平成18年には高松市との合併により，石室は登録史跡として出土品とともに市へ引き継がれることとなった。また，同時に合併した香南町が保管する埋蔵文化財のなかにも，横岡山古墳出土とされる須恵器及び鉄器が存在することが判明した。こうしたことから，高松市教育委員会は登録史跡として扱うにあたり，その内容を把握するとともに公開整備を進めるための調査を行うこととした。

現地調査にあたっては，古墳の範囲及び石室の内容についての確認を行い，これを記録することを目的として，地権者の承諾を得るとともに，平成19年５月21日付けで香川県教育委員会へ発掘報告（文化財保護法第99条第１項）を提出した。現地では平成19年５月21日より樹木伐採と地形測量を開始し，同年６月４日～15日において石室床面の精査・トレンチ掘削の発掘作業を行い，写真撮影及び測量図化を行なった。また地元を対象とした現地説明会を６月10日に実施し，120名程の参加者があった。この他，公開活動として同年７月20日～９月２日，香川町図書館で調査写真や出土品の展示を行っている。整理作業については，調査終了に引き続き行った。

２．昭和初期の発掘（第４図・図版１～３参照）

横岡山古墳は昭和初期に発見・発掘されており，この時の記録が『香川町誌』，『讃岐香川郡志』において伝えられている。

『香川町誌』では，坂出市にある鎌山共済会郷土博物館に保存されている記録として紹介されており，これによれば，昭和６年８月，地主の津森之治氏が四国電場を設けようとして，造成中に古墳があることが明らかとなり記録がとられたとして，出土品の記録に「祝部土器（須恵器）提瓶大小各１点，壺数個，台付き壺大小数個，椀類数個，弥生土器（土師器のことか）小壺１個，土器破片数個，直刀破片柄頭存せり，鉄鍔１個，鉄斧１個，鉄鏃多数，鉄片（中に幅24センチ，長さ６センチ位の鉄板に銹留のあるものあり）鋲付数個，金環（鍍金剥落）１個，銅環２個，玉類瑠璃色玻璃丸玉１個，黄色玻璃小玉三個」と記している。

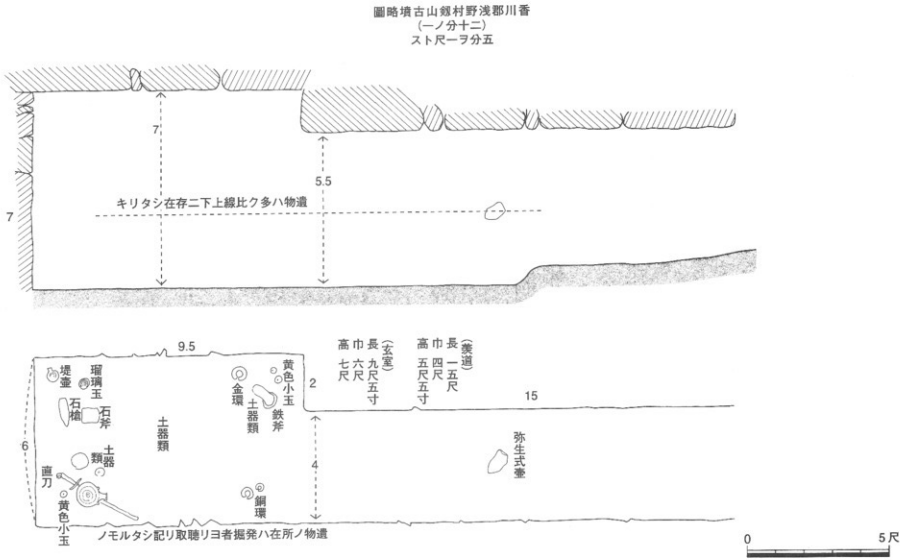
また由来徹証として「船岡山の石棺を始めとして大塚，方塚，高塚等の地名を存する程なれば，その多くは既に破壊され，殆ど遺跡を認め得ざるに至り居れども，石室を存せるものは往々あり，而して此の剣山中にも。亦古墳散在して既に破壊されたるを知れるもの数か所さへあれば，付近一帯に古墳の群集し居りたるを推察し得るなり」と記載されている。

一方の『讃岐香川郡志』の記述では，「此の地の所有者は同村津森之治氏である。昭和７年夏此の地を開墾しようとして，古墳の蓋石を發見し，それより發掘したものである。形状は玄室及羨道を有する塊刀形石槨である。

出土品　１，頸飾玉（２箇）１，銅鏡（３箇）１，石斧（１箇）１，鏃製鏃（１振）１，土器數十箇（但し完全なるもの數箇）是等の出土品は玄室より出づるを常とするに此處では羨道より多くを發掘したのである。昔時に於て既に何物かの手によって發掘せられたものであるまいか」とある。

現在，鎌田共済会郷土博物館で『香川町誌』で記載された内容の資料は確認できないが，「香川郡浅野村鐙山古墳」と題された写真６枚と石室の略図が保管されている。写真をみると，横岡山古墳を写したものと容易に判断できるもので，略図の平面図についても現状の規模・形態において合致している。この写真６枚については博物館が購入した時の記録簿が残っており，その昭和６年９月９日の日付から『香川町誌』に記載された昭和６年８月に行われた発掘に際して撮られたものと理解できる。こうしたことから，当初の発掘において横岡山古墳は「鐙山古墳」と呼ばれていたこととが判明した。

また『讃岐香川郡志』の記述については，不自然な点が認められるものの，発掘の契機及び時期，出土品が羨道のもので占められるといった点が昭和６年の発掘と異なっており，こうしたことから判断すれば，発掘が再度行われていた可能性も考えられる。



第４図　香川郡淺野村剣山古墳（横岡山古墳）略図（1/40）＊鎌田共済会郷土博物館所蔵の原図をトレース，1/2 に縮小

3．立地環境（第５・６図参照）

横岡山古墳は，香川町川東，大野，浅野地区にわたる龍満山東麓に位置する。明治５年に徳島県の剣山大権現社より分霊を受けた大権現社がこの山頂にあったことに由来して，剣山とも呼ばれる。龍満（立満）は，香東川を望むこの山より西側に見られる地名で，また古墳のある東麓に沿う丘陵部は横岡と呼ばれるようである。

現在，この古墳の北側となる丘陵は団地（横岡団地）となっており，その南側に位置する斜面を削り造成されていることが分かる。昭和６年の発掘に際して撮られた遠景写真（図版１）は，団地が造成される以前の状況を写すが，その裏書には，「香川郡浅野村鎧山（古墳）全景　鎧山頂上ノ向ツテ右端中腹ニ斗出シ来レル所稍悉ケタル所ノ上部ニ古墳アリ」と説明されている。また団地が建設される前の地形図（都市計画図）をみると，古墳は龍満山（剣山）山頂から東方向に伸びる尾根を下った傾斜が緩い平坦部に位置しているが，この位置から石室が開口する北方向にも尾根の筋が下り，丘陵の裾は現在よりも大きく広がって認められる。

山の様々な呼称により他の古墳と混同された経緯をもつが，以上からまとめると，その立地は龍満山東麓（剣山中腹のとび出た所）の上部であり，「横岡の頂部」に位置する古墳となる。基本として龍満山（剣山）山頂から東方向へと丘陵は伸びているが，往時は現況よりもその裾が北側に広がっていたと考えられる。そしてこの横岡の丘陵から見るなら，その（山の）頂上にある古墳であり，横岡山古墳と呼んで差し支えないであろう。

なお当古墳との関係は不明であるが，古墳の南東方向に抜ける谷を下った地点において，現在，「加羅土」の地名が認められる。

第５図　横岡山古墳位置図（1/10,000）

第６図　横岡山古墳位置図
（旧都市計画図　1/10,000）

4．現地調査の方法

現地では，はじめにトレンチ掘削，測量の障害となる樹木の伐採及び落葉の除去などの清掃を行った。発掘作業は，石室及びトレンチ調査とも手作業で行った。石室内は腐葉土及び撹乱土を除去し，精査を行い床面の確認を行った。各トレンチは石室の中心を基点に，石室の両側と奥側から延伸するように設定した。この後，北西部にも，同様に１ヶ所追加した。石室の正面側，前庭部分のトレンチでは，果樹園で用いられた階段石を取り除くとともに，平・断面での観察を行いながら排水溝及び墓壙の確認面まで掘削を行った。

測量の方法は，基準高を山頂の三等三角点（標高 146.86 m）から，石室付近に移設して用いた。地形測量については，等高線の間隔を 0.25m とし平板測量で 1/100 の図化を行った。なおこれによる等高線は，樹木の下，地表面の標高を示し，都市計画図等の空中写真測量による地形図と比べ４m程低い値となるが，地図上の位置関係については，この高低差を考慮するとともに各等高線の広狭などによって判断した。石室の測量については，縦断方向に中央軸を設定し，これを基準とし割付を行い，手取りで 1/20 図化を行った。トレンチ調査の土層及び，遺構の平面図についても，石室の測量と同様の方法で行った。石室・トレンチの位置関係は，1/20 図化で用いた基準点を 1/100 地形測量図に平板で測量し求めた。方位は，1/100 地形測量図で用いた磁北を基準とした。

また調査の終了にあわせて各トレンチを埋め戻し，前庭部の排水溝と石室内の礫床については土と土嚢で覆い現状復旧を行った。

5．墳丘・周溝（トレンチ調査）（第7～9図参照）

a）横岡山頂部の現況とトレンチ設定

古墳のある横岡の頂部は，西で剣山の山頂から急激に下る尾根に接し，東は緩斜面，南は急斜面，北は谷あるいは屋面で囲まれた空間で，現在，ほぼ平坦でひらけた場所に天井石が露呈した石室のみ見られ，これ以外で埋葬施設や列石，葺石といった外部施設の存在を示唆する露呈した石材は確認できない。この場所が平坦である一つの要因は，昭和初期の発掘の契機となった霊場の設置と果樹園（柿畑）のための開墾と考えられる。地権者の話や『香川町誌』によれば，大正12年に始まった剣山四国霊場巡礼は，かつて石室の東脇を巡る順路としていたものを，現況の石室西方を巡るものに付け替え，更に石室の西脇には草庵（昭六堂）を設けたという。また柿畑は，石室の東方向に広がる緩斜面に造っていたとされる。こうしたことから，墳丘の規模・形態について現状で窺うことは難しく，石室中心を基点にトレンチを設定し，墳丘盛土及び周溝の確認を行うこととした。トレンチ調査は，石室の中心を基点にまず西側へと延伸し（第1トレンチ），これより12ｍ前後で周溝と考えられる掘り込みＳＤ1を検出した。残るトレンチでは，石室中心から同距離を中心に確認したが，南・東側となる第2・3トレンチでは周溝に相当する遺構はなく，北西側の第4トレンチのみでこれに相当する掘り込みを確認した。

b）周溝

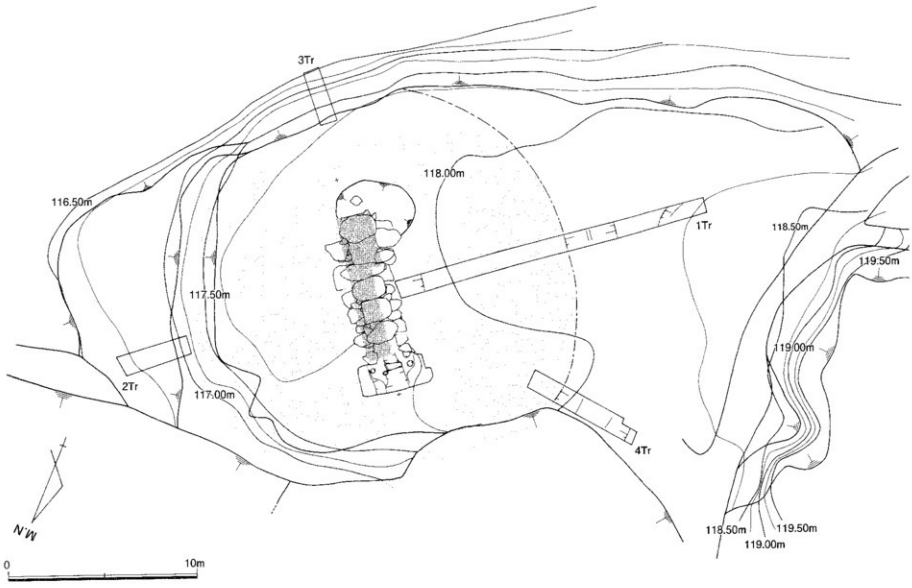
ＳＤ1は，第1トレンチで検出高118.1ｍ前後，幅約3.2ｍ，深度約0.8ｍ，第4トレンチにおいては検出高117.5～117.7ｍ前後，幅約4.4ｍ，深度約0.8～0.9ｍを測る。断面の観察においては何れも墳丘側となる東壁が急傾斜に開削されており，第1トレンチで東岸，第4トレンチでは両岸に2箇所の段部が認められる。埋土については，第1トレンチで中・下層においては風化花崗土を含む黄褐色土を基調としているが，下層（⑦・⑧層）とこの上位の堆積層が示す断面の形態や中層（⑥層）が粘性を帯びることから再掘削された可能性も残る。また上層部のブロック土を含まない赤橙色シルト～粘土層（④層）から，これらの埋没の進行後，緩慢な自然堆積が及ぶことが推察される。一方，これより低位で認められる第4トレンチＳＤ1については再掘削がうかがえる状況ではないが，全体に炭化した有機物が混じる堆積で，第1トレンチとは対照的に下位の堆積で粘性が強く最下層（⑪）は褐灰色を呈する。上方からの水流が停滞する状況を示唆するが，第1トレンチに比べ幅広となることを考え合わせると，当地点で屈曲が強くなる可能性と，以北で溝そのものが浅く途切れる可能性が考えられる。

c）墳丘

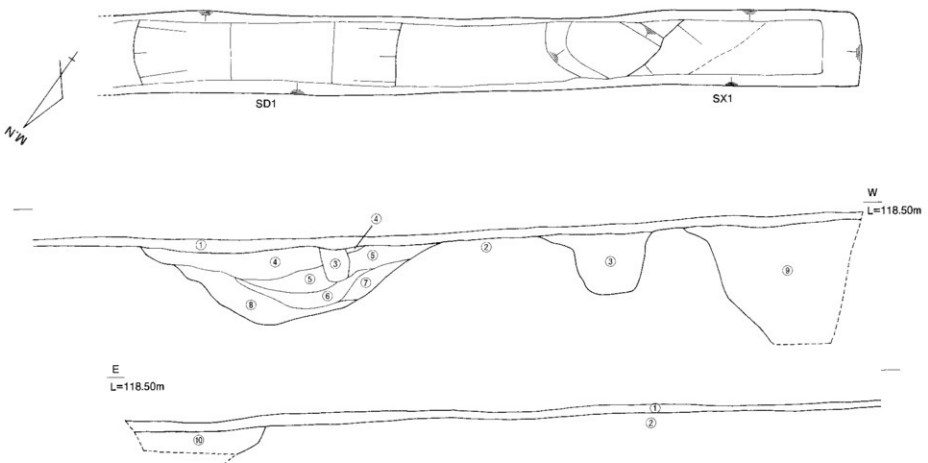
墳丘については，何れのトレンチにおいてもその盛土を示す土層は確認できない。第1～3トレンチでは現地表面である腐葉土層の直下が地山とした風化花崗土層であり，削平の影響が最も少ないと考えられる第4トレンチについても，近・現代の所産である巡礼道，あるいは草庵に伴うと推定される整地直下で，この風化花崗土層が認められる。こうした状況から墳丘の範囲については，ＳＤ1及び地形測量の結果から以下のように想定する。周溝と考えられるＳＤ1は石室の中心から10.8～11.6ｍで墳丘側の肩部が認められ，これを確認した第1・4トレンチの位置する石室の西半側，半坦部では西の尾根から派生する118.00ｍの等高線が同距離付近で転換ないし歪となることから，この円周上に周溝が存在する可能性が高い。一方で，周溝が確認されなかった第2・3トレンチの位置する石室より東半側の斜面部では，上記の石室中心からの距離において117.00あるいは117.25ｍの等高線が円周する点に加え，第2・3トレンチの同地点では平坦部から大きく下る段の下端が認められる。東・南部の斜面については開墾の影響も考慮する必要はあるが，現況に大きな改変は想定できず穏やか原地形を留めるものと判断され，当初より周溝は尾根を断ち割る位置関係となる西半部でのみ開削されたと考えられる。よって墳丘は，最大で石室を中心とした直径22ｍを前後する円周内に想定できる。なお墳丘高は不明だが，石室正面側，前庭部で確認された仕切石と露呈した羨道天井石の上端との高低差は2.3ｍを測り，これ以高と推定される。

d）第1トレンチの遺構

このほか，第1トレンチにおいて，東端で墓壙に相当する掘り込み，及び西端では性格不明の落ち込みＳＸ1を確認している。東端の掘り込みについては，平面の検出のみに留まるが羨道壁面より24ｍ，露呈した石尻からは1.5ｍ程外側で認められ，位置関係から墓壙と推定される。この検出高から3段相当の石積で構築される羨道西壁の内，少なくとも下段から2段目の高さまでは地山を基盤とすることが考えられる。ＳＸ1は深度1.3ｍ以上，トレンチ以西に広がる等高線に逆行する急激な落ち込みで，墳丘盛土に要した土採り痕が想定されるものの，埋土は均一な粘質土の単層であることから自然地形に由来する堆積層の可能性が残る。

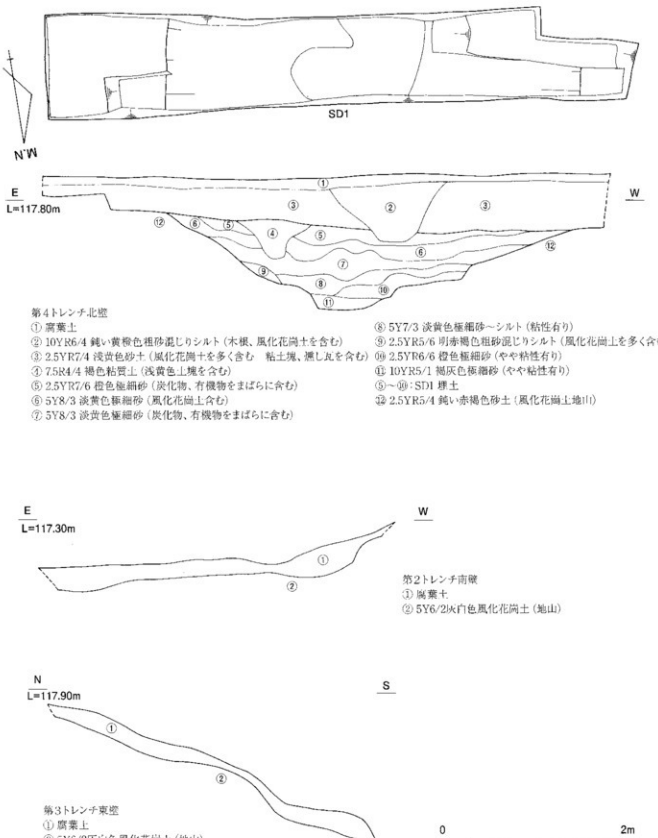


第7図　地形測量・トレンチ配置図　(1/200)



第1トレンチ南壁
① 腐葉土
② 5Y6/2 灰白色風化花崗土（地山）
③ 木根による撹乱
④ 10R6/8 赤橙色シルト～粘土
⑤ 10YR7/6 明黄褐色土（風化花崗土を含む）
⑥ 10YR7/4 鈍い黄橙色土（風化花崗土を含む やや粘性有り）
⑦ 10YR7/8 黄橙色土（風化花崗土を多く含む）
⑧ 2.5Y6/6 明黄褐色土（風化花崗土を若干含む）
④～⑧：SD1 埋土
⑨ 2.5Y8/3 淡黄色粘土（大半部が橙色を帯び、赤色化）：SX1埋土
⑩ 10YR7/4 鈍い黄橙色土（風化花崗土、赤橙色土を含む やや粘性有り）：墓壙埋土か

第8図　第1トレンチ遺構平面図・トレンチ南壁土層図（1/40）



第4トレンチ北壁
① 腐葉土
② 10YR6/4 鈍い黄橙色粗砂混じりシルト（木根、風化花崗土を含む）
③ 2.5YR7/4 浅黄色砂土（風化花崗土を多く含む　粘土塊、漏し丸を含む）
④ 7.5R4/4 褐色粘質土（浅黄色土塊を含む）
⑤ 2.5YR7/6 橙色極細砂（炭化物、有機物をまばらに含む）
⑥ 5Y8/3 淡黄色極細砂（風化花崗土含む）
⑦ 5Y8/3 淡黄色極細砂（炭化物、有機物をまばらに含む）
⑧ 5Y7/3 淡黄色極細砂～シルト（粘性有り）
⑨ 2.5YR5/6 明赤褐色粗砂混じりシルト（風化花崗土を多く含む）
⑩ 2.5YR6/6 橙色極細砂（やや粘性有り）
⑪ 10YR5/1 褐灰色極細砂（やや粘性有り）
⑤～⑩：SD1 埋土
⑫ 2.5YR5/4 鈍い赤褐色砂土（風化花崗土地山）

第2トレンチ南壁
① 腐葉土
② 5Y6/2灰白色風化花崗土（地山）

第3トレンチ東壁
① 腐葉土
② 5Y6/2灰白色風化花崗土（地山）

第９図　第２・３トレンチ土層断面図，第４トレンチ平面図・トレンチ北壁土層図（1/40）

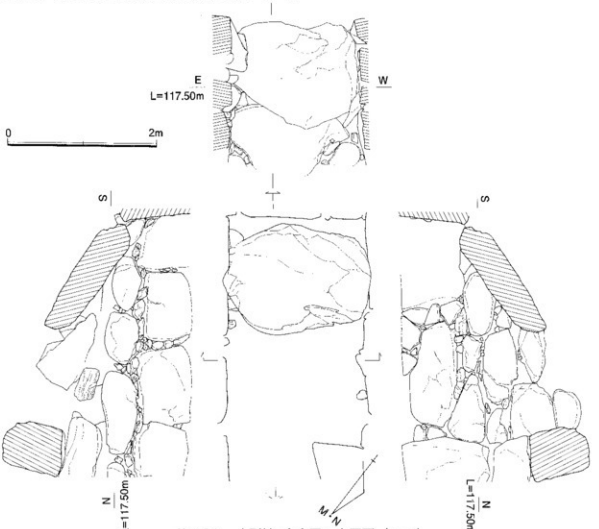
6．石室（第10～12図参照）

a）現況

本石室は磁北より365度西傾して主軸をとり，北方向に開口する横穴式石室である。奥壁から開口方向をみて，袖石を左側に据える左片袖式の石室で，羨道開口付近には立石を両側壁に配した羨門を有する。石室の現況は玄室の上半分，天井・壁面を欠くが，羨道部は概ね良好に遺存しており昭和6年発掘時の写真に合致している。

破壊の大きい玄室は，往時と同様にその奥壁には大きな一枚石が倒壊する（第10図）。現況でみる限りは奥壁上段に鏡石として用いられたものが，側壁の支えを失い倒壊したようにみられる。一方で昭和6年の発掘時のものと推定される石室の縦断面図（第4図）には玄室の天井石が記載されており，発掘時には玄室天井が存在し，その大きさからこの一枚石が天井石として架構されていた可能性が考えられる。この縦断面図は奥壁の基底石及び羨道天井石の大きさが現況と異なって記されている点や，またこれを天井石とした場合，現状のように倒壊するにはこの石の加重が築かった奥壁と側壁を抜き取らなければならず過酷な作業であることから，現実的にはやや信憑性に欠けるが，以下に挙げる点から天井石とする見解も否定できない。①奥壁背面にその基底石の上端まで及ぶ，大きな坑が認められる点，②周辺で散在する石材のうち，天井石に想定しうるものは1石のみであり，その大きさは羨道部のものより扁平でやや小振りである点，③②に関連して，玄室側壁の石積から判断すれば，羨道に比べて広く扁平な天井石が適すると考えられる点があり，石材の大きさについても各壁面の持ち送りを加味すると，鏡石・天井石の何れに用いるにしても大きな違和感がなく，現状で奥壁か天井石かの判断は難しい。

羨道については，原形を留めるが，一部で天井石を受ける側壁上端の石材に割れが認められ安定を欠くほか，樹木及び雨水の影響により側壁が孕む箇所がみられる。また玄室が上方に開口し，羨門が土砂で埋没しているため，石室内は常時水が溜る状況となっている。



第10図　（現状）玄室平・立面図（1/50）

b）規模

石室規模は玄室で，玄室長３m，玄室幅（奥壁幅）1.8 mを測り，玄室床面積約 5.4㎡，玄室長幅指数 1.67 となる。羨道については，現況で開口部末端に架構された天井石の基底までとすれば，羨道長 4.5 m，幅 1.2 m（玄門幅）を測り，羨道床面積は玄室と同様に約 5.4㎡となる。よって石室長は 7.5 m，石室の床面積は約 10.8㎡となる。なお後述するように羨門の外側，前庭部に設定したトレンチ掘削で，墓壙が羨門より墓道方向に延伸することを確認し，これに加えてその内側では側壁に沿う木柱あるいは石材の抜取痕，及びこれに直交する位置で閉塞を示唆するような仕切石が検出されている。現時点でこれらの遺構で構成される空間が，石室構造をもつ埋葬施設に該当する明確な根拠に乏しいが，築造初期の段階で石室が開口方向に長かった可能性が考えられる。

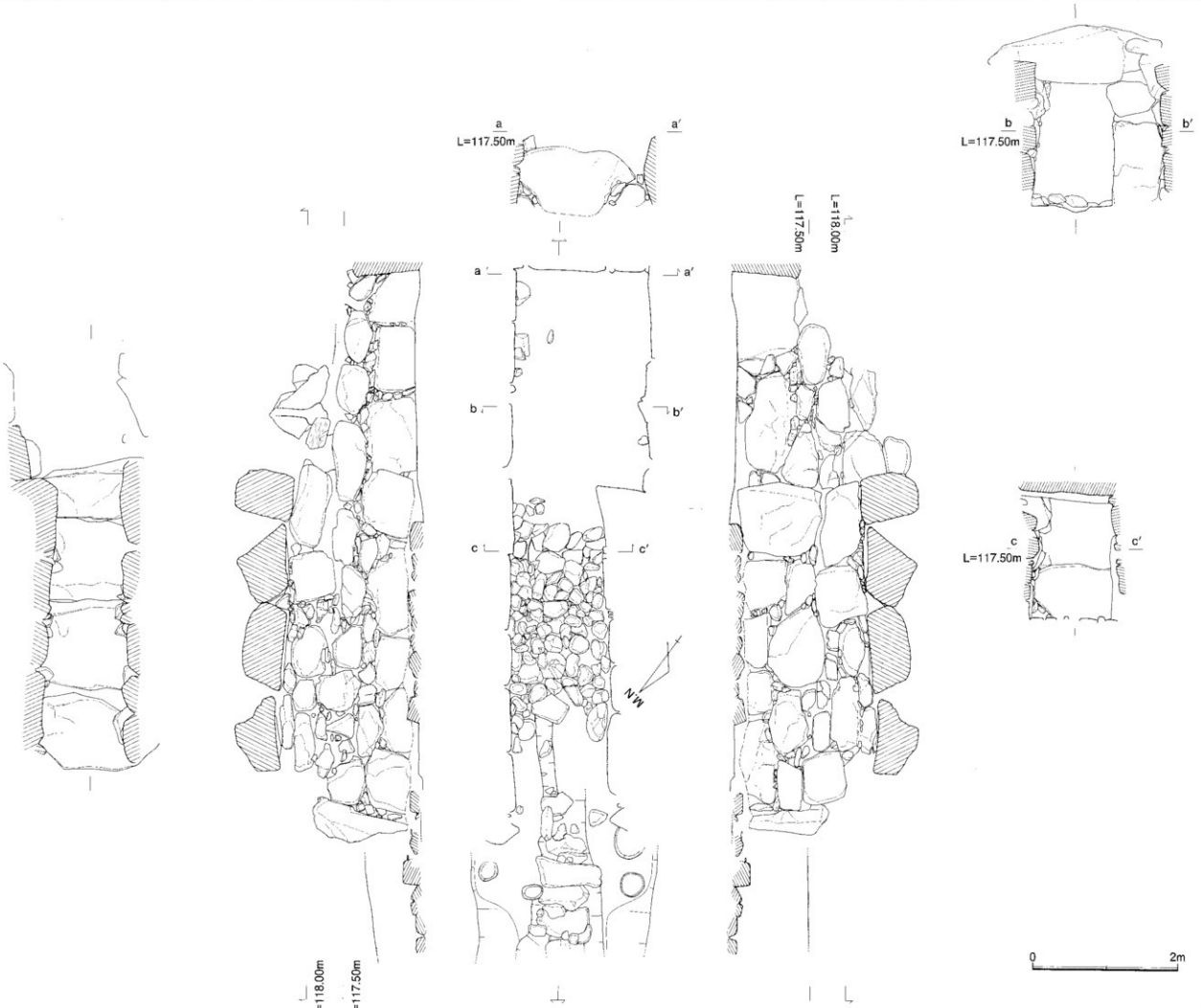
c）石積と石材

石室に用いられた石材は基本的に同山塊で調達しうるやや目の粗い花崗岩であり，これを割った石が積まれている。露呈した上段部のものを裏から見る限り概ね小口積みとするようで，壁面を構成する小口部にはハツリ痕を留めたものが散見できるなど，石室壁面の平滑化を指向するようである。石積の間詰めには，割石の成形で生じたとみられる花崗岩の塊片や川原石を用いており，また玄室を中心に粘土で目地を塞ぐ箇所も認められる。

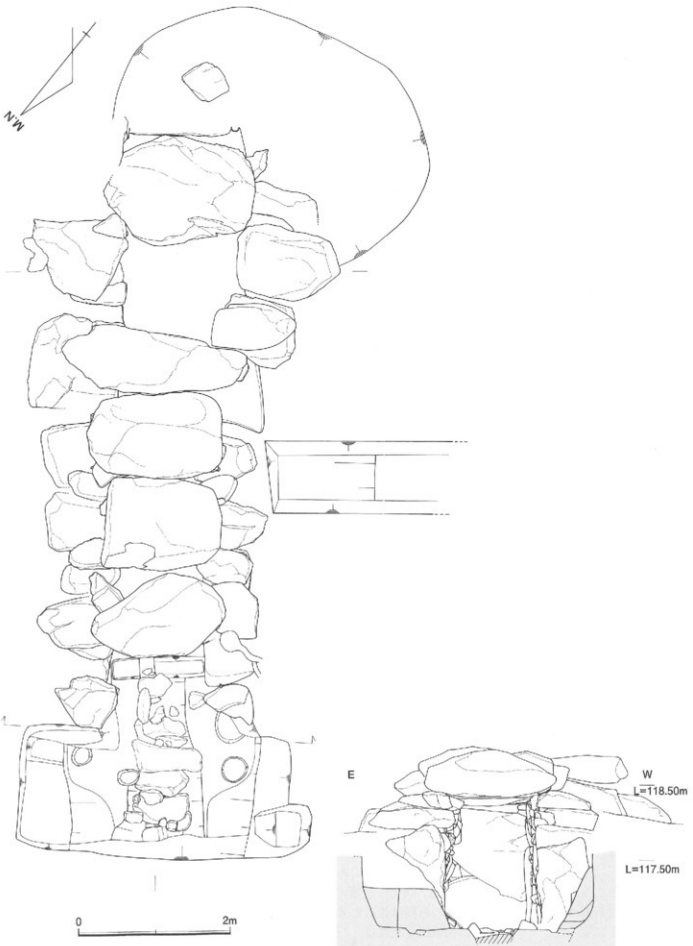
d）石室構造

石室平面は上記の数値にみるように短形の玄室と，長い羨道部がこの右側壁より直に延び，左側壁に袖をもつ。横断面は羨道で持ち送りが弱く長方形に近いが，玄室は遺存のよい玄室北西隅の左側壁において，袖石相当の高さから持ち送りがやや強くなり屈曲することが認められる。またこの箇所では，下端の間詰め石を除けば上部で両壁に架かる石はなく隅角を保つ。天井縦断面は袖石上が楕構造をとらず，玄室側に向く羨道天井は前壁を構成することが分かる。羨道の各天井石は見上げ面に弱い抉りをもち，全体で緩いアーチ状を呈し開口方向へと若干開くようにみられる。羨道は３段相当の側壁と４枚の天井石で構成されており，玄室については奥・側壁とも不詳だが，前壁及びこれに接する玄室左側壁から４段相当と推定される。また奥壁の基底石，玄室南西隅の左側壁基底石，立柱となる袖石及び羨門立柱石は２段相当となっている。目地の通りは，水平方向に石室の右側壁がよく通るが，これに対し袖石をもつ左側壁では通りが悪い。垂直方向の目地は，立柱となる袖石及び羨門との隣接部が比較的揃う。但し，羨道の両側壁とも天井石の２・３石目の境から基底石の上を通り，開口方向から最前列の天井石先端を抜ける範囲が目地の通らない粗雑な石積であり，基底設置後，天井架構までの作業工程が玄室側と異なることを示す。玄室の基底石は，床面が地山まで除去されていることからほぼその下端まで確認でき，奥壁とこれに接する両側壁基底の組み合わせをみると，奥壁が接する左側壁基底石が最も先行し，次いで奥壁基底，奥壁に接する右側壁基底石と据えられており，この左側壁基底は袖石と共に側壁のうちで最も大形であることから石積の基点となったことがうかがえる。奥壁に接する左側壁基底石と袖石との間は３mとなっており，奥壁幅 1.8 mを測るほか，各部位の計測値が示すように概ね 0.3 mの差準が看取される。こうしたことから大形の基底石に挟まれた玄室左側壁は，２段相当まで目地が揃わず，この際間を埋めるような石積になっていると考えられる。袖石の上位で前壁を構成する羨道天井石には，玄室の左側壁と接する箇所で仕口状の浅い切込みがあるが，全体として袖石および前壁側の石積が玄室側よりも先行するようにみられる。上述の目地を考慮すると，玄室側壁のうち上位の石積は，開口方向より３・４石目の羨道天井石の架構をした後に行われた可能性が考えられる。

袖石を平面でみると羨道側の面で抉りが大きく鋭角を呈し，この先端部から計測すると玄門幅 1.2 mを測り，これと同様に石室内側に向って鋭角となる羨門でも，こうした 0.3 mの基準を指向するようである。一方で，この羨門の立石については石室から外を向く方向で設置されているものと考えられるが，大半は墳丘に埋もれ，こうした石室正面側の壁面を丁寧に整えたものではない。上述のように，現状で天井の架からない羨門については前庭部の遺構とともに不明な点が多い。しかしながら，仕切石を通り，墓壙の東西両端にみられる２箇所の抜き取り痕と東側の羨門立柱石，及び西側の羨門立柱石に接する抜き取り痕とを結ぶプランは，主軸に対しやや斜行して交わる奥壁や袖石の前壁側が示す方向とよく似たものとなっている。現状の羨門はこの方向には沿わないが，西側の羨門立柱石が東側に比して小振りとなる点や，加工痕との判別が難しいものの正面側の壁面に大きな縦位の剥離痕を残すことから，この立柱石に接する抜き取り痕は本来の立柱石の大きさを示すことが一つの仮定として挙げられる。このような観点からすれば，２対となる立柱と抜き取り痕，そして仕切石は元来の門部を構成していたことが想定でき，排水溝の蓋石がこのプランを前後に様相が変ることもこれに対応したものと考えられる。



第11図　石室，前庭部平・立面図（1/50）



第 12 図　石室，前庭部上面・正面図（1/50）

d）床面調査

石室内部の堆積状況については，羨道土の堆積が0.2 m前後あり，以下，グライ化した粘土及び砂土がほぼ床面及び地山直上まで堆積していた。このグライ化層は，近代以降の磁器碗・皿，瓦などに加え，板ガラス，ゴム製チューブ管を含む。これらを除去すると，現在，石室が開口する玄室・羨門付近が大きな窪みとして残り，その掘削は地山とした風化花崗土に及ぶことから，本来の床面が削平された状況が考えられる。玄室の撹乱土中で，古墳との関連をうかがわれるものは，数点の須恵器破片と側壁の転落石とみられる花崗岩の割石のみであった。一方，羨門付近の窪みの末端には，踏台状の石を据え，地表面へと階段状に積まれた花崗岩・川原石に連続していた。石室との関連も考えられたが，石材を除去した結果では，大半が撹乱土に後出して設置されたことが判明し，その関連性はないものと判断した。こうしたことから羨道中央部のみで，拳～人頭大となる川原石の敷設が確認され，床面を留めることが判明した。この礫床面に至る過程で部分的な褐色土の堆積や須恵器，間詰めの転落石とみられる花崗岩細片，炭化物が若干量認められた。しかながら，これら礫床の上部において明確な床面を設定しえなかった。羨道天井高については，この礫床面から天井石までで1.7～1.8 mを測る。

e）遺物の出土状況（第4・15・17図参照）

当調査での出土遺物は，床面が残る羨道中央部のものが古め，出土層位は大半で撹乱土中から礫床に至る間の褐色土中で認められた。礫床面に絡むかたちで出土したものは，15などの須恵器壺類の破片が礫に咬んだ状態で散見された他，10の土師器壺と6の無蓋高坏は底部を上向きにLI縁部を礫間に挿めされた状態で，7の短頸壺蓋は礫間に挟まって認められている。このほか3・4の須恵器坏，12の提瓶は，器形が完存し概ね原位置を保つものとみられるが，何れも礫床との間に数cm程の褐色土を挟むことから，礫床敷設当初に供献されたものではないと考えられる。また礫床に絡む須恵器片と同様なかたちで，4の坏は側壁の間詰めに噛んでおり，2の坏のような前庭部出土品と接合関係をもつものの存在から，石室内の片付け・掻き出し行為を示唆する状況と考えられる。

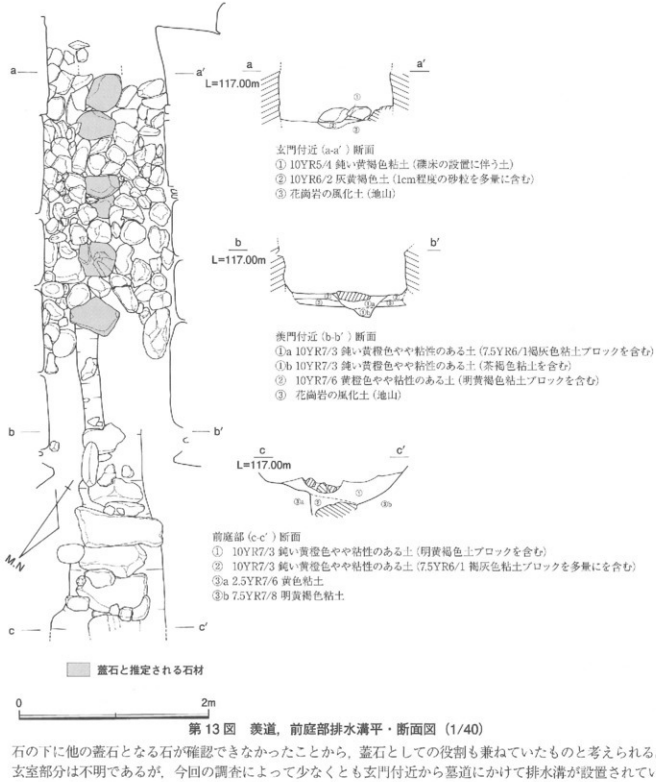
昭和6年の発掘時に推定される略図は，玄室で多数の出土品があったことを示すが，この図については，石槌・石斧といった明らかに時期を遡えたものもみられるが，縦断面図に記された天井高から推定すれば，当時，玄室を中心に床面が遠存していた可能性が考えられる。出土品の配置をみると，玄室の隅に直刀，玉，耳環，鉄斧，提瓶があり，土器片が中央部に集中するようだが，これにより棺の配置などを特定することは難しい。なお，これまでの調査歴において，棺台や鉄釘など遺物や出土状況から棺の存在をうかがえるものは確認できない。

7．排水溝（第13図参照）

a）形態と構造

玄門付近（第13図－a-a′），羨門付近（第13図－b-b′），羨門から墓道までの間（第13図－c-c′）の3ヶ所で平面もしくは断面で排水溝を確認した。羨道は先述したように羨門付近と羨道と玄室との境界付近の一角が大規模に撹乱されていたが，玄門付近（a-a′）で礫床下の断面に幅50cm，深さ5cmのU字形の溝，その断面に連続し玄室へとのびる僅かな窪みを確認し，羨門付近（b-b′）では，幅50cm，深さ20cmのV字状に近い形態の素掘りの溝を断面と平面で確認できた。今回の調査では礫床下の調査を行なっていないため詳細は不明であるが，礫床の円礫の中に混ざっている角礫（トーン部分）が，排水溝が設置されていると想定される箇所（トーン部分）に並んで認められた。以上のことから，この双方で確認できた細い素掘りの溝は羨道の礫床下を通り，接続するものと考えられ，羨道の中央やや右（玄室から見て）よりに湾曲した形で設置されたと推定される。そして，溝上の角礫が礫床と石蓋の役割をかねているものと現状では考えられる。

一方，羨門から外へと延びる箇所（c-c′）では前庭部のほぼ中央部を貫き，墓道側へと延びていくことが平面検出と前庭部北側の土層断面から確認でき，トレンチの範囲内で長さ約22m，幅0.8～1 mを測る。平面検出時は，仕切石と考えられる大型の石と溝の上面が確認された。そのため，溝は仕切石の中央を横断し，仕切石はその溝の上を高架しているような状況であろうと考えられた。実際にその検出された溝の掘削を行ったところ，長さ60～70cm，幅30～40cm程度の花崗岩や川原石を溝の方向に対して長軸を垂直方向に配列した石列が確認できた。これらの石列は蓋石と考えられ，その下に素掘りの溝が掘られているものと想定されるに至った。そのため，当初検出した溝は，石列の掘り方であることが判明した。仕切石は石列の石より大きな石が使用され，他の石よりも高い位置に設置され，平坦な面が上側になっている。また，この



第 13 図　羨道，前庭部排水溝平・断面図（1/40）

石の下に他の蓋石となる石が確認できなかったことから，蓋石としての役割も兼ねていたものと考えられる。玄室部分は不明であるが，今回の調査によって少なくとも玄門付近から墓道にかけて排水溝が設置されていたことが判明した。しかし，排水溝の規模・形態の点で先の a-a′・b-b′の 2 ヶ所と c-c′の羨門より外側の箇所では齟齬が認められることも明らかとなった。今回の調査では礫床下や石列の下層の状況を調査していないため，この齟齬を理解するための確固たる証拠は得られておらず，今後の調査の課題である。しかし，先述したように石列を蓋石と理解すれば，その下層に羨道部と同様な規模の溝が連続していると想定でき，上部構造が場所で異なっていると理解できる。県内の他の古墳の排水溝と比較してみると，素掘りの排水溝に同規模もしくはやや小さい石を使用した蓋石を設置した古墳として本法寺西古墳，緑塚 12 号墳，長砂古 4 号墳などがあり，これらの事例からも本古墳の排水溝も同様な構造になる可能性は十分想定できる。加えて，一部土層断面図からの推定になるが，先の想定に基づくと，排水溝の底のレベルは羨道側とほぼ同じかやや低くなると想定され，玄門側から墓道に向かってやや傾斜した排水溝が設置されたと想定できる。そのため，先に述べた羨道部の角石が仮に蓋石を兼ねていたとすると，他の古墳同様に羨道から墓道にかけて素掘り溝に蓋石をもつという構造の排水溝としての理解が可能である。

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
上林町竹部地区		近世，近代	旧河道	土師質土器，須恵器，陶磁器	
林町中林地区		近世		土師質土器，須恵器	
鶴市町御殿地区				陶磁器	
横岡山古墳	古墳	古墳	石室，周溝	土師器，須恵器	
一番丁小学校遺跡	集落	中世	土坑	土師質土器，須恵器，陶磁器	
西春日町北山浦地区			旧河道	土師器	
林町坊城地区					
空路４号塚	塚			土師質土器，須恵器，瓦	
上林町本村地区					
史跡 讃岐国分尼寺跡	寺院	古代，中世	柱穴	土師質土器，陶磁器，瓦	
特別史跡 讃岐国分寺跡	寺院	古代，近世	低地／旧河道	瓦，陶磁器	

高松市内遺跡発掘調査概報
―平成19年度国庫補助事業―
平成20年3月31日発行
編集　高松市教育委員会
発行　高松市番町一丁目8番15号
印刷　有限会社 河嶋商会

b）設置順序とその時期

この排水溝の設置時期は，前庭部での排水溝検出時に確認できた墓壙（石室）の掘り方が溝の掘り方（石列設置のための堀り方）に切られていることが確認できたことから，石室をある程度構築し，墓壙の掘り方を埋め戻して石室の石が安定した段階に排水溝および蓋石（石列）を据えるための堀り方を掘削し，石を設置後埋めもどしたものと考えられた。ところが，検出された溝の掘削を行ったところ，確認された羨門付近の石列からは甕の胴部片が石の間に食い込むような形で出土した。そのため，少なくともこの箇所は初葬後の開口時に排水溝の石列が露出している状況であったと考えられ，開口時の石室内部の掻き出し行為などによってこの箇所に須恵器片が落ち込んだものと推定された。また，この遺物が出土した箇所のみが石材の大きさと配列が他の箇所とは明らかに異なっており，排水溝設置後にこの周辺のみになんらかの手が加えられた可能性を示すものと考えられた。可能性のある行為としては溝の排水性向上のための改修や，羨門付近であることからすると，追葬時の開口時に閉塞石の除去などが想定される。後述する第14図の前庭部縦断面の土層が羨門付近へと下っている状況や，須恵器が出土した範囲が羨門付近に限定されることを考えると，これらの行為は初葬後の開口によって行なわれたものであると言えよう。

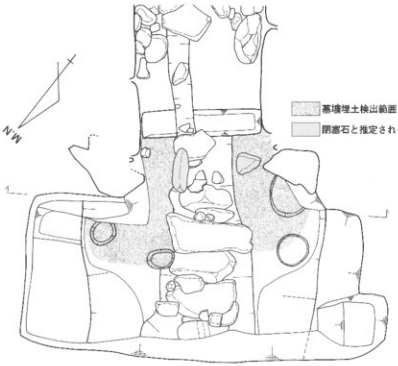
以上のことから，排水溝自体は当初から設計されており，先述したように石室構築時に掘削され，蓋石を設置後，排水溝検出面まで埋め戻されたものと考えられる。礫床の上面レベルと前庭部の床面のレベルがほぼ同一であることからも，初葬を執り行う段階にはこの羨門の外の箇所は埋め戻され仕切石のみが見える状況となり，この排水溝は暗渠としてその機能を果たしていたと考えておきたい。

8．前庭部調査（第14図参照）

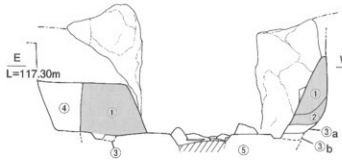
羨門から墓道との接続箇所までの空間を前庭部として呼称することとしたい。後述するように，この前庭部については調査の性格上明らかにできていない点，調査時に所見の整合性をうまく整理できていないかった点がいくつかあるため，遺構の解釈上いくつかの可能性を残したものとなっている。これらの問題点は今後の調査によって検証されることを期待し，ここでは，前庭部の調査によって得られた知見の整理とその過程で整合性をもって説明できる点，さらにそれに基づいて想定できる前庭部で行われた行為のいくつかの可能性について整理しておくこととしたい。

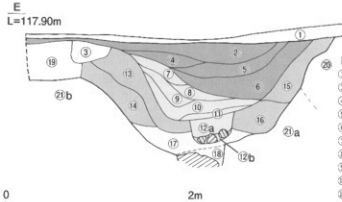
a）基本土層と開口の回数

表土直下から前庭部の掘りこみラインが断面西側で明瞭に確認でき，その掘りこみ面から排水溝敷設のための掘りこみ（18層）が行われている。前庭部および墓道が掘りこまれた地山は，粘土層の上に花崗岩が風化した土が堆積している状況で，前庭部の基底部に堆積していた土もこの土を含んでいる。この掘りこみラインの上位に堆積する17層は，第14図の縦断面の9層（以下，9層）で確認できた前庭部の埋土で，前庭部の床面を形成する際に使用されている土と非常に似ている。このことから，初葬後，初めての開口時に前庭部を覆っていた17層および9層と同様な堆積土の大部分を掘削し，17層および9層の位置まで掘り下げたと考えられる。以上の点から，17層と9層は初葬時の閉塞に伴う埋土であり，初葬後初めての開口時に掘削されず残った土でもある。また，後述する石の抜き取り痕跡からも，この開口のための掘削は本来の床面とほぼ同レベルまで行われたと考えられ，追葬段階に初葬時に近い形で前庭部を大規模に掘削し石室の開口を行ったものと判断できる。しかし，以上の点を総合すると，閉塞後1回目の開口時には仕切石はほとんど見えていない状態であったと考えられる。次の17層の上面に堆積する13～16層の一群は，花崗岩の風化した地山の土もしくはそれを多量に含む土で構成されており，これは，2回目の閉塞時に使用された埋土で，本来は，同様の土で石室の前庭部などは埋まっていたものと考えられる。レベルなどから縦断面の第8層がこれに対応するものと考えられる。さらに，この層群の上位の6・7～11層の堆積層からその後さらにU字状に掘りこまれた様子が分かる。これは石室を再度開口した際の所産によるものと考えられる。縦断面3～7層（以下，3～7層）の南側を斜めに掘削されているような状況が認められ，仕切石上から羨門に向かってさらに掘りこんで，開口を行っている様子が確認できる。7～11層および5～7層はこの開口後の閉塞段階の埋土の堆積である。また，縦断面7層の中ほどから上面にかけて後述するように須恵器壺の破片（第19図19）が多数出土し，同時期の埋土と考えられる5層からも遺物が確認されている。これは追葬時などの片付けの所産と考えられる。また，10・11層は風化土を含んでいたが，これは閉塞後，しばらくの間は埋め戻されなかったために表層が風化したか，当時の風化した隣接地の表土層が埋め戻しの際にまとまって使用されたためと考えられる。その下の12層は，先の大型のU字状の掘りこみ面から掘りこまれたもので，



前庭部堆断面
① 10YR7/6 明黄褐色粘性のある土（灰色粘質土ブロックを含む）
② 10YR7/6 明黄褐色やや粘性のある土（2.5Y8/1 灰白色粘質土ブロックを含む）
③ 2.5Y8/4 淡黄色やや粘性のある土（細粒、粘土風化ブロックを含む）
④ 10YR7/6 明黄褐色やや粘性のある土（地山の花崗岩の風化した砂粒を多量に含む）
⑤ 10YR7/4 鈍い黄橙色やや粘性のある土（地山の花崗岩の風化した砂粒を多量に含む）
⑥ 10YR7/6 鈍い黄橙色やや粘性のある土（地山の花崗岩の風化した砂粒を多量に含む）
⑦ 10YR7/6 鈍い黄橙色やや粘性のある土（明黄褐色のブロックを含む）
⑧ 10YR7/6 鈍い黄橙色やや粘性のある土（地山の花崗岩の風化した砂粒を小量に含む）
⑨ 10YR7/3 鈍い黄橙色やや粘性のある土（明黄褐色のブロックをわずかに含む）





初群時
2回目閉塞時
3回目閉塞時
それ以後

表門部側横断面
① 10YR7/3 鈍い黄橙色やや粘性のある土（明黄褐色のブロックを少量含む）
② 10YR7/3 鈍い黄橙色やや粘性のある土（明黄褐色のブロックを多量に含む）
③a 10YR7/3 鈍い黄橙色やや粘性のある土（7.5YR6/1 褐灰色土を少量含む）
③b 10YR7/3 鈍い黄橙色やや粘性のある土（7.5YR6/1 褐灰色土を多量に含む）
④ 7.5YR7/6 明黄褐色粘土
⑤ 10YR7/6 黄橙色やや粘性のある土（明黄褐色土のブロックを含む）

トレンチ北壁
① 表土 ② 7.5YR7/8 黄橙色粘質土（1～2mmの砂粒を含む）
③ 5YR5/6 明赤褐色粘質土
④ 7.5YR7/8 黄橙色粘質土（1～2mmの砂粒を多量に含む）
⑤ 7.5YR6/8 橙色粘質土（1～2mmの砂粒を含む）
⑥ 7.5YR7/6 明褐色粘質土（0.5～1cmの砂粒を含む）
⑦ 7.5YR4/3 褐色土（1～2mmの砂粒を多量に含む）
⑧ 7.5YR7/6 橙色土（1～2mmの砂粒を多量に含む）
⑨ 7.5YR6/6 橙色土（1～2mmの砂粒を多量に含む）
⑩ 7.5YR4/3 褐色土（1～2mmの砂粒を多量に含む）
⑪ 7.5YR5/4 鈍い褐色土（1～2mmの砂粒を含む）
⑫a 7.5YR5/4 鈍い褐色土（7.5YR4/2 灰褐色土を多量に含む。炭化物・遺物含む）
⑫b 7.5YR5/4 鈍い褐色土（7.5YR4/2 灰褐色土を15b層より多量に含む）
⑬ 5YR6/6 橙色の粘性のある土（17層の崩落土を少量含む）
⑭ 5YR6/6 橙色の粘性のある土（17層の崩落土を多量に含む）
⑮ 10YR7/6 明黄褐色土（17層の崩落土を含む）
⑯ 5YR6/6 橙色の粘性のある土（0.5～1cmの砂粒を多量に含む）
⑰ 10YR7/3 鈍い黄橙色のやや粘性のある土（明黄褐色土ブロックを含む）
⑱ 10YR7/3 鈍い黄橙色のやや粘性のある土（7.5YR6/1 褐灰色土ブロックを多量に含む）
⑲ 7.5YR5/4 鈍い褐色粘土（橙色粘土ブロックを含む）
⑳ 7.5YR7/6 橙色花崗岩が風化した土
㉑a 2.5Y7/6 黄色粘土（1～2mmの砂粒を含む） ㉑b 2.5Y7/6 明黄褐色粘土

第 14 図　前庭部トレンチ平・断面図，北壁土層図（1/40）

開口時に設けられた施設と考えられる。この前面の縦断面では観察できなかったため，ピット状のものか，墓道側へと延びる溝状の施設と考えられる。その最下部では集石が認められ，後述するように遺物も出土している。以上の堆積の上面の第2・4～6層には赤褐色系粘質土が堆積している。この堆積土は，先の6・7～11層と明らかに色調および土質の異なるものであり，堆積時期が異なるものと考えておきたい。ただし，この堆積がどのような行為の所産であるかは特定できていないが，開口にともなう可能性もなくはない。

以上の土層の状況から少なくとも初葬後2回の開口行為が行われたものと想定される。この開口回数が追葬回数とイコールという図式が必ずしも成立しないことがこれまでの研究において指摘[注1]されており，追葬回数については慎重にならざるを得ないが，本古墳の昭和7年の調査で側環3個体が出土しているということ[注2]を考えると，少なくとも1回は追葬がなされたと想定できるであろう。

b）前庭部の形態と調査時の所見

前庭部の平面形態は，羨門立柱から緩やかに湾曲しながらハの字状に開き，最大幅2.5m となる。その後，トレンチの北側で幅1.2m となり最も窄まることから，この付近で墓道に取り付くと考えられる。前庭部の上場は，検出段階で羨門立柱の外側のラインから谷側に向かって比較的真っ直ぐ伸びるが，その壁面は地山をやや掘りこんでおりオーバーハングしている。検出状況では，羨門付近を基準とすると長さ1.3m，幅2.5m の空間が前庭部として認識されたが，後述するように仕切石を基準とすると前庭部と呼べる空間の確保は意図されていないこととなる。この他に前庭部では羨門立柱に直列する形で直径約25～45cm，深さ10～15cm の非常に浅いピットが確認でき，これらのピットは次のような状況が認められる。

i）浅い掘り方である。　ii）墓壙の掘り方を埋めた後に掘り込んでいる。

iii）前庭部の床面より少し高い位置（羨門側土層断面の第3層，前庭部縦断面の9層上面相当）から堀り込まれている。

iv）配置，大きさ，形状いずれも計画性があまり認められないが，北側のラインは比較的合致し，石室の両壁の延長線上に設けられている。

以上の4点から墓壙の掘り方を埋める段階かその後の前庭部の床面を整地した段階以降に，なんらかの施設が設置されたと考えられる。そのため，閉塞後の開口時の可能性も十分考慮しておく必要がある。また，先述したピットの特徴から調査時は羨道に関わる石が設置されていたような痕跡として認識していたが，その後，土生田氏の研究（1991a・1998）を知り，木柱の可能性も非常に高いと考えるに至った。そのため，上記の特徴から想定される双方の場合について整理・検討し，今後の調査研究の蓄積に備えたい。

①木柱の痕跡の場合

先のiv）の特徴と土生田氏が集成し検討された結果を照合するならば，石室の両壁の延長線上にピットが存在する新潟県新井市の梨ノ木3号墳（県史編纂委員会1983），奈良県石のカラト古墳（高橋2005）例のような石室に伴う建築物に該当するものと考えられる。ただし，初葬後の閉塞の際の埋土に掘りこむ形でピットが形成され，その後埋め戻されていることから，初葬後の1回目の追葬／儀礼に伴う開口時に掘削し，設置されたものと考えられる。そのため，追葬／儀礼関連する施設と考えられ，土生田氏の言う礼拝堂的性格の施設である可能性が高い。しかし，i）の特徴からすると，かなり簡易な施設であったと思われる。

②石を設置した痕跡の場合

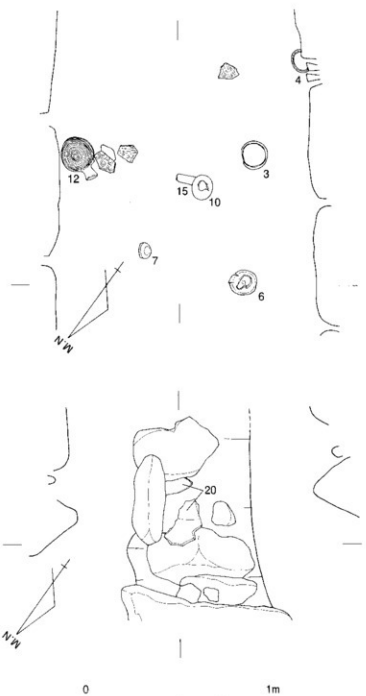
石の場合，仕切石のところまで（羨門部の外側に約1m 程度の範囲）に羨道のように石を積んでいたと想定でき，穴の大きさから羨道よりは小型の石を利用した可能性が考えられる。また，埋土の中には利用されていたと考えられるような石がいくつか出土している。そして，既述した土層の把握とiii）の特徴からも明らかなように，この石の抜き取り行為は，初葬後1回目の追葬／儀礼に伴う開口時の所産と判断できる。その後，閉塞時に前庭部を埋め戻す際にその抜き取り穴に土が溜まってピット状の痕跡として残ったものと理解できる。

以上のことから，この場合，初葬時には羨門から墓道に接続するまでのこの空間には石材が設置されており，通路状を呈していた可能性が想定される。しかし，その場合問題となるのが，その空間を⑧羨道として認識していたか，⑤前庭部（もしくは石室外の空間）として認識していたかである。⑧の場合，石を抜き取るという行為は前庭部という空間を新たに確保したこととなる。これは，機能の変化を意味し，開口時の横穴式石室への認識が変化したと言える。⑤の場合，石を抜き取ることによって前庭部により広い空間を確保しようとしたことになる。いずれにしても，「ことどわたし」などの儀礼／祭祀などの行為と関連して空間確保が図られた可能性が想定できる。特に⑧の場合は大きな変化と言え，儀礼／祭祀への認識の変化を示す

可能性も考えられる。仕切石が羨門と一致していない点を考慮し，仮に仕切石の位置が初葬時の石室の内と外とを分かつものであったとするならば，㋐の場合が想定できよう。

c）遺物出土状況

前庭部では，須恵器の坏身（第16図2）が前庭部トレンチの最も北側の前庭部が最も窄まる部分（第14図），すなわち墓道との取り付き部分の掘りこみ（第14図の断面㋐a）の中の集石上から半分が出土した。残りの半分は羨道で出土している点から，この坏身は掻き出し等に伴うものと考えられる。また，前庭部の堆積土の中からは須恵器壺（第16図19）の破片が出土した。出土位置は，縦断面の7層の中位～上面にかけてであり，前庭部の床面よりかなり浮いた位置で，比較的面的に出土した。この破片は羨道部出土の破片とも接合している。焼成の状況から少なくとも2個体の可能性がある。この他に，羨道部出土の須恵器広口壺（第16図13～15）と同一個体と考えられる口縁部片，須恵器の細頸壺や坏と考えられる小片，土師器片などが出土している。坏身や壺の接合関係からも，これらの破片は掻き出しに伴う所産と考えられる。排水溝の石列の間および石列の上面から須恵器甕の体部片（第16図20）が出土し，これらは接合した。この他，胎土／色調・焼成から別個体と考えられる甕体部片も出土している。先の堆積過程と開口回数の検討と合わせて考えると，壺の破片をはじめとする7層出土の破片類や坏は初葬後2回目の開口時に伴い，掻き出されたものである可能性が考えられる。石列の中から出土した甕の体部片は，どちらの開口時に伴うものであるかは限定できない。



第15図　羨道，排水溝遺物出土状況図（1/20）

9．閉塞（第14図参照）

調査前に羨門の間には階段状に川原石が積まれており，閉塞石が残存しているものと想定していた。しかし，これらの石は腐葉土の上に積まれていたことが確認でき，これらの川原石は後世に再度積みなおされたものであることが判明した。川原石は近代に水溜として利用されていたことからも，その際に本来閉塞石であった石を再利用して積みなおしたものと考えられる。縦断面（第14図）の1層上面の斜めに落ちるラインはこの行為に伴って形成されたものと考えられる。排水溝および前庭部の掘削を行っていく中で，羨門付近で排水溝や礫床とは異なる石が2石（第14図のトーンの石）確認でき，これらは初葬時の閉塞の痕跡を示すものと考えられる。しかし，それ以外は後世の攪乱によって閉塞状況を確認するような状況は残されておらず，不明である。

10. 出土遺物（第16～21図参照）

a）平成19年度調査出土遺物

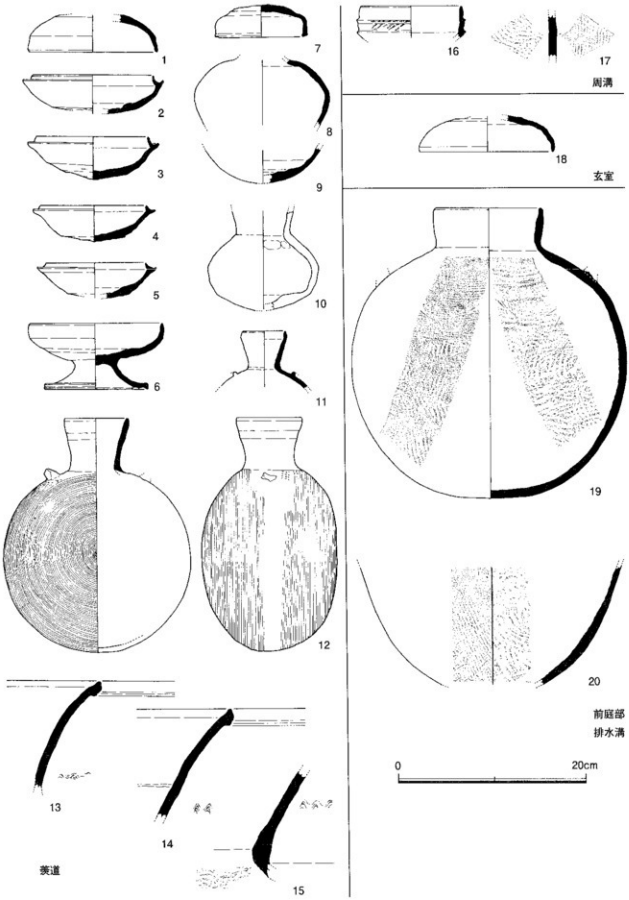
1～20は，平成19年度調査により出土した遺物である。出土遺物はこれら図化した以外にも，須恵器壺・甕の体部片を中心に，須恵器片が若干量認められる。1・9・11・18については，旧香南町の保管品と接合関係を有する。1～15は羨道から出土，16・17は第1・4トレンチ周溝出土，18は玄室出土，19・20は前庭部トレンチの出土遺物である。

1は，須恵器坏蓋である。口径13.6cmに復元でき，天井部には回転ヘラ削りの調整痕が認められる。2は，須恵器坏身である。羨道，前庭部トレンチで別途出土したもので，接合関係が確認された。口径12.5～12.8cmを測り，器高は浅く底部には丸みを残す。かえりは内傾した後，直立気味に立ち上がる。回転ヘラ削り痕より，左回転の轆轤方向がうかがわれる。3は口径11.9～12.4cm，器高4.5cmを測る須恵器坏身。底部は回転ヘラ削りを施すが，末端は未調整である。ヘラ削り痕からは，右方向の轆轤回転が考えられる。外面には，緑色の自然釉が掛かる。4は口径11.1cm，器高3.8cmを測る須恵器坏身。底部未調整。口縁内側から外面にかけて，灰オリーブ色の自然釉が掛かり，受け部には熔着痕が認められる。5は，口径10.8cmを測る須恵器坏身。底部未調整。外面には緑色の自然釉が掛かる。6は，須恵器無蓋高坏。坏部が内湾する短脚のもので，脚は幅広で外方向に踏ん張る。口径14.1cm，器高7.0cm，底径10.9cmを測る。7は，須恵器短頸壺蓋。口径9.8cm，器高3.4cmを測り，天井部は未調整。8・9は須恵器長頸壺の体部及び底部で，同一個体の可能性が考えられる。体部外面に灰白色の自然釉が掛かる。10は，土師器甕。口縁，及び底部下端を欠き，口縁を逆さにして礫床中に埋まっていた。11は小形の須恵器提瓶で，口縁部は内湾し漏斗状を呈する。外面には灰白色の自然釉が掛かる。12は，大形の須恵器提瓶。口径6.6～6.9cm，器高24.7cmを測る。内湾し，漏斗状となる口縁部をもち，吊り手は欠損するが環状にならない。焼成は良好で，一部赤褐色に焼き締まる。体部は格子目状の叩き後，カキ目を施す。13～15は，須恵器広口壺の口縁部・頸部である。何れも外面には，若干の櫛描き波状文を施す。口縁部は内側の端部と外面の下端に強いナデを施すもので，前庭部中～下層の出土品に，同一個体と考えられるものがある。15は，外面下半に白色の自然釉が掛かる。体部内面は，青海波を残す。16は第4トレンチ周溝ＳＤ1の出土品で，無蓋高坏口縁部。口径10.6cmに復元され，ほぼ直立する口縁部をもつ。外面は小さく突出する2つの段により区画し，列点文を施す。焼成は良好で堅緻。17は第1トレンチ周溝ＳＤ1の出土品で，須恵器甕あるいは壺体部片。外面は平行叩き後にカキ目を施し，内面には青海波を残す。焼成は良好で堅緻である。18は玄室掘削土の出土品で，旧香南町の保管品と接合関係をもつ須恵器坏蓋。口径14.1cmを測り，天井部は未調整。19は須恵器壺である。前庭部トレンチ中～下層において破片が暫時出土したもので，口縁部から底部にかけての3個体を図上復元した。直立する口縁と卵形の体部をもち，肩部には耳の貼付け痕が残る。外面は体部下半に平行叩き，その後上半部にはカキ目を施す。内面は体部に青海波が残る。焼成は良好で，内外面に灰オリーブ色の自然釉が掛かる。羨道の出土品にも，同一個体の可能性があるものが認められる。20は前庭部トレンチで，排水溝より出土した須恵器甕，あるいは壺体部である。外面は平行叩き後にカキ目を施すが，下端に摩耗が認められる。

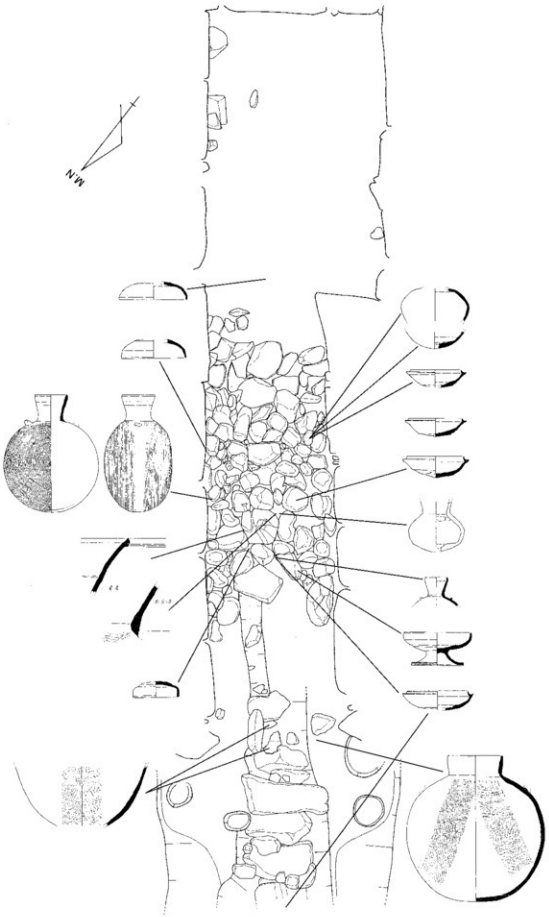
以上の所属時期は，無蓋高坏16がＴＫ43型式，須恵器坏身2がＴＫ209（古）型式，須恵器坏身3がＴＫ209型式（新），須恵器坏身4・5がＴＫ217型式（古）に該当することから，これら型式内のものと考えられる。

b）（伝）横岡山古墳出土遺物

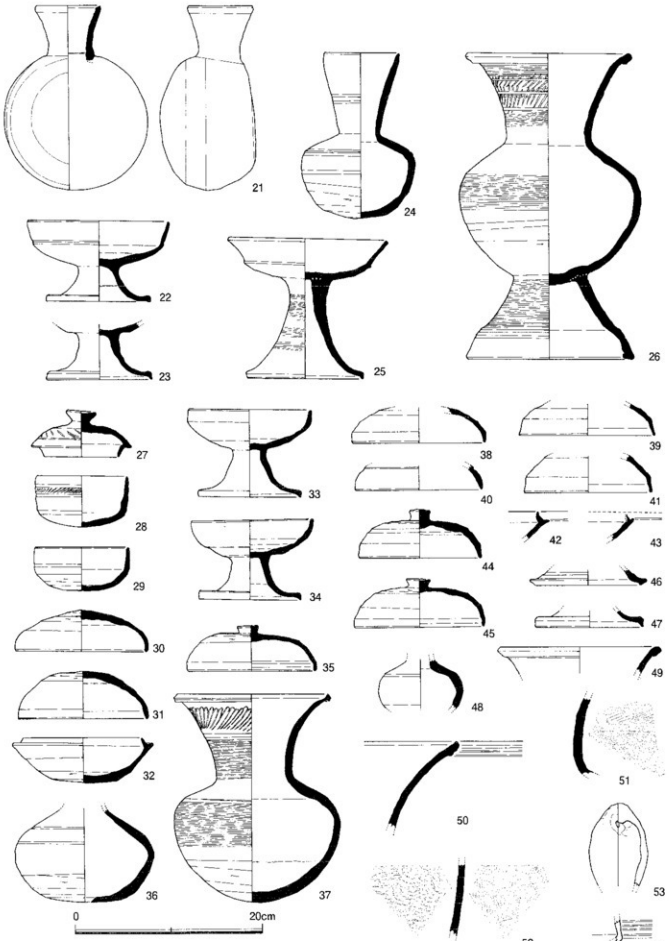
21～74は浅野小学校，旧香南町歴史民俗郷土館などの保管品で，21は古墳地権者の所蔵品，22～26は浅野小学校と旧香南町歴史民俗郷土館保管品との接合資料，27～37は浅野小学校の保管品，38～74は旧香南町歴史民俗郷土館の保管品である。22～37は剣山古墳出土品とされ，同山塊で当古墳の北方0.8kmに比定される剣山古墳（消滅）と誤認されてきた。今回の資料調査において，①昭和6年発掘時の写真中で25・26・27・37など主要な遺物が特定できること，②間接的ではあるが，旧香南町歴史民俗郷土館の保管品を介して平成19年度調査の出土遺物との接合関係がうかがえること，③横岡山古墳と題した旧香川町の資料で，浅野小学校保管以前に撮られた写真でも大半の遺物を確認することができ，これらにより横岡山古墳からの出土が明白となった。



第 16 図　平成 19 年度調査出土遺物（1/4）



第 17 図　遺物出土位置図（石室・前庭部 1/40，遺物 1/8）



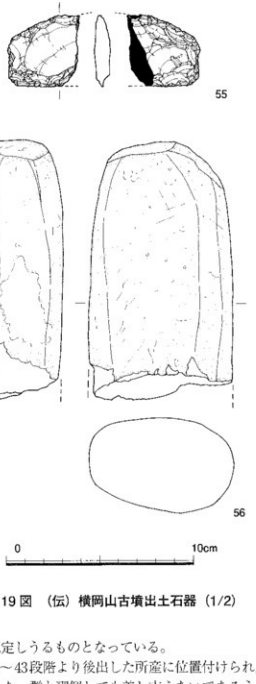
第 18 図　(伝) 横岡山古墳出土土器 (1/4)

21は須恵器提瓶。昭和6年発掘時の写真で，その出土が確認できる。口縁はやや外傾し，端部に沈線を廻らす。体部は回転ナデで仕上げるが，背面は未調整である。

以下，22～37の詳細は既往の調査報告（香川町教育委員会2005）に拠るが，旧香南町歴史民俗郷土館保管品との接合により，24の長頸壺口頸部，及び26の台付広口壺脚部が接合した点が主な追加事項となっている。

またこの報告では25・26・27・37をMT15・TK10段階とし，他のTK209～217段階に属する遺物とを分割し前者を剣山古墳，後者を横岡山古墳の出土遺物とした見解を採ったが，上記した資料調査により横岡山古墳の帰属が確実となったほか，出土品のほぼ完存する状態からは先行する遺構から混入した可能性も考え難い。よって，これらの時期について再度検討を加えてみたい。

26・37のような広口壺は，藤ノ木古墳をはじめ，香川県では善通寺市王墓山古墳などTK10～43段階の古墳出土品で確認でき，台付のものは岡山県王墓山古墳，愛媛県塩塚古墳など，器種としてTK209以降にも認められる。以下，TK10～43段階のものと比較すると，当段階の広口壺は肩部が張らず丸みを帯びることが認められ，肩部が張る37は新相に位置付けられる。脚部は高坏，台付長頸壺などを参考とするなら，ラッパ状に開かず底部から内湾して直立する器形で，しっかりとした凹線による段や透かしがTK10～43段階のものにみられることから，カキ目装飾を施す台付広口壺26，無蓋高坏25については，透かしをもたない点が後出する要素と考えられる。また長頸壺蓋27は，TK10～43段階のものと比べ小形化した摘みが新相を呈するほか，ヘラ描きによる加飾・法量・焼成，及び上記の岡山県王墓山古墳の出土例から28とセット関係も想定しうるものとなっている。



第19図　（伝）横岡山古墳出土石器（1/2）

以上のように25·26·27·37をみるなら，何れについてもTK10～43段階より後出した所産に位置付けられ，平成19年度調査で得られたTK43·209（古）の段階を上限とした一群と理解しても差し支えないであろう。

38～41は，口径13.4～14.2cmに復元される須恵器坏蓋である。42·43は，須恵器坏身の口縁部。坏蓋と同様，TK209型式に位置付けられる。44・45は，須恵器高坏蓋である。44は口径12.9cm，器高4.9cmを測り，焼成は不良で器面は灰白色を呈する。45は口径13.6cm，器高5.1cmを測る。天井部に施された回転ヘラ削りから，左回転の糸切り方向が考えられる。46・47は須恵器脚部である。48は須恵器で，小形のハソウ体部である。49～51は，須恵器広口壺口縁部，及び頸部である。何れも焼成は良好で，外面に暗オリーブ色の自然釉が掛かる。49の口縁部の形態や51のヘラ描きによる区画に斜線文を加える装飾は，26と共通する。平成19年度調査分を加味すると，少なくとも4～5個体の広口壺が存在したことがうかがわれる。52は須恵器壺，あるいは甕体部である。外面に格子目状の叩き痕，内面に青海波を残す。焼成は良好で，器面は赤灰色に焼き締まる。玄室の撹乱土中の出土遺物にも，同様の破片が認められる。53は土師器甑蓋である。器形は細身で，吊手と体部との境は明瞭でない。外面はナデ調整により，平滑に仕上げられている。54は弥生土器高坏の細片。退化した凹線文から，中期末～後期前葉の所産と考えられる。

石器については，現況で2点確認できる。55は，サヌカイト製の打製石庖丁である。56は刃部を欠損するが，太型蛤刃石斧と考えられる。砂岩製で，断面は扁平となっている。

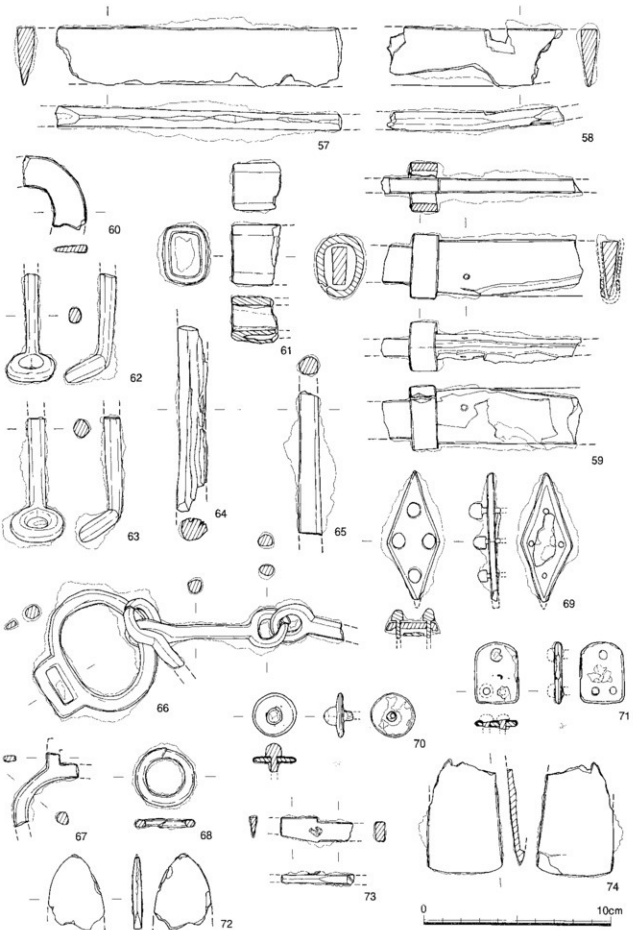
57～61は刀と刀装具である。57，58は刀身部分，59は関を中心とした部位で，60，61は刀装具である。切先は残っていない。サイズや遺存状況からこれらは同一個体と判断した。57は背厚0.8cm，幅3.1cm，残存長15.3cmを測る。58は背厚0.9cm，幅3.0cm，残存長9.2cmを測る。残存状況が悪く，中ほどでわずかに折れ曲がっている。59は鍾が錆着した刀身下部から茎部分である。刀身は背厚0.8cm，幅3.0cm，残存長7.7cm，茎は厚さ0.8cm，幅2.1cm，残存長3.0cmを測る。関部は両関で，背関が0.3cm，刃関が0.45cmとやや不均等である。刀身には厚さ0.2cmの鉄板が付着しており，鞘口金具の可能性が考えられる。一部に光沢があり，銀もしくは銅でメッキされていた可能性も指摘できる。両関の関から1.5cmの刃部寄りに穿孔が見られる。これは鞘口金具のみの穿孔であり，刀身には孔はない。茎には鍾が錆着している。鍾は断面倒卵形で，長径3.3cm，短径2.6cm，幅1.4cm，厚さ0.4cmを測る。60は鍔である。全体の約1/4が残存する無窓の板鍔で，厚さ0.4cmを測る。復元すると長径が6.5cm，短径が5.5cm程度の倒卵形を呈すと考えられるが，型式は判別できない。61は柄縁金具と考えられる。断面形は長径3.2cm，短径2.4cmを測る隅丸方形を呈し，厚さ0.45cmの鉄板を筒状に成形したものである。残存長は2.6cmである。これらから復元したものが第21図であるが，鞘口金具と鍾の関係，柄の形状，柄頭の有無など問題も多い。

62～71は馬具である。62～67は轡，68は環状鉄製品，69は菱形飾金具，70は雲珠の飾金具，71は爪形飾金具である。62，63はくの字引手である。62の棒状部断面形は0.65×0.8cmの楕円形，63の棒状部断面形は0.9cm×1.0cmの楕円形を呈す。64，65は引手の棒状部分と考えられる。64の断面形は1.4×1.1cm，65は1.0×0.9cmの楕円形を呈する。錆ぶくれの影響も考えられるが，62，63に比べて太く，別個体の可能性も考えられる。66は環状鏡板と銜，引手である。鏡板は大型短形立聞造り環状鏡板である（岡安1984）。環状部の直径は6.75cm，全高7.0cm，立聞は幅3.45cm，高さ1.6cmを測る。銜は二連式で，環状部分は棒状部を二又に割ったのち，C字状に曲げて成形されている。引手の環状部も同様の成形技法である。67は環状鏡板である。環状部分の約1/4と立聞の一部が残存する。68は環状鉄製品である。直径3.1cmを測る。幅0.5cm厚さ0.4cmの断面楕円形の鉄棒を曲げ，先端を重ね合わせて成形している。確実な用途は不明であるが，馬具の帯金具の一種と考えられる。69は菱形飾金具である。おそらく鉄地金銅張りと考えられる。大きさ6.8×2.7cm，厚さ0.3cmを測る。円頭鋲が4鋲配され，鋲高0.7cm，鋲頭径0.6cmを測る。革帯の交点に装着されるもので，幅2.5cm前後の革帯が用いられたと考えられる。裏面には鉄片もしくは錆化した革帯片が付着している。70は中央部別作りの雲珠・辻金具，いわゆる貝製雲珠の中央飾りである（宮代1986，1989）。座金具は円形の鉄地金銅張で直径2.35cm，厚さ0.25cmを測る。宝珠飾は円頭鋲状で，径0.9cm，高さ0.7cm，鋲脚径0.35cm，残存高1.5cmを測る。座金具の裏面には有機質が付着し，従来中央部別作り雲珠・辻金具で考えられているように，貝製の中央部が充填されるのではなく，木や皮革のような有機質製の中央部であった可能性が考えられる。71は鉄地金銅張の爪形飾金具である。長さ3.25cm，幅2.35cm，厚さ0.25cmを測り，巻かれた金銅板は厚さ0.04cmである。鋲頭はすべて欠失しているが，3鋲が配され，痕跡から鋲頭径は0.7cmであったとわかる。革帯先端を飾る金具であり，革帯の幅は2.5cm前後である。裏面に革帯の痕跡と思われる付着物が残る。

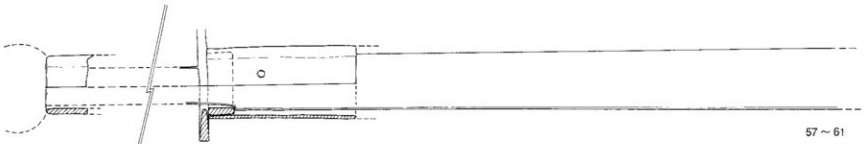
72は鉄鏃と考えられる。切先部分のみが残存し，残存長3.85cm，最大幅3.0cm，厚さ0.3cmを測る。不確実であるが，柳葉式の有頸鏃の可能性がある。73は刀子である。切先と茎の一部を欠いている。刃部は背厚0.4cm，刃部最大幅1.3cm，刃部残存長1.95cmを測り，茎部は厚さ0.5cm，最大幅1.0cm，残存長1.9cmを測る。背側に0.2cmの関があり，刃部にもわずかに関が見られる。刃部側は研ぎ減りも考えられ，本来は両関であった可能性が考えられる。関部分には木質が付着し，関部から茎尻に向けてわずかに幅を減じている。74は鉄斧と考えられる。残存状況がかなり悪く，片面と刃部の一部が残るに過ぎないが，刃部の形状から鉄斧と判断した。幅4.0cm，残存長6.0cmを測る。

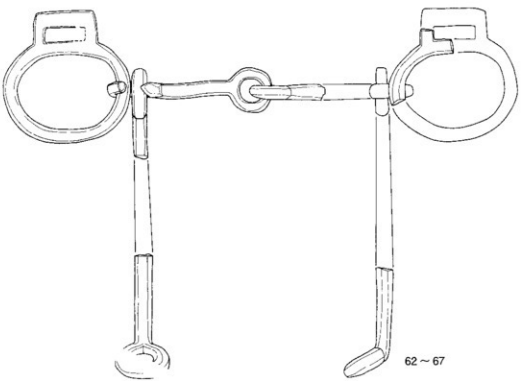
これらの鉄器の時期は59のような両関の鉄刀が6世紀末～7世紀初頭に一般化すると考えられていることから，TK209型式後半からTK217型式に位置づけられる。これは鉄製板鍔の出現とも対応している。

また，馬具の時期は62～67の大型短形立聞環状鏡板は全高が7.0cmを測り，岡安光彦の検討によると規格の揃ってくる7世紀初頭（TK209型式後半）に位置づけられる。くの字状引手であることも時期的に対応する。また，飾金具もおおむねTK209型式期に相当する。



第 20 図（伝）横岡山古墳出土鉄器（1/2）





第 21 図　(伝) 横岡山古墳出土鉄器復元図・展開図 (1/2)

11. まとめ

調査結果をまとめると，以下の項目が挙げられる。

1．往時の発掘は昭和6年8月に実施されており，当時は「剱山古墳」と呼ばれていた。
2．立地は龍満山（剣山）東麓に派生する丘陵の頂部に位置し，現況は単独墳である。
3．尾根筋を断ち割る位置に周溝を伴い，墳丘は最大で直径 22 mの円形状と推定される。
4．北方向に開口する石室は，玄室の上半部を失っているが，羨道は良好に残る。
5．石室は左片袖式の横穴式石室で，床面積 5.4㎡を測る短形の玄室と発達した羨道をもつ。
6．石室の閉口部には，1対の立石を用いた羨門構造をもつ。
7．石室は同山塊で産出する花崗岩の割石を用いており，概ね石積の工程・基準を読み取ることができる。
8．床面は羨道中央部で残り，礫床の敷設が認められる。
9．石室の正面，前庭部のトレンチで石室方向から墓道方向へやや下る排水溝と蓋石と考えられる石列を確認した。
10．上記のトレンチでは墓壙を平面的に検出し，仕切石や抜き取り痕などの遺構を確認した。
11．上記のトレンチでの堆積状況から，少なくとも初葬後2回の開口行為があったことがうかがわれる。
12．往時の出土品が当古墳に帰属し，今回の出土品も含めＴＫ 43･209 古～ 217 段階のものであることを確認した。

3について墳形の詳細は不明であるが，今後，埋没して残る周溝，および構築初期の状況を留める前庭部分の調査によって把握できるものと考えられる。また 10 の石室正面側となる前庭部分について，天井石の架かならない羨門部，墓道方向に延びて検出された墓壙や仕切石など，初期段階での門部の構造や祭祀・儀礼空間としての役割を示唆する事例として，今後の調査・研究に資するものと考えられる。

5については，平面形態や前壁を有する立面構造など，概ね畿内型石室の要件（土生田 1991 ほか）を備える。加えて，9について蓋石を載せ暗渠構造を採る排水溝が下部構造で窺うことができ，指摘されるように発達した羨道と関連して畿内型石室の特徴を示す（吉田 2002）。畿内型石室の系譜においては，石室の構築技術に用いる用石法が，共通した変遷過程を辿るとして分類とその変遷が整理されている（太田 2003 ほか）。この変遷によると，当石室について袖石・羨道側壁・奥壁基底石の用法から判断でき，ＴＫ 43 ～ 209 型式（6群）に該当する。こうして得られた石室の構築技術による時期は，出土遺物が示す古段階の時期と一致しており，よって当該期が古墳の構築時期と考えられる。また 11 について複数回に及ぶ開口行為が窺われ，かつＴＫ 217 に下る遺物の存在は比較的長期間において追葬・儀礼行為があったことを示し，こうした長期にわたる使用については礫床，排水溝を備えた下部構造とともに理解できる（吉田 2002，森 2002）。

一方，6の羨門立柱については畿内型石室には認められない用石法であり，他系統からの影響がうかがわれる。羨道の開口部に立石をもつ石室は，隣接した郡部となる山田郡の塁丰古墳とされる久本古墳（ＴＫ 209 段階）のほか，観音寺市に所在する母神山鐘子塚古墳（ＴＫ 43 段階），大野原町所在の椀貸塚古墳（ＴＫ 209 段階）など西讃地域の複室構造を有した石室で認められる。これとは別に播磨地域最大規模を誇り，畿内系の石室に羨門立柱を有する印南郡の升田山（池尻）15 号墳，池尻 16 号墳が，石室形態において類似した事例として挙げられ，畿内でも左袖式の比率が高いとされる播磨地域との関係が指摘できる。横穴式石室に係る播磨と讃岐地域との技術交流については，既往の研究（中浜 2001）で『播磨国風土記』に継わり，東讃地域となる原間古墳（東かがわ市）を例に指摘がなされているが，『播磨国風土記』にある讃岐氏族の播磨への移住や丹波国に加担した播磨との争いに讃岐側が敗走する逸話は，上記にみられる古墳がほぼ同時期となる点と併せて興味深い。弥生・古墳時代で東讃地域と畿内，あるいは播磨地域との交流は随所に指摘されるとおりで，当古墳の周辺にあたる岡清水遺跡（高松市香南町）で確認された弥生時代終末期の住居址に関しても播磨と関わりが指摘されており（松本 2001），ほぼ中讃地域となる高松平野の奥都に位置する当地においても，こうした交流の下地があったことがうかがわれる。

当地，浅野地区の古墳に目を向けると，東赤坂古墳（市指定），八王子古墳，万塚古墳，そして横岡山古墳と片袖式の石室が占めている。現在，東赤坂古墳など資料の詳細には欠けるが，讃岐地域に一般的な袖石が内側に突出する北部九州系の石室形態を採らないことから，畿内の影響を受けた一群が想定しうる。しかしながら本例で示されたように，畿内型の範疇で理解しえない諸属性については留意が必要となろう。

以上のような観点から横岡山古墳，とりわけ良好に残る羨道および石室正面において，地域性の一端をみることができる。

註1）石室の開口には，追葬のみならず，遺体の再配置などの儀礼的行為（死の認定）に伴って開口行為を行う場合が存在することが横穴墓の調査から指摘されており（田中・村上 1994），単純に開口回数＝追葬回数とは言い切れないため，現状では開口回数としておきたい。

註2）耳環のセット数は追葬回数として計算される場合が多い。ただし，北原２号墳などかなり多くの耳環が出土している場合もあり，単純に埋葬人数としてよいか疑問のある例などもあり，一概に追葬回数と言えない場合もあると考える。そのため，あくまで想定である。

＜主要参考文献＞

猪熊兼勝 1967「横穴式石室の排水溝―岩橋千塚の場合―」『岩橋千塚』関西大学文学部考古学研究室

遠藤啓輔 2003「横穴式石室の排水溝」『続文化財学論集』文化財学論集刊行会

太田宏明 2003「畿内型石室の変遷と伝播」『日本考古学』日本考古学協会

岡安光彦 1984「いわゆる「素環の轡」について―環状鏡板付轡の型式学的分析と編年―」『日本古代文化研究』創刊号，ＰＨＡＬＡＮＸ－古墳文化研究会―

岡安光彦 1985「環状鏡板付轡の規格と多変量解析」『日本古代文化研究』第２号，ＰＨＡＬＡＮＸ－古墳文化研究会―

沖森卓也・佐藤信・矢嶋泉 2005『播磨国風土記』山川出版社

河上邦彦 1995『後・終末期古墳の研究』雄山閣出版

川畑聰 2007「高松平野における片袖式横穴式石室について」『平石上２号墳　石舟池古墳群』高松市教育委員会

香川町教育委員会 2005『船岡古墳 附 万塚古墳・剣山古墳等出土遺物の調査』

香川町誌編集委員会 1993『香川町誌』

加部二生 1999「横穴式石室の前庭について」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 82 集

國木健司 1987「排水溝について」『雲岡古墳発掘調査報告書』豊浜町教育委員会

國木健司 1995「香川の横穴式石室」『四国における横穴式石室の成立と展開』古代学協会四国支部第９回大会資料

県史編纂委員会 1983『新潟県史 資料編１原始古代－考古編』

白石太一郎 2006「須恵器の暦年代」『年代のものさし－陶邑の須恵器－』大阪府立近つ飛鳥博物館

高橋克壽編 2005「石のカラト古墳」『奈良山発掘調査報告Ｉ』奈良文化財研究所

田中良之・村上久和 1994「墓室内飲食物供献と死の認定」『九州文化史研究所紀要』第 39 号　九州大学文学部九州文化史研究施設

田辺昭三 1966『陶邑古窯址群Ｉ』平安学園考古学クラブ

田辺昭三 1981『須恵器大成』角川書店

直宮憲一 1987「横穴式石室の除湿及び排水機能について―西摂地域の古墳を中心として―」『文化史論叢（上）』横田健一先生古稀記念会

中浜久喜 2001「播磨における横穴式石室の構造と変遷」『横穴式石室からみた播磨』第２回播磨考古学研究集会実行委員会

中村浩 1998 ～ 2002『古墳出土須恵器集成第１～６巻』雄山閣出版

西澤正晴 2002「遠江・駿河における鉄製板鐔の変遷と展開」『研究紀要』第９号，静岡県埋蔵文化財調査研究所

羽床正明 1981「『播磨国風土記』に顕れた讃岐」『文化財協会報 昭和 55 年度特別号』香川県文化財保護協会

土生田純之 1991a「古墳における儀礼研究－木柱をめぐって－」『九州文化史研究所紀要』第 36 号九州文化史研究所

土生田純之 1991b『日本横穴式石室の系譜』学生社

土生田純之 1998『黄泉国の成立』学生社

樋本誠一 1994『風土記の考古学２ 播磨国風土記の巻』同成社

松本和彦 2001『岡清水遺跡』香川県教育委員会

宮代栄一 1986「古墳時代雲珠と辻金具の分類と編年」『日本古代文化研究』第３号ＰＨＡＬＡＮＸ－古墳文化研究会－

宮代栄一 1989「いわゆる貝製雲珠について」『駿台史学』76 号，駿台史学会

森格也 2002「横穴式石室の下部構造」『環瀬戸内海の考古学』古代吉備研究会

山崎信二 2003『古代瓦と横穴式石室の研究』同成社

吉田広 2002「横穴式石室の排水溝について」『環瀬戸内海の考古学』古代吉備研究会

吉留秀敏 1987「まとめ」『堤ヶ浦古墳群発掘調査報告書』福岡市教育委員会

渡邊邦雄 2002「横穴式石室前庭部における祭祀施設」『古代文化』vol.54

第３章　城所山古墳群（じょうしょざんこふんぐん）

１．調査の経緯・経過

城所山古墳は高松市香南町岡に所在し，１号墳と２号墳の２基が知られる。昭和 46 年，香南パイロット（圃場）事業に際し，昭和 46 年 12 月 25 日付けで香南町教育委員会より文化庁に発掘届（旧埋蔵文化財保護法第 57 条）が提出され，緊急発掘調査が実施されている。同届によれば，昭和 46 年 12 月 23 日に発掘が着手しており，翌 47 年１月５日までの予定時期で，町教委が主体となり香川県教育委員会の指導下で調査が実施された。当時の現況は横穴式石室が２基あり，床面のみの残るものと側壁及び床面が残るものがあったとされ，前者が１号墳，後者が２号墳の状況であったと考えられる。

第 22 図　城所山古墳群位置図（1/5,000）

調査終了後，１号墳については消滅したが，２号墳は保存整備が図られ墳丘及び石室の一部が復元されている。平成 18 年には高松市との合併に伴い，本市の登録文化財となり市教委で整理作業を行った。しかし調査記録については１号墳で写真１枚，２号墳で記録の一部とみられる石室上面図（1/25）と周辺測量図（1/100）しか残らず，調査の詳細は不明な点が多い。出土品については，高松南警察署に提出された発見届によると須恵器坏 17，須恵器横瓶２，はそう１，耳環６，鉄鏃２，鎌１，玉 20 個とあり，これに地権者が所蔵していた１号墳の採取品を加え，城所山古墳出土品として町教委で保管されてきた。市教委が引き継いだもので概ねこれらを確認できるが，注記のある須恵器を除き耳環，玉，鉄器については１，２号墳の何れかの帰属を示すものは残されていない。

２．立地環境（第 22 図参照）

城所山古墳は香南町南部，阿讃山脈から派生する丘陵部に相当し，古墳の位置する丘陵は開析谷により南北方向に細長く分断されている。２号墳は平野方向に突き出した丘陵の末端にあり，１号墳については消滅して不詳だが，この丘陵の頂部にあったとされている。なお『讃岐香川郡志』には，当地における古墳について「大字岡字奥谷にある城所山に大いなる古墳があつて，高さ２間餘，横 23 間もあつた。是は享保の頃まで残存してゐた。今一つは岡字追上に横穴があつた。今より 40 年前位まで残存してゐたが，農夫の開墾によつて埋められた。」とある。何れも小字が異なる（当地の小字は悪所）ことから上記の内容は本古墳に該当するものではないが，往時に同じ丘陵付近において複数の古墳が存在したことが推定される。

３．城所山１号墳（第 23 図参照）

１号墳については，現状で消滅しており記録もほぼ皆無である状況だが，往時を知る地元からの聞き取りにより，以下の情報が得られた。

①２号墳から尾根を上った丘陵の頂部にあった。
②石室は，平野を見下ろす北方向に開口していた。
③石室の大きさは，２号墳と同じ位であった。

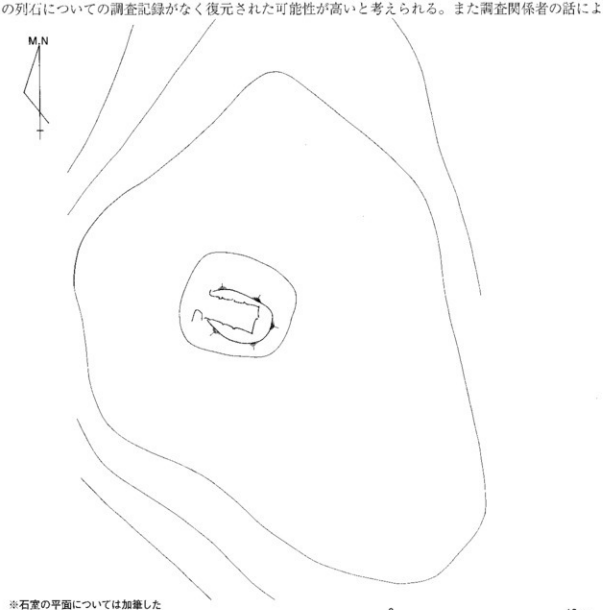
また，旧町が作成したリーフレットに唯一残る写真では，大きく破壊を受けた石室が写っており，礫床が認められるほか，袖石，側壁の基底石らしきものがみられる。

第 23 図　城所山１号墳

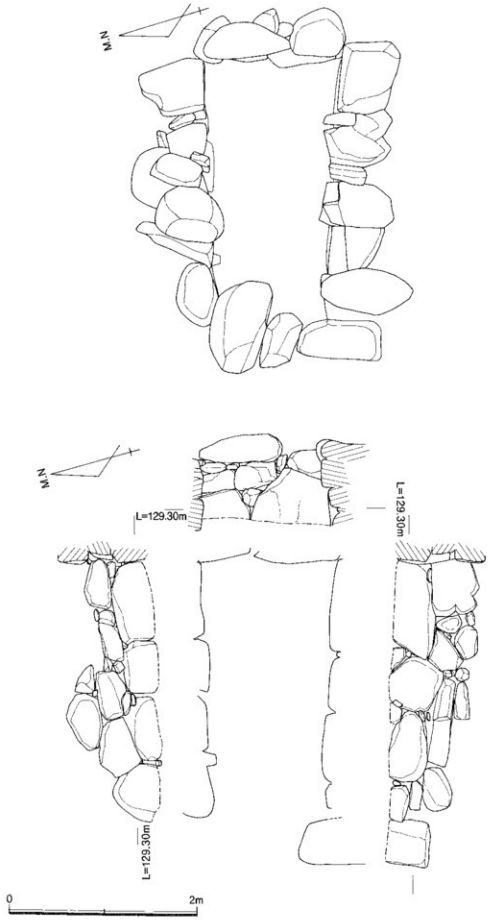
4．城所山２号墳（第 24・25 図参照）

磁北に対し 75° 西傾する主軸をとり，西に開口した横穴式石室を備える。石室規模は玄室長 2.8 m，奥壁幅 1.47 m，玄門側で幅 1.22 m を測り，よって玄室床面積約 3.76㎡，玄室長幅指数 2.08 となる。石室に用いられた石材は，やや目の粗い花崗岩の割石を基本とし，間詰めには川原石が認められる。石室の平面形態は，奥壁が幅広く，玄門側がやや狭くなる長台形を呈する。奥壁からみて左側に袖石が認められるが，対置する側の石材が記録にないことから左片袖式か両袖式かの判断はできない。石室立面図（第 28 図下段）については，現況の石室で復元された可能性のある，既往の調査記録（第 28 図上段石室上面図）で確認できない石材は除き作成した。こうして残る１～３段相当の石積をみると，奥壁左半には縦位気味に大形石材を基底に据え，奥壁右半は２段目相当まで小振りの石で埋め３段目横長の石で目地を揃えるようである。左側壁は，奥壁側基底石とその上段にある大振りの石で２段相当に整えている。右側壁の基底石は４石残るが，左側壁は袖石までこれと同じ長さに揃い，基底石も４石としている。袖石は立石ではなく，横長の石材を用いて小口積みとしている。玄門は大振りの石で塞がれたようになっているが，その大きさから判断すれば，閉塞石ではなく側壁が倒壊したものと考える方が妥当と思われる。床面は土床で礫床・排水溝の下部構造は確認されておらず，奥壁側から開口方向に緩やかに下る。

墳丘は現状で直径 12 m，高さ 1.5 m の円形となり，石室前面にはハの字に延びる列石があるが，墳丘及びこの列石についての調査記録がなく復元された可能性が高いと考えられる。また調査関係者の話による



第 24 図　城所山２号墳周辺図（1/200）



第 25 図　城所山２号墳石室上面図・立面図（1/40）

と，調査以前は墓地であり石室はその造成土を除去する過程で発見されたもので，調査は開口部まで及ばず竪穴の空間でのみ作業を行なったという。こうした状況は既往の調査記録（第27図，28図上段）に対応し，調査時には墳丘は現状の半分も残っておらず，調査は玄室のみを対象としたことがうかがえる。しかしながら，2号墳出土須恵器の注記において「前溝」あるいは「前溝床」と記された一群が認められ問題が残る。これらは出土年月日とみられる720122あるいは720123を記し破片を伴うもので，玄室の出土品とみられる711229を記した完存品と日付及び遺物の残存状態においても区別される。昭和47年1月22・23日は記録に残る調査期間終了後にあたり，よってこの後，上記以外に調査が実施された可能性が示唆される。「前溝」あるいは「前溝床」が示す遺構については不明だが，状況から判断すれば羨道に相当する位置での出土であったことが推察される。しかし現況にある石室前面の列石と，この「前溝」との関係を示す記録は現在確認することができない。

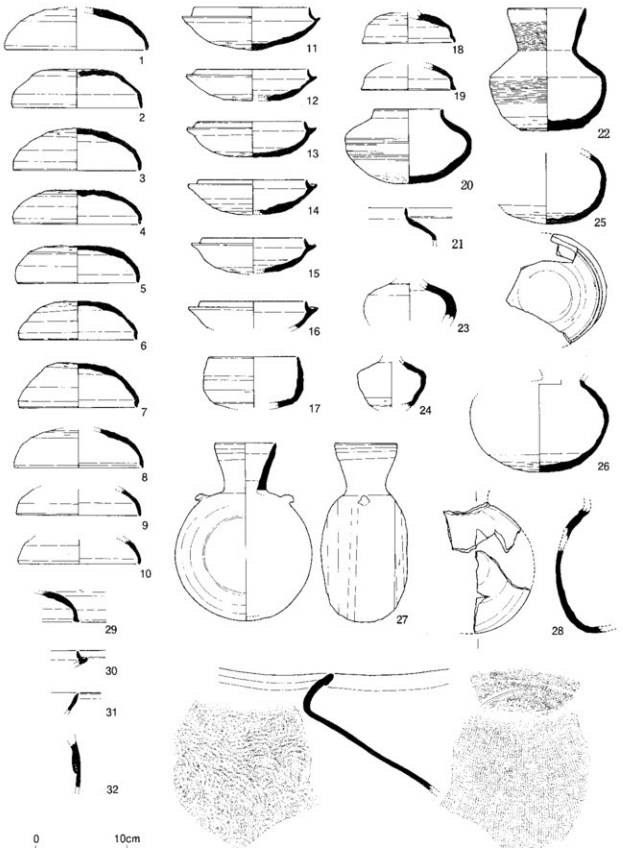
5．出土遺物

城所山1号墳出土須恵器（第26図参照）

1～10は，須恵器坏蓋。1は口径15.3cmを測り，天井部は回転ヘラ削りを施し丸みを帯びる。2は口径14.0～14.4cm，器高4.3cmを測る。天井部は扁平で，回転ヘラ削り痕から右回転の轆轤方向が考えられる。口縁部は体部から強く屈曲し直立する。3は口径13.6cm，器高4.6cmを測る。天井部は丸みを帯び，回転ヘラ削り痕から左回転の轆轤方向が考えられる。焼成は不良で器面は灰白色を呈する。4は口径13.6cm，器高3.7cmを測る。天井部は扁平で，回転ヘラ削り痕から左回転の轆轤方向が考えられる。5は口径13.0cm，器高4.1cmを測る。天井部は扁平で，回転ヘラ削り痕から右回転の轆轤方向が考えられる。焼成は不良で器面は灰白色を呈する。6は口径12.7cm，器高4.2cmを測る。天井部は扁平で，回転ヘラ削り痕から右回転の轆轤方向が考えられる。焼成は不良で器面は灰白色を呈する。7は口径に比して器高が高く，口径12.7cm，器高4.9cmを測る。天井部は扁平で，回転ヘラ削り痕から左回転の轆轤方向が考えられる。内面には仕上げナデを施す。焼成不良で器面は灰白色を呈する。8は口径13.9cmを測り，天井部の回転ヘラ削り痕から右回転の轆轤方向が考えられる。9は口径13.4cmを測り，焼成は良好である。10は口径13.0cmを測る。11～16は，須恵器坏身である。11は口径12.7cm，器高4.6cmを測る。かえりは一旦内傾し，高く直立する。底部の回転ヘラ削り痕から右回転の轆轤方向が考えられる。内面には仕上げナデを施す。焼成は良好で，天井部には濁緑色の自然釉が掛かる。12は口径12.0cm，器高3.4cmを測る。かえりは一旦内傾し，直立する。底部の回転ヘラ削り痕から右回転の轆轤方向が考えられる。13は口径11.7cm，器高3.8cmを測る。かえりは内傾し，底部は丸みを帯びる。底部は未調整部分を残し，回転ヘラ削り痕から左回転の轆轤方向が考えられる。内面には仕上げナデを施す。焼成不良で器面は灰白色を呈し，外面には同法量の重ね焼痕が残る。14は口径11.8cmを測り，かえりは内傾する。底部の回転ヘラ削り痕から右回転の轆轤方向が考えられる。焼成不良で器面は灰白色を呈する。15は口径11.0cmを測り，かえりは内傾する。底部の回転ヘラ削り痕から右回転の轆轤方向が考えられる。16は口径11.4cmを測る。

17は須恵器（台付）椀で，口径9.6cmを測る。内湾する口縁と中位に幅広の凹線をもつ。焼成は良好で，外面はオリーブ黒色を呈する。18・19は，須恵器（短頸壺）壺である。18は口径9.9cmを測る。口縁は小さく屈曲し，爪状に延びた受け部をもつ。焼成は良好で，外面には灰オリーブ色を呈する自然釉が掛かる。19は口径10.1cmを測る。口縁部は小さく外方向に突出し，端部が肥厚する。20・21は，須恵器短頸壺である。20は口径7.4cm，器高8.0cmを測る。肩の張る器形で，底部は平坦化している。外面体部の中位にカキ目，底部に静止ヘラケズリ痕が認められるが，焼成不良で器面は摩滅している。22は須恵器長頸壺で，口径8.4cm，器高13.1cmを測る。頸部は太くハの字に開いて延び，口縁部は先細り丸く納める。底部は平坦で，回転ヘラケズリが及ばずヘラ切り痕を残す。頸部及び体部下半にカキ目を施しており，頸部にはヘラ記号が認められる。23・24は須恵器平瓶だが，23は提瓶となる可能性もある。底部は回転ヘラケズリが施され，丸みを帯びる。25・26は須恵器ハソウで，26は小形品。27・28は須恵器提瓶で，カキ目装飾をもたない。27は口縁部が内湾し漏斗状になるもので，吊り手は小さく突出し鐙状に折れる。背面には灰白色の自然釉が掛かる。29～32は須恵器片で，29が短頸壺の蓋，30・31は坏身と瓶類の口縁部，32は円盤充填から提瓶の体部と考えられる。33は須恵器甕の大形品で，口縁部は大きく歪む。口頸部に平行叩き後回転ナデ，体部に半行叩き後のカキ目が認められ，頸部にはヘラ記号を施している。

以上，所属時期については，1～16の須恵器蓋坏からTK43～209型式の所産と考えられる。



第 26 図　城所山 1 号墳出土須恵器（1/4）

城所山2号墳出土須恵器（第27図参照）

34～50は，須恵器坏蓋・坏身である。34～50については，法量，焼成などからセット関係が想定される。34坏蓋は，口径14.9cm，器高4.3cmを測る。35坏身は口径12.8cm，器高4.3cmを測る。何れも回転ヘラケズリは末端まで及ばず未調整部分を残すもので，左回転の轆轤方向が考えられる。36坏蓋は，口径13.7cm，器高4.4cmを測る。37坏身は口径12.6cm，器高4.8cmを測る。何れも回転ヘラケズリは末端まで及ばず未調整部分を残すもので，左回転の轆轤方向が考えられる。焼成は不良で，器面は灰色を呈する。38坏蓋は，口径13.1cm，器高4.1cmを測る。39坏身は口径12.1cm，器高4.9cmを測る。何れも内面に仕上げナデを施し，外面天井・底部の端部まで回転ヘラ削りを行う。回転ヘラ削り痕から右回転の轆轤方向が考えられる。40坏蓋は，口径14.4cm，器高4.8cmを測る。41坏身は口径12.0cm，器高5.1cmを測る。何れも回転ヘラケズリ痕から左回転の轆轤方向が考えられ，焼成不良で器面は灰白色を呈する。42坏蓋は，口径13.7cm，器高4.2cmを測る。43坏身は口径12.2cm，器高4.2cmを測る。何れも焼成不良で，器面は灰黄色を呈する。42の天井部には静止ヘラ削りを施すが，43の底部末端は回転ヘラ削りが及ばず未調整部分を残す。44～48は，坏蓋である。44は口径14.2cm，器高4.5cmを測る。天井部の回転ヘラ削り痕から右回転の轆轤方向が考えられる。天井部にはヘラ記号が認められる。45は口径14.2cm，器高5.1cmを測る。天井部末端は回転ヘラ削りが及ばず未調整部分を残すが，回転ヘラ削り痕から右回転の轆轤方向が考えられる。天井部にはヘラ記号が認められる。46は口径13.7cm，器高4.4cmを測る。天井部の回転ヘラ削り痕から右回転の轆轤方向が考えられる。天井部にはヘラ記号が認められる。47は口径14.2cm，器高5.1cmを測る。焼成は良好で天井部に灰緑色の自然釉が掛かり，粘土塊が熔着している。48は口径12.4cm，器高4.0cmを測る。天井部末端は回転ヘラ削りが及ばず未調整部分を残すが，回転ヘラ削り痕から右回転の轆轤方向が考えられる。焼成は良好である。49・50は，坏身である。49は口径13.0cm，器高4.4cmを測る。かえりは内傾する。底部の回転ヘラ削り痕から左回転の轆轤方向が考えられる。50は口径12.1cm，器高3.7cmを測る。かえりは内傾し，立ち上がりも低い。底部末端は回転ヘラ削りが及ばず未調整部分を残すが，回転ヘラ削り痕から右回転の轆轤方向が考えられる。内面には仕上げナデを施す。器面は焼成不良で灰白色を呈する。

51は須恵器壺で，口径9.7cm，器高13.1cmを測る。頸部はハの字に開いて延び，細身の体部をもつ。底部に静止ヘラ削りを施す。52・53は，須恵器提瓶である。52は口径5.2～5.4cm，器高18.6を測る。口縁部は内湾し漏斗状を呈しており，吊手は上斜め方向に延びる。体部はカキ目を施し，焼成は良好である。53は口径6.6～7.4cm，器高18.8を測る。頸部はハの字に開くラッパ状を呈し，カキ目装飾を施す。体部腹面僧はカキ目，背面側には回転ヘラ削りが認められる。吊手は小さく鍵状に折れる。

54～58は「前溝」の注記されたもので，57は「前溝床」と記されている。54～56は，須恵器坏身である。54は口径13.4cmを測り，かえりは内傾し高く立ち上がる。底部にはヘラ記号が認められ，法量などから坏蓋44とのセット関係が想定される。55は口径12.2cmを測り，回転ヘラ削り痕から右回転の轆轤方向が考えられる。焼成は良好である。56は口径12.3cm，器高4.1を測る。底部にはヘラ記号が認められ，法量などから坏蓋45とのセット関係がうかがわれる。底部の回転ヘラ削り痕から右回転の轆轤方向が考えられる。轆轤方向でみると右回転のものにヘラ記号が認められるほか，1号墳出土品も含め回転ヘラ削りの範囲や仕上げナデなど全般的に左回転のものより丁寧で，古相を示すものが多い。

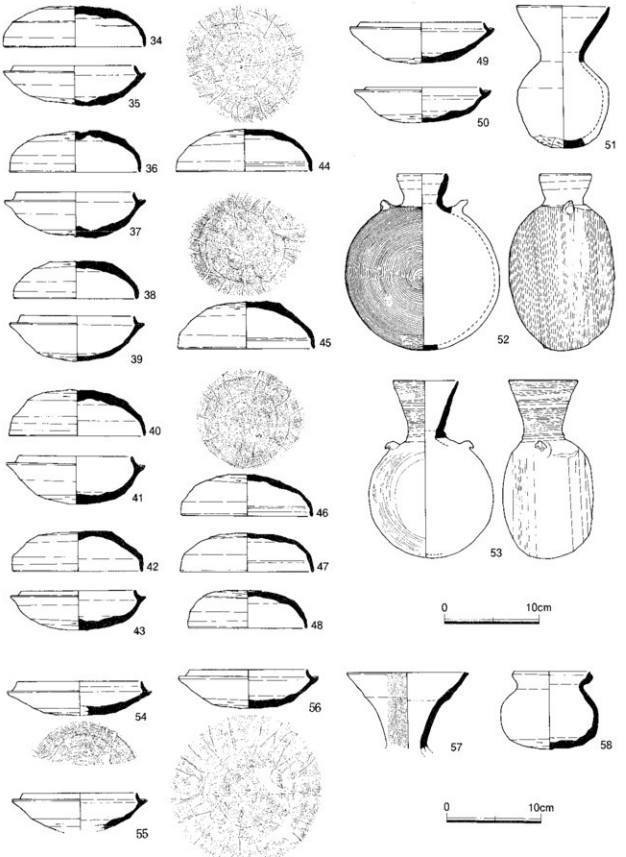
57は須恵器ハソウの口縁部で，口径12.8cmを測る。細い頸部からラッパ状に開き，口縁部でやや内湾し端部が僅かに外方向に突出する。焼成良好で，カキ目及びヘラ記号が頸部に認められる。58は須恵器壺で，口径8.0cm，器高8.2cmを測る。くの字に屈曲する頸部で，口縁部は肥厚し端部には強い横ナデを施す。体部は寸胴で，底部は回転ヘラ削りを施し，やや丸みを帯びる。

以上，所属時期については須恵器蓋坏からTK209型式の所産と考えられる。

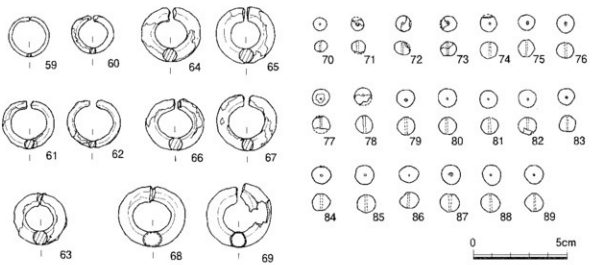
城所山古墳群出土耳環・玉（第28図参照）

上記のように，1号墳，2号墳での帰属が不明である。耳環については，発見届に記された点数6よりも増えて，現在11点が認められる。増加分は地権者による1号墳の採取品とみられるが，これについても判別がつくものは残っていない。

59～69は耳環である。59は外径2.1～2.2cm，断面径0.2cm，重量1.9gを測る細環。表面が黒色を呈しており，銀製と推定される。60は外径2.0～2.25cm，断面径0.3～0.35cm，重量3.4gを測る細身の環。表面が白色の錆に覆われており，鉛製と推定される。61・62は，対関係が推定される組身の銅芯環。61は外径2.5～2.7cm，断面径0.5～0.55cm，重量7.1g，62は外径2.5～2.9cm，断面径0.4～0.45cm，重量5.4gを測る。63～



第27図　城所山2号墳出土須恵器（1/4）



第 28 図　城所山古墳群出土耳環・玉（1/2）

67 は，銅芯銀箔張の環。何れも表面が黒色を呈し，この箔の剥離部分から緑錆が吹く。63 は外径 2.9 ～ 3.25 cm，断面径 0.6 ～ 0.65cm，重量 17.9 g，64 は外径 2.8 ～ 3.1cm，断面径 0.7 ～ 0.75cm，重量 21.1 g，65 は外径 2.95 ～ 3.15cm，断面径 0.7 ～ 0.8cm，重量 23.7 g，66 は外径 2.7 ～ 3.05cm，断面径 0.65 ～ 0.7cm，重量 18.8 g，67 は外径 2.75 ～ 2.85cm，断面径 0.7cm，重量 13.7 g である。以上の法量から推定するなら，64・65，66・67 の対関係が考えられる。68・69 は，対関係が推定される中空の環。68 は外径 3.2 ～ 3.55cm，断面径 0.8 ～ 0.9 cm，重量 7.8 g，69 は破損するが，外径 3.15 ～ 3.5cm，断面径 0.8 ～ 0.9cm，重量 7.2 g を測る。完存する 68 で断面形が楕円形を呈する。素材については 69 の蛍光 X 線分析により，銅成分が検出されず銀地のものと判明している。銀管のみで構成される中空耳環は，現在，類例が少ないとされるが香川県では北原 2 号墳（善通寺市）で知られている。

70 ～ 89 は，練玉である。径 0.7 ～ 1.05cm，長さ 0.6 ～ 0.95cm，重さ 0.3 ～ 1 g の法量差をもつ。穿孔の径は何れも 0.1cm 程で，78 の例から両側からの穿孔されていることがうかがわれる。胎土は，黄～橙色を呈した精良なものを用いている。成形は面取りを行い，断面六角形を呈した多角形のものが多く認められる。表面は黒色を呈し，何らかの表装を行っていたものと推定される。

城所山古墳群出土鉄器（第 29・30 図参照）

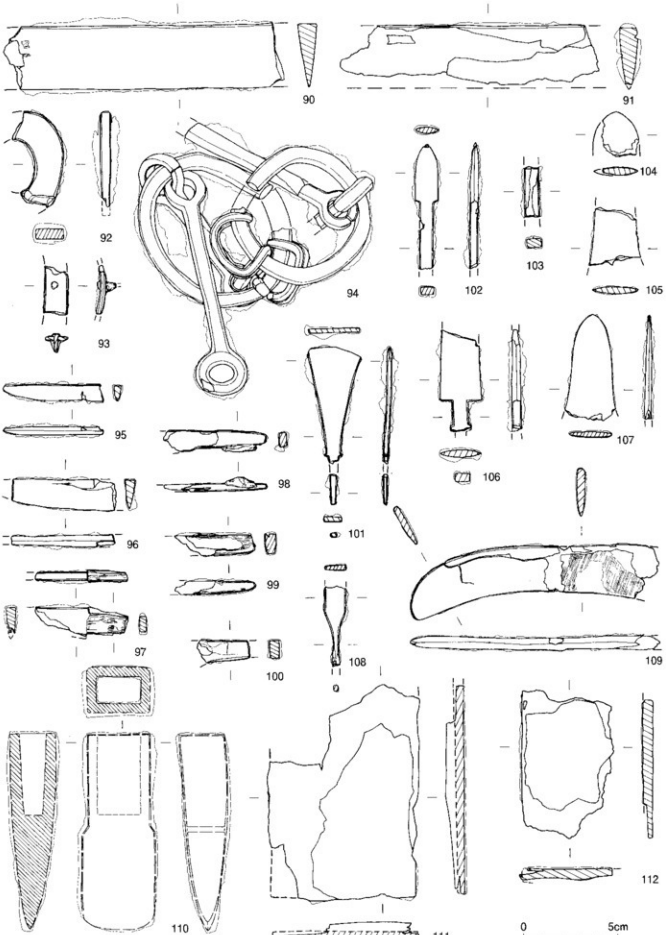
90・91 は鉄刀である。どちらも刀身部分のみであり，茎や切先は残っていない。背厚 1 cm，幅 3.3cm を測る。91 より 90 の残存状況がよく，90 には一部木質が付着する。

92 は鉄刀の鍔である。全体の 1/2 弱が残存する無窓の板鍔で，厚さ 5.5mm を測る。復元すると長径が 5.5cm，短径が 4.8cm 程度の倒卵形を呈すると考えられ，西澤分類で小型の B 類に分類できる（西澤 2002）。

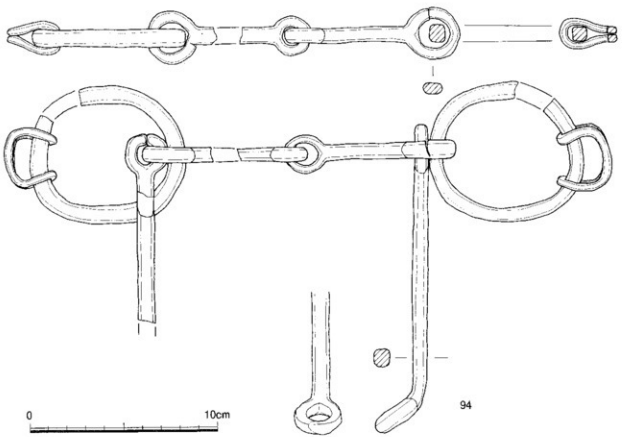
93・94 は馬具である。94 は環状鏡板付轡である。岡安光彦の分類によると単連式扉鎖連結楕円形素環鏡板付轡に分類できる（岡安 1984）。折りたたまれたまま副葬されたようであり，その形のまま錆着して出土している。鏡板は楕円形で，断面は隅丸方形を呈し，単連の兵庫鎖立聞が取り付く。銜は二連銜，引手はくの字引手である。銜や引手の環状部分は棒状部の先端を二叉に分割し環状に成形したもので，銜と引手の連結手法は，銜の環状部分に鏡板と引手が連結する「引手・銜共連」と呼ばれる手法である。93 は鞍もしくは鐙などの有機質の部品を持つ馬具に用いられた金具の可能性が考えられる。幅 1.2cm，厚さ 0.2cm の帯状の鉄板に鋲頭径 0.4mm の半頭の鋲が打たれている。

95 ～ 99 は刀子である。95 は刃部のみが残存する。残存長 5.3cm，刃部幅 0.9cm，背幅 0.4cm を測る。96 は刃部のみが残存する。残存長 5.5cm，刃部幅 1.7cm，背幅 0.55cm を測る。97 は刃部から茎部が残存する。茎部には木質が残存し，関部は両関である。残存長 4.9cm，柄部幅 1.1 ～ 0.9cm，背幅 0.5cm を測る。98 は茎部である。99 は茎部である。残存長 4.3cm，幅 1.1cm，厚さ 0.5cm を測る。茎部には木質が残存する。

100 は刀子もしくは長頸鏃の頸部である。錆の状況が 102・103 と類似するため長頸鏃の頸部の可能性が考えられるが，大きさから刀子の茎部とも考えられる。



第 29 図　城所山古墳群出土鉄器（1/2）



第30図　城所山古墳群出土馬具展開図（1/2）

101～107は鉄鏃である。101は方頭鏃である。茎の一部が欠損する。切先中央がわずかに膨らみ圭頭鏃とも考えられる。茎関は棘関を呈する。鏃身部長5.8cm，最大幅2.8cm，厚さ0.25cmを測る。茎部は残存部分のみで2.1cmを測り，復元すると3cm前後と想定できる。102は柳葉式長頸鏃である。刃部から頸部半ばの6.6cmが残存する。刃部は長さ3.0cm，幅1.2cm，厚さ0.35cmを測り，頸部は幅0.7cm，厚さ0.4cmを測る。103は長頸鏃の頸部である。残存長は2.7cmを測り，幅0.8cm，厚さ0.45cmである。104は刃部の切先のみが残存する。残存長2.4cm，厚さ0.4cmを測る。105は柳葉式鉄鏃である。切先は欠損しており，刃部のみが残存する。外形から逆刺のある有頸鏃の可能性が考えられる。残存長3.1cm，最大幅2.75cm，厚さ0.4cmを測る。106は柳葉式有頸鏃である。刃部の一部と頸部が残存し，切先と茎を欠損する。鏃身関は直角関で，茎関は棘関である。残存長は5.4cm，刃部は幅2.25cm，厚さ0.4cmを測り，頸部はながさ1.9cm，幅0.8cm，厚さ0.45cmを測る。107は柳葉式鉄鏃である。刃部のみが残存する。外形から逆刺のある有頸鏃の可能性が考えられる。残存長5.7cm，最大幅2.7cm，厚さ0.3cmを測る。

108は不明鉄製品である。残存長4.3cm，上部幅1.2cm，厚さ0.2cm，下部幅0.3cm，厚さ0.4cmを測る。何らかの工具か馬具の可能性が考えられる。

109は茎部を欠損する曲刃鎌である。残存長13.3cm，幅2.5cm，厚さ0.65cmを測る。残存部分には全て刃が付いており，茎部は完全に欠損している。基部側には前面布が付着していた。

110は袋状鉄斧である。長さ11.5cm，幅4cmを測る。袋部断面は隅丸方形を呈し，わずかに肩が張る重厚な鉄斧である。錆化が著しく形がゆがんでいるが，本来は非常につくりの良い鉄斧で，袋部の接合線は確認できなかった。

111・112は厚さ0.5cm前後の鉄板である。他の鉄器と錆び方が異なり，新しい時期のものと思われる。

これらの鉄器の時期は鉄鏃（101，106）の棘関，轡（941）の単連兵庫鎖立聞，連結手法からTK43型式以降，鉄製板錆（92）は西澤分類の小型B類に分類できることからTK209型式以降に位置づけられる。その他の鉄製品も確実な位置づけは不可能だが，TK43型式からTK209型式の範疇で捉えて違和感の無い資料である。

城所山古墳群は2基の古墳からなり，これらの鉄器は1号墳で開墾に伴い採集されたものと2号墳で発掘調査に伴い出土したものが混在している。当時の記録では2号墳から出土した遺物は以下の通りである。

須恵器坏 17，須恵器横瓶 2，須恵器はそう 1，耳環 6，鉄鏃 2，鎌 1，玉 20

また，1号墳出土の遺物は当時地元の岡良彦氏から香南町教育委員会が借り出しており，その遺物は次の通りである。

坏 2，坏破片 10 個体分，埴 5，鉄 37

このうち鉄 37 点は砕片化した轡などを含んでおり，内容は伺い知れなかった。

調査後保存整備された2号墳のそばで配布されていたリーフレットには「城所山古墳からの出土品　耳環，刀子，須恵器など多数出土した」というキャプションと遺物写真があり，写真には鉄鏃（106），耳環，須恵器広口壺と提瓶2点が掲載されている。また，『香南町史続編』（1996）によると2号墳からは「刀子・鉄鏃・耳環・鉄かま・土器（須恵器）」が出土したとされる。ただし，町史の情報は当時の記録とリーフレットを総合したものと推察できる。須恵器については記録の横瓶，ハソウがリーフレットの写真にある提瓶，広口壺に対応しているとみられ，耳環，鉄鏃も写真で確認できる。ここで問題になるのはリーフレットのキャプションにある刀子である。この刀子が写真の鉄鏃を指しているのであれば，明らかに誤認であり，刀子の出土は無かったことになる。当時の記録と今回確認した遺物を比較すると鉄鏃1点（106），鎌（109）が2号墳出土鉄器と確定できる。また，101の方頭鏃はラベルと一緒に保管されていたため，発掘調査による出土品と推定できる。これによって記録にある2号墳出土の鉄鏃2点，鎌1点は 101・106・109 と判断でき，その他の鉄器を1号墳出土と判断した。

しかし，刀子は比較的一般的な副葬品であるため，2号墳から出土していないとは言い切れず，留意しておく必要がある。

6．まとめ

城所山古墳は現在，香南町で唯一調査歴をもつ古墳で，横穴式石室を備えていたことが判明している。1号墳については不詳だが，2号墳は玄室の床面積約 376㎡であることから小規模な石室であったことが考えられる。こうした石室規模を反映するように，鉄器・装身具といった副葬品についても普遍的にみられるもので占められるが，このなかで中空耳環，鉄斧，鉄鏃については当古墳（群）の特色を示唆するように思われる。1号墳・2号墳に関して帰属が明らかな須恵器が各々まとまって出土しており，1号墳の須恵器はＴＫ 43 ～ 209 型式，2号墳ではＴＫ 209 型式の段階に該当することから，1号墳がやや先行して構築されるようである。1号墳と2号墳の比較においては，立地上の優位性や礫床の有無，想定される追葬・儀礼の期間から考えると，2号墳に対して1号墳はやや優勢な存在であったことが推察される。

以上のことが既往の調査よりうかがえることとなったが，同町においては内容が不詳となっている古墳が散見され，今後その確認と記録の整備が望まれる。

＜主要参考文献＞
岡安光彦 1984「いわゆる「素環の轡」について―環状鏡板付轡の型式学的分析と編年―」『日本古代文化研究』創刊号，ＰＨＡＬＡＮＸ－古墳文化研究会―
香川県 1987『香川県史』13 考古
白石太一郎 2006「須恵器の暦年代」『年代のものさし－陶邑の須恵器－』大阪府立近つ飛鳥博物館
瀬戸内海歴史民俗資料館 1989「香川県出土古墳時代鉄製農工具調査報告」『瀬戸内海歴史民俗資料館紀要』第4号
田辺昭三 1966『陶邑古窯址群Ⅰ』平安学園考古学クラブ
西山めぐみ 2000「古墳時代耳環考－福岡平野出土耳環の材質・製作技法について」『古文化談叢』第 44 集　九州古文化研究会
西澤正晴 2002「遠江・駿河における鉄製板鐘の変遷と展開」『研究紀要』第9号，静岡県埋蔵文化財調査研究所
森格也 2003『第6章　まとめ』『北原2号墳・北原遺跡』香川県教育委員会
渡辺智恵美 1997「耳環小考－製作技法，材質からみた分類」『創立三十周年記念誌』元興寺文化財研究所

第４章　高松市立浅野小学校展示鉄製品の調査

１．調査の経緯・経過

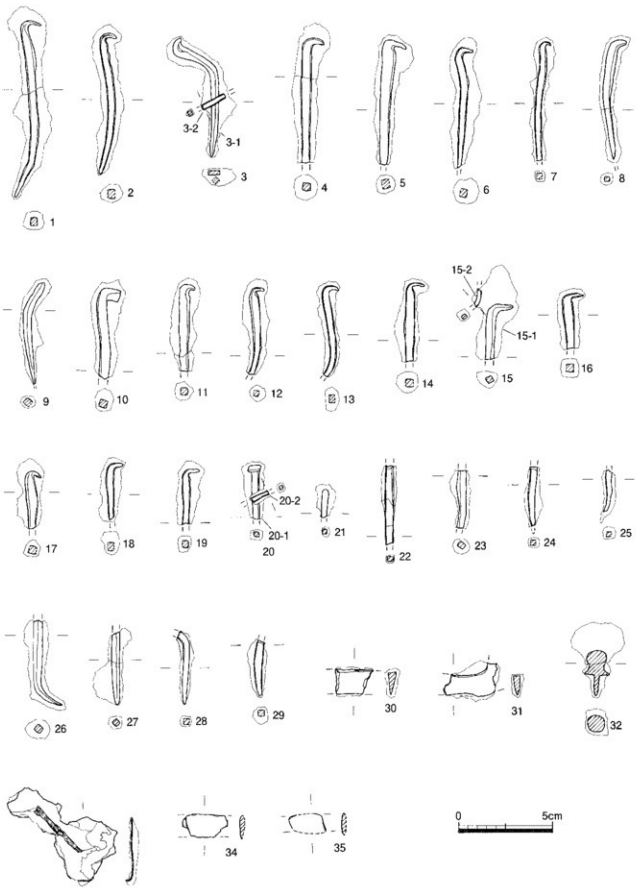
高松市立浅野小学校には，平成18年１月に本市と合併した旧香川町教委が所有している垣蔵文化財の一部が展示されている。2005年に『舟岡古墳』（香川町2005）の報告書によって，これまで詳細な報告がなされていなかった万塚古墳・剣山古墳等の出土遺物が報告された。主に須恵器の整理が行われ，古墳の時期判定がなされた。今回は前回に引き続いて整理しきれなかった鉄製品を報告してゆく。

鉄製品は鉄釘・刀子・鏃・性格不明鉄器・馬具に分けることができ，合わせて37点みられる。この鉄製品は（伝）万塚古墳出土とされるものであるが，町教委が作成した『埋蔵文化財出土遺物台帳』によると，万塚古墳の他，剣山古墳・浅野八王子古墳で遺物がまとめられている状態である。そのため，鉄製品を個別に報告するとともに，万塚古墳出土のものであるのか確認を行なう。

２．遺物報告（第31～33図参照）

１～29は鉄釘である。頭部が残っているものは21点。いずれも頭部は直角に折り曲げられ，体部は断面方形であり，幅・厚さは0.4cm前後を示す。また，頭部の作りにはいくつか折り曲げられた内側に凹みが観察できる。

１～3-1は完形品である。１は長さ9.4cmを測る。頭部は直角に折り曲げられている。頭部先端は薄くなりやや下方へ伸びる。２は長さ7.5cm幅を測る。頭部は丸みをもちながら直角に折れる。折り曲げられた内側にはやや凹みが観察できる。体部は湾曲している。３は釘が重なって出土している。3-1は長さ6.3cmを測る。体部は途中で折れ曲がる。頭部は直角に折り曲げられ，その内側には凹みが見られる。3-2は体部のみ残存するもので3-1の上に確認できる。残存長は1.4cmを測る。下部付近のものと考えられる。４～21は頭部から体部にかけて残存する。４は残存長6.6cmを測る。頭部は丸みをもちながら直角に曲げられている。５は残存長6.6cmを測る。頭部は直角に折られ，折り曲げられた内側は凹みが観察できる。また頭部の下には幅と厚さがあり膨らみがある。６は残存長6.4cmを測る。頭部はほぼ直角に折り曲げられる。７は残存長6.4cmを測り，頭部は小さく丸みをもつ。先端は尖り鉤爪状を呈する。８は残存長6.3cmを測る。頭部の折れが他のものと比べ緩く，先端は厚みがある。９は頭部の折れ部分が確認できない。頭部が欠損している可能性もある。残存長5.5cmを測る。10は残存長4.8cmを測る。11は残存長4.6cmを測る。頭部は直角に折られ，その内側には凹みが確認できる。12は残存長4.6cmを測る。頭部は直角に折られ，折り曲げられた内側に凹みが観察できる。13は残存長4.9cmを測る。頭部は丸みをもち，直角に折れる。先端は尖り鉤爪状になっている。14は残存長4.2cmを測る。頭部は直角に折り曲げられ，曲げられた内側には顕著な凹みが確認できる。頭部は薄く，丸みをもちながら先端に続く。15は土錆の中に２本含まれた状態で出土している。15-1は下部を欠損しており，頭部は直角に曲げられている。残存長は3.0cmを測る。また，15-1の左には残存長1.0cmを測る15-2の体部が確認できる。16は残存長2.9cmを測る。頭部はほぼ直角に折られ，折り曲げられた内側には凹みが確認できる。また体部上部はやや幅・厚さに膨らみが確認できる。17は残存長3.0cmを測る。頭部は直角に折り曲げられ，頭部先端は尖っている。頭部の下には幅と厚さがあり膨らみが確認できる。18は頭部から体部にかけて残存している。残存長は3.0cmを測る。頭部はほぼ直角に曲げられている。19は頭部から体部まで残存している。残存長は2.9cmを測る。頭部は直角に折られ，曲げられた内側には凹みが観察できる。20は釘が重なって出土している。この内20-1は上部のみ残存している。残存長は2.9cmを測る。頭部はほぼ直角に折られている。20-2は体部のみ残存している。残存長は1.0cmを測る。21は頭部と思われる。折れや欠損は確認できていない。残存長は1.5cmを測る。22～25は体部のみ残存している。22は残存長4.2cm，23は残存長3.1cmを測る。24・25は幅・厚さから下部付近と考えられる。24は残存長3.1cm，25は残存長2.2cmを測る。26～29は下部のみ残存している。26は下部先端が細く尖っている。先端から2cmのところでL字形に曲がっている。残存長4.5cmを測る。27は残存長3.9cmを測る。下部先端まで厚みがある。28は体部欠損部付近に折れが確認できる。残存長3.9cmを測る。29は残存長3.0cmを測る。この内，鉄釘２・４・５・８・12・26については木質が確認できた。しかし木の繊維が多方向から見られることや木質がいずれも小さいことから後に堆積した小枝の痕と判断できる。そのため釘に伴



第 31 図　（伝）万塚古墳出土鉄器（1/2）

う痕跡ではないため図化は行っていない。

30は刀子である。刃部のみが残存する。残存長20cm，刃部幅1.3cm，背幅0.5cmを測る。31は断面形から刃部と背部が見られることから刀子の一部と考えられる。背側に曲がっており，刃部幅が広がる。残存長2.7cm，刃部幅1.1cm，背幅0.4cmを測る。

32は鉄である。長さ2.4cm，幅0.9cm，厚さ0.9cmを測る。頭部は丸く体部はすぼまり，その下に針が突き出す。雲珠の宝珠形飾金具の可能性がある。

33～35は性格不明鉄器である。33は薄い金属板のようなもので，一方の端には曲がりが観察できる。残存長は6.3cm，厚さ0.1cmを測る。34は一方が鋭く尖り刃部を形成していることから刀子の一部もしくは鉄鏃の可能性がある。残存長2.5cm，幅1.2cm，厚さ0.3cmを測る。35は34と同様のものと考えられる。残存長1.7cm，幅（1.0）cm，厚さ（0.2）cm，を測る。また34・35は馬具の引手の柄に付着していたものである。

36・37は馬具である。36は環状鏡板付轡である。岡安光彦（岡安 1984）の分類を参考にすれば，「鉄飾り舌形鉤金具連結・小型矩形立聞造り環状鏡板」にあたる。鏡板は偏円形を呈し，立聞きが造り付けられている。また一方の立聞きには舌形鉤金具の一部が残っている。銜は二連銜であり，轡金の径より銜先環の径が大きい大環銜が用いられている。銜先には接合面が見られ，引手の柄を二股にした後，環状にしていることが分かる。引手はくの字引手であり，引手壺は柄からおおよそ35度に曲げられている。鏡板・銜・引手の連結方法については，銜先環に鏡板と引手を連結した「引手・銜共連法」と呼ばれるものである。37は環のみであるが，環から伸びる柄の部分に曲がりが確認できることから引手壺であることが分かる。また36の引手壺の欠損状況から37は36に繋がるもので同一個体であると考えられる。

3．まとめ

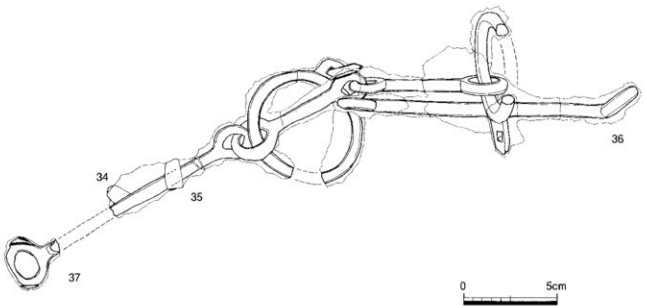
鉄製品の出土先を確認する。確認については文献に記載されている鉄製品と照らし合わせてゆく。しかし，剣山古墳については正式な調査が行われずに消滅しているため詳細が不明である。文献上で確認できるものは万塚古墳と浅野八王子古墳であるため，この確認が可能な古墳をみてゆく。

万塚古墳・剣山古墳・浅野八王子古墳の出土遺物を整理すると，鉄製品が出土している古墳は万塚古墳と浅野八王子古墳が確認されている。万塚古墳からは鉄鏃，鉄刀，鉄片，雲珠，止金，方形の飾，鐙が出土しており，浅野八王子古墳からは銜と鉄製の鏃らしき遺物が出土していると記載されている。この内，今回整理した鉄製品には鉄鏃，鐙，雲珠，方形の飾，鉄製の鏃は見られなかった。

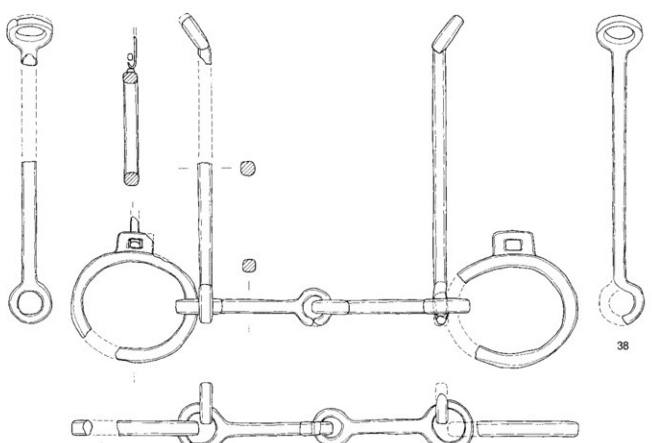
報告書の記載と一致するもの，もしくは近いものについて個別に見ていけば，馬具（36・37）は浅野八王子古墳の報告書の記載と一致する。また，馬具に付着した性格不明鉄器（34・35）は報告書の記載からすれば鉄鏃の可能性が考えられる。鉄（32）は雲珠の飾金具の一部と考えられることから万塚古墳の出土遺物の可能性がある。性格不明鉄器（33）は木質の付着跡が残されているという記載から万塚古墳出土の鉄片であると考えられる。刀子（30・31）については報告書の記載に近いものに鉄刀が見られるが，実際に整理したものと，記載されている寸法と形状が異なるため万塚古墳出土のものとは言い切れない。鉄釘（1～29）については両古墳の報告書には記載がないため，記載漏れまたは剣山古墳から出土した遺物の可能性もある。

以上，（伝）万塚古墳出土遺物には浅野八王子古墳の出土遺物が含まれていることが確認できた。しかし，万塚古墳の出土遺物については文献と一致せず，判然としないため可能性に留めておくこととする。

＜主要参考文献＞
香川町史編集委員会 1970『香川町史』
井上勝之・中原耕男 1973「香川県浅野八王子古墳調査報告」『文化財協会報』第58号　香川県文化財保護協会
香川町誌編集委員会 1993『香川町誌』
岡安光彦 1984「いわゆる「雲環の轡」について」『日本古代文化研究』創刊号，PHALANX－古墳文化研究会―
岡安光彦 1985「環状鏡板付轡の規格と多変量解析」『日本古代文化研究』第2号，PHALANX－古墳文化研究会―
金田善敬 2003「古墳時代の鉄釘」『考古資料大観』第7巻　小学館
香川町教育委員会 2005『舟岡古墳 附 万塚古墳・剣山古墳等出土遺物の調査』



第32図　(伝) 万塚古墳出土馬具 (1/2)



第33図　(伝) 万塚古墳出土馬具展開図 (1/2)

第５章　池谷窯跡（いけたにかまあと）

１．発見の経緯・経過

池谷窯跡は香南町山佐において，昭和60年11月16日に町道と接する斜面が一部崩れたことから発見された。詳細な確認調査などは行われていないが，大坪窯をはじめ周辺に分布する須恵器窯でみられる赤焼けの須恵器片（８点）や窯壁塊が採取された。こうしたことから，昭和60年11月27日付けで香南町教育委員会より文化庁に遺跡発見届（旧埋蔵文化財保護法第57条の６）が提出されている。

第34図　池谷窯跡位置図（1/5,000）

２．立地環境（第34図参照）

池谷窯跡が位置する香南町南西部は，阿讃山脈から派生する丘陵，台地が西へ広がり，これを北西方向に細長く分断する谷筋が顕著で，これらは大坪川，西谷川などの谷川となり，高松市西部を抜ける本津川の源となっている。こうした丘陵及び水系の利点に加えて，当該域は陶器原料に適した粘土の産地とされており，古窯址の分布地として知られる。現在確認されているものでは，大坪窯，茶園窯，音谷池東岸窯跡といった音谷古窯址群，及びこれより水系に沿ってやや下った位置に新池窯があるほか，周辺で須恵器の散布地が点在しており更に古窯址群が拡大するものと考えられている。当該の池谷窯跡については，本津川の源流とされる琴谷池の開析谷に西面し，東側は須恵器の散布地である音谷池西岸遺跡と細長い丘陵を挟んで位置する。またこの谷を西に越えた中尾池東岸部においても，須恵器の散布が知られている。

３．出土遺物（第35図参照）

図化した以外の細片も含め表採の須恵器片は，全て酸化焔焼成で器面は橙色を呈した軟質のものとなっている。

１は須恵器坏蓋で，口径14.7cmに復元できる。天井部から口縁部へと緩やかに下り，端部を小さく下方に摘み出す。２は須恵器坏皿で，口径18.4cmに復元できる。平底のもので，緩く外反した口縁部をもつ。１・２とも器面は摩滅しているが，内面に轆轤痕を残す。１・２の所属時期については，概ね８世紀代と推定される。

３～５は，窯壁とされた粘土塊である。赤化部分は複数の側面に及んでおり，２次的な被熱の可能性もある。

第35図　池谷窯跡出土遺物（1/4・1/2）

＜参考文献＞古代の土器研究会 1992『都城の土器集成Ⅰ』，佐藤竜馬 1992「香川県十瓶山窯跡群における須恵器編年」『関西大学考古学研究室開設40周年記念考古学論叢』，瀬戸内海歴史民俗資料館 1985「香川県古代窯業遺跡分布調査報告Ⅱ」『瀬戸内海歴史民俗資料館紀要』第２号

第6章　山下墳墓跡（やましたふんぼあと）

1．発見の経緯・経過

山下墳墓跡は香川町大野地区において，昭和47年6月に田畑の開墾中に土器棺が発見されたことにより周知の遺跡となっている。発見時の詳細な記録はなく，土器棺の取り上げ作業を主眼とした発見地点のみの確認となったようである。この後，取り上げられた土器棺は，町教委の郷土室で展示されていたが，平成18年の高松市との合併に伴って，市教委へ引き継がれた。

第36図　山下墳墓跡位置図（1/5,000）

2．立地環境（第36・37図参照）

山下墳墓跡が位置する香川町の北部は，南部でみられる丘陵および段丘状の地形から下った平野に相当している。墳墓とされる当地点周辺は，発見時において水田であったことから，墳丘状の高まりはなかったものと考えられる。やや離れた丘陵部においては通谷遺跡，円養寺遺跡など当該期の墓域が点在していることが知られているが，現状ではこれらの墓域に相当するような景観にはない。周辺部の集落遺跡について同町内での調査事例はないが，平野及び丘陵部ともに弥生土器，石鏃や石庖丁などの散布地が知られている。また隣接する香南町の岡清水遺跡では，当該期の竪穴住居で構成された居住域において土器棺墓が確認されており，こうした事例から周辺で集落が存在する可能性が考えられる。

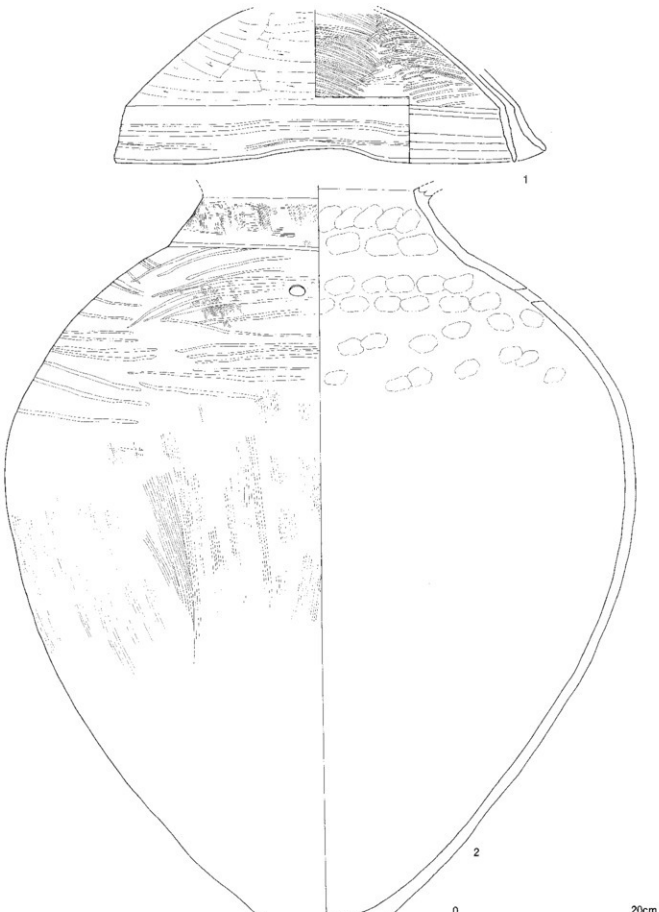
第37図　土器棺出土地点

3．出土遺物（第38図参照）

出土状況について現状では確認できないが，径1.1m，深さ0.8mと記録される墓壙の大きさと，以下に記す棺の法量から考え合わせると，身を大きく傾けて据えられていたと推定される。

1・2は弥生土器鉢及び壺で，各々棺の蓋と身に相当する。現況においては，1の鉢が半分相当の片側を欠損した状態で，2の壺についてはほぼ完存するが，口縁部を全周して打ち欠き，また体部上半部にも口縁部と同様な大きさで打ち欠いており，2箇所で開口した状態となっている。

1は片口付の鉢で口径42.2cm，残存高16.1cmを測る。やや外傾し長く伸びた口縁部には，鋭い横方向のナデが施されている。体部外面はヘラ削り，内面については見込みを分割してヘラ磨きを施している。2の壺は残存高78.6cm，胴位66.6cmを測る。現在，高松市内で確認された土器では最大の法量となり，通例，小児用の棺と理解されているものと比べても異質である。器形は頸部が下方に開き，体部は卵形で肩が張らずに最大径を体部の中位にもつ。底部の平坦面は小さいが，側面には10cm程を単位とする粘土帯が4段相当にわたってみられる。調整については外面が頸部及び体部に縦方向のハケ調整後，体部上半部に横方向の分割ヘラ磨きが加えられている。内面はナデ調整により仕上げられるが，上半部では横方向に並ぶ指押さえの痕が認められる。また体部上端部には，径2cm程の円孔が穿たれている。1・2とも胎土には角閃石が認められ，所属時期は弥生時代後期後半と考えられる。



第 38 図　山下墳墓跡出土遺物（1/4）

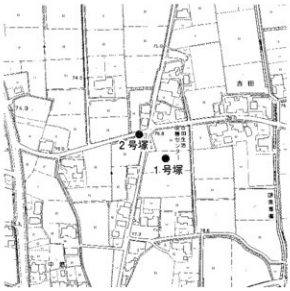
第７章　香南町の塚調査

１．古田１号塚（第 39・40 図参照）

香南町池内地区における団体営圃場整備事業により，当該地に所在する古田１～３号塚が昭和 59・60 年に漸次，調査された。何れも町教委が調査主体となったが，古田３号塚については香川県教育委員会が職員を派遣し記録調査を行い，既に調査報告（香川県教育委員会 1988）がなされている。これによれば，３号塚は埋葬施設を伴わない２×１ｍの長円形を呈したマウンドで，若干量の中世土器を包含することが確認されている。当地の立地については，段丘の縁辺に位置する平野で，当時の現況は何れも水田となっている。

１号塚については昭和 60 年７月 23・24 日で調査が実施されており，以下，当時の記録をもとに報告する。

現況（調査当時）で若干のマウンドが認められるが，これについては地元関係者の話によると，近隣にあった塚を移築したものであるという。こうしたことから現況のマウンドを調査するとともに，この地元関係者の記憶に従いトレンチを設定し確認調査が実施されている。現況のマウンドについては現地表面に相当する盛土のみを構造とし，盛土からは備前系擂鉢・土師質土器片，近世瓦や鉄釘類の細片が出土している。トレンチ調査では東西方向に主軸をもつ，長軸 2.1 ｍ，短軸 1.3 ｍ程の隅丸方形を呈したマウンドが確認された。マウンドの高さは 0.1 ｍ程度で，現耕作土の直下で認められている。埋葬施設に相当するようなマウンドの下部で遺構は確認されていないが，若干量の土師質土器細片が出土している。このほかの出土遺物として，地権者によって塚が移築される以前に採取された打製石斧（１），土師質土器足釜（２～４，６・７），土師質土器甕（５）がある。

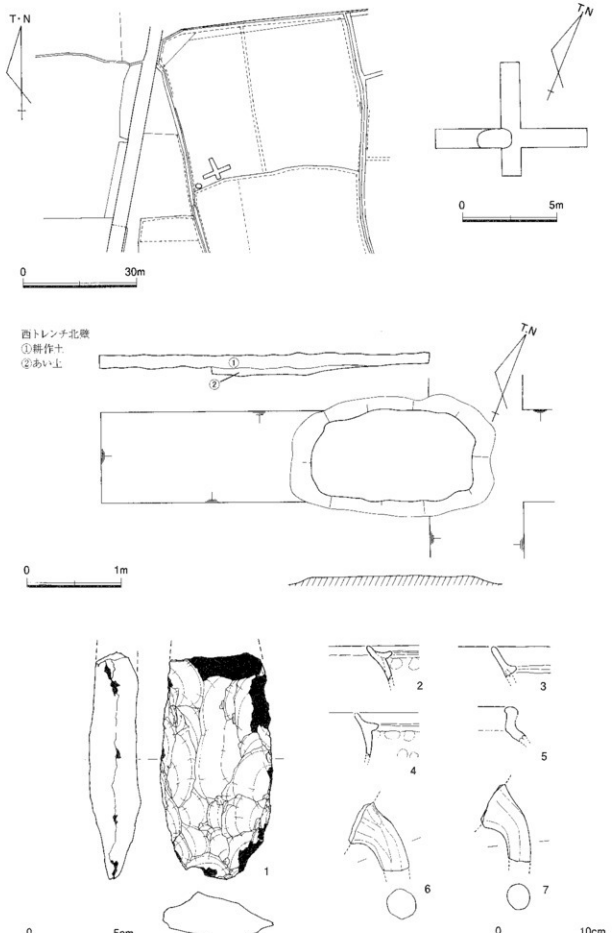


第 39 図　古田１・２号塚位置図（1/5,000）

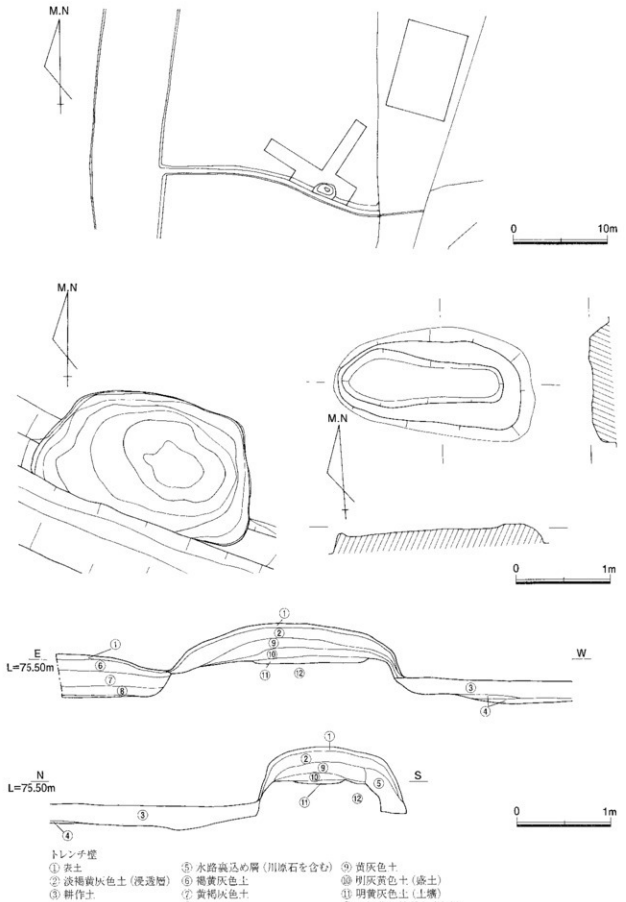
２．古田２号塚（第 39・41 図参照）

２号塚については，上記の圃場整備事業に伴い，町教委が昭和 59 年９月 29 日付けで発掘届（旧文化財保護法 98 条の２）を文化庁へ提出，同年の 11 月１日～ 12 日において香川県教育委員会の指導の下，発掘調査を実施している。調査は塚本体に加えて，周辺の遺構確認を目的としたトレンチ調査が実施しされている。以下，当時の記録をもとに報告する。

現況（調査当時）は，東西 2.3 ｍ，南北 1.3 ｍ，高さ 0.3 ｍを測る東西方向に主軸をもつ楕円形のマウンドとして認められるが，これに南接する現有の水路及び畦畔に取り込まれたかたちとなっている。土層観察によれば，南端が水路設置により切取られ（⑤層），また盛土の大半は現地表面を構成する堆積層（①・②・⑨層）となっている。マウンドの下半部については地山層であり，耕作や水路設置といった水田経営から取り残された範囲として理解される。この地表層を除去した地山面では，マウンドの主軸に合致して長軸 1.7 ｍ，短軸 0.4 ～ 0.6 ｍ，深さ 0.05 ～ 0.08 ｍの隅丸方形を呈した土壙が検出されており，土師質土器足釜脚部，備前壺或は甕の小片が出土したとされる（備前については，現在は確認できない）。この土壙を検出状況や出土品によって埋葬施設として断定できないが，同様のマウンドをもつ１・３号塚が中世後半以降に形成された盛土としてしか把握しえない状況とは異なっている。しかしながら中近世以降から現在に至る間，塚として伝承され耕作地において存続しえた根拠としてはなお乏しい。塚の周囲に設定したトレンチ調査については，遺構は検出されていないが，近世陶磁器や土師質土器の細片が出土しており近隣に当該期の集落が存在したことが示唆される。なお，嘗て当地周辺では１～３号以外にも数基の塚が認められたという。



第 40 図　古田 1 号塚周辺地形図（1/1,000），トレンチ配置図（1/200），塚平・断面図（1/40），採助遺物（1/2・1/4）



第 41 図　古田２号塚周辺地形図（1/400），塚平・断面図（1/40）

3．池谷1号塚（第42・44図参照）

香南町由佐地区に所在する池谷1号塚は，香南町教育委員会が昭和61年9月に地元からの依頼をうけて調査を実施した。調査期間は，昭和61年9月4日・25日の2日である。立地は香南町南部にあたる丘陵の開析谷斜面に位置しており，現況は田となっている。現地表面にはマウンド状の高まりはないが，塚石とされる人頭大の石が認められ調査はこれを基点にトレンチを設定し確認がなされている。

トレンチ掘削の結果，塚石は立石で現耕作土中に据えられたもので，これからは若干ずれた位置で集石遺構が確認された。集石遺構の検出面は，地表から約0.6 mの深度を測り現耕作土より下位の堆積に被覆されている。集石遺構は平面が不整形な楕円状の掘り込みをもっており，この上部に拳大～人頭大とみられる円礫と泥土でマウンドを形成したものとなっている。平面の規模は1.2～1.4 m，高さは0.45 m程である。集石を除去し確認が採られているが，遺構及び出土遺物は認められない。出土遺物については，集石遺構とともにトレンチ範囲においても確認されていない。

第42図　池谷1号塚位置図（1/5,000）

4．天神岡1号塚（第43・45図参照）

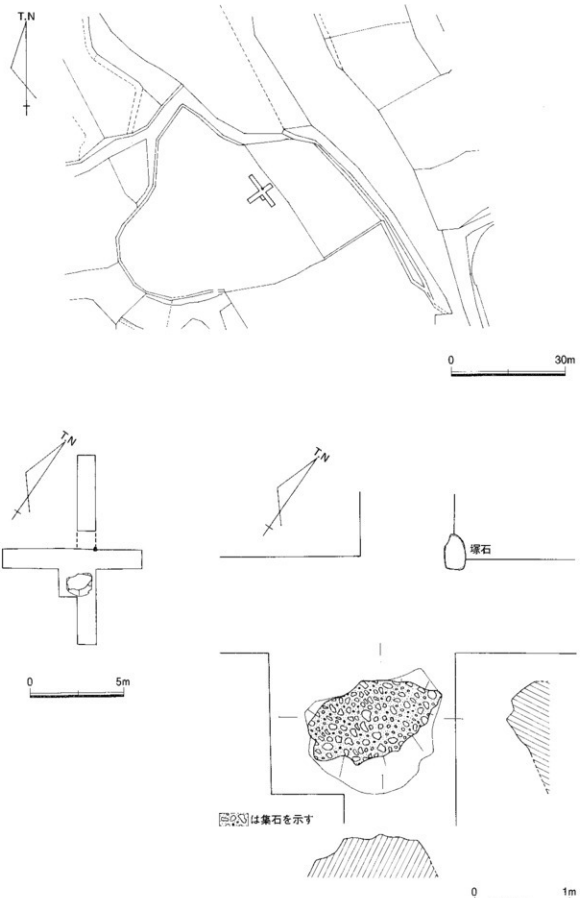
香南町西庄に所在する天神岡1・2号塚は，同地区の圃場整備事業に先立ち，平成3年1月14日に香川県教育委員会が試掘調査を実施している。その結果，1号塚では集石遺構をもつことが判明し，加えて中世土器が出土したことから事前の保護が図られることとなった。2号塚については地表面に五輪石（地輪）が認められるが，トレンチ調査において地下遺構を伴うものではないと判断され，保護措置の対象から外れている。以上のような結果を受け，香南町教育委員会は平成3年6月7日付けで発掘届（旧埋蔵文化財保護法第98条の2）を文化庁に提出し，同年6月12日～14日に発掘調査を実施している。

天神岡1号塚は，2号塚とともに平野に面した丘陵の先端部に位置しており調査以前の現況は水田となっていた。この水田の畦畔に取り付くかたちで，長軸約4 m，短軸約3.3 m，高さ約0.8 mのマウンドが認められる。マウンドの構造についての詳細な記録を現在確認できないが，試掘調査の結果を参考にすれば，大半部が地山上に盛土を行ったもので，盛土部分は川原石を用いた集石であったことが分かる。また盛土の裾部は，川原石を列石状にめぐらすものであった可能性がある。

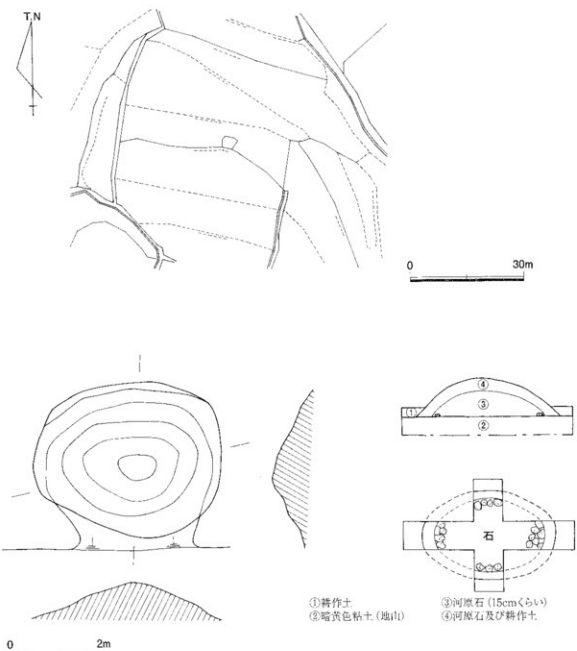
出土遺物についても現在確認することができないが，保管証などから当該発掘調査で土師器土鍋・甕，須恵器甕・壺，瓦片などコンテナ3箱があったことが推定される。

第43図　天神岡1・2号塚位置図（1/5,000）

＜参考文献＞
香川県教育委員会 1988『香川県埋蔵文化財調査年報　昭和59年度～昭和60年度』



第 44 図　池谷 1 号塚周辺地形図（1/1,000），トレンチ配置図（1/200），塚平・断面図（1/40）



第45図　天神岡1号塚周辺地形図（1/1,000），塚平・断面図（1/80），略図

第３表　横岡山古墳出土遺物観察表

（　）の数値は残存値を示す

番号	出土遺構名	種別	器種名	法量(cm) 口径	器高	底径	焼成	胎土	色調	調整 外面	内面	備考
1	墳道+旧香南町保管品	須恵器	杯蓋	13.6	(3.9)	—	良	1mm大の長石,石英,黒色粒を含む	内・外面:灰N6/0	回転ナデ,天井部:回転ヘラケズリ	回転ナデ	反転図
2	墳道+前庭部	須恵器	杯身	12.5～12.8	(4.1)	—	良	2mm以下の長石,石英,黒色粒を含む	外面:灰N4/0 内面:灰N6/0	回転ナデ,底部:回転ヘラケズリ	回転ナデ	轆轤回転:左方向
3	墳道	須恵器	杯身	11.9～12.4	4.5	—	良	3mm以下の長石,石英,黒色粒を含む	外面:灰N6/0 内面:灰N5/0	回転ナデ,底部:回転ヘラケズリ,下端未調整(回転ヘラ切り)	回転ナデ	轆轤回転:右方向 外面に緑色の自然釉掛かる
4	墳道	須恵器	杯身	11.1	3.8	—	良好	1mm大の長石,石英,黒色粒を含む	内・外面:灰N6/0	回転ナデ,底部:未調整(回転ヘラ切り)	回転ナデ	口縁内側から外面にかけて,灰オリーブ色の自然釉掛かる。受け部に熔着痕
5	墳道	須恵器	杯身	10.8	(3.7)	—	良好	1mm大の長石,石英,黒色粒を含	外面:灰N6/0 内面:灰N5/0	回転ナデ,底部:未調整(回転ヘラ切り)	回転ナデ	体部外面に緑色の自然釉掛かる
6	墳道	須恵器	無蓋高杯	14.1	7.0	10.9	良	1mm大の長石,石英を含む	外面:灰N6/0 内面:灰N5/0	回転ナデ	回転ナデ	
7	墳道	須恵器	短頸壺蓋	9.8	3.4	—	良好	1mm大の長石,石英を含む	内・外面:灰N5/0	回転ナデ,天井部:未調整(回転ヘラ切り)	回転ナデ	
8	墳道	須恵器	(長頸)壺体部	—	(6.8)	—	良好	砂粒をほとんど含まない	外面:灰白5Y7/1 内面:灰N6/0	回転ナデ	回転ナデ	外面に灰白色の自然釉掛かる,反転図、壺底部9と同一個体か
9	墳道+旧香南町保管品	須恵器	壺底部	—	(4.0)	—	良	砂粒をほとんど含まない	外面:灰N5/0 内面:灰N6/0	回転ナデ	回転ナデ	反転図 壺8と同一個体か
10	墳道	土師器	壺	—	(10.5)		良	2mm大の長石,石英,褐色粒を含む	内・外面:鈍い橙7.5YR7/4	摩滅・剥離のため不明	ナデ,指押さえ	反転図
11	墳道+旧香南町保管品	須恵器	横瓶口縁部	4.8	(6.9)	—	良好	微砂粒,黒色粒を含む	外面:灰白7.5YR7/1 内面:灰N5/0	口・頸部:回転ナデ	口・頸部:回転ナデ,体部ナデ	一部反転図,外面に灰白色の自然釉掛かる
12	墳道	須恵器	提瓶	6.6～6.9	24.7	—	良好	1mm大の長石,石英を含む	外面:灰N5/0～赤褐10R4/4 内面:灰N5/0	口縁部:回転ナデ,体部格子目状叩き後カキ目	口縁部:回転ナデ,体部:同心円当て具痕	
13	墳道	須恵器	広口壺口縁部	—	(11.3)	—	良好	1mm大の長石,石英,黒色粒を含む	外面:灰N5/0 内面:黄灰2.5Y6/1	回転ナデ,頸部:波状文	回転ナデ	前庭部中～下層出土に同一個体とみられるものあり
14	墳道	須恵器	広口壺口縁部	—	(11.4)		良好	1mm大の長石,石英,黒色粒を含む	外面:黄灰2.5Y6/1 内面:灰5Y6/1	回転ナデ,頸部:波状文	回転ナデ	
15	墳道	須恵器	壺頸部	—	(10.3)	—	良好	1mm大の長石,石英,黒色粒を含む	内・外面:黄灰2.5Y5/1	回転ナデ,頸部:波状文	頸部:回転ナデ 体部:青海波	頸部外面下半に白色の自然釉掛かる
16	第4トレンチ周溝	須恵器	無蓋高杯口縁部	10.6	(3.3)	—	良好	砂粒をほとんど含まない	内・外面:灰N5/0	回転ナデ,列点文	回転ナデ	反転図
17	第1トレンチ周溝	須恵器	体部	—	—	—	良好	1mm大の長石,石英,黒色粒を含む	内・外面:灰N6/0	平行叩き後カキ目	青海波	
18	玄室+旧香南町保管品	須恵器	杯蓋	14.1	(3.8)	—	良	微砂粒を含む	内・外面:灰N5/0	回転ナデ,天井部:未調整(回転ヘラ切り)	回転ナデ	
19	前庭部中・下層	須恵器	壺	14.2	30.6		良好	黒色粒を含む,砂粒はほとんど含まない	内・外面:灰N6/0～5Y5/1	口・頸部:回転ナデ,体部上半:カキ目,中位:平行叩き後カキ目,下半:平行叩き	口・頸部:回転ナデ,体部～底部:青海波,横ナデ	図上復元,内外面に灰オリーブ色の自然釉掛かる。墳道部出土No.1他に同一個体とみられるものあり
20	前庭部排水溝内	須恵器	体部		(12.5)		良	1mm大の長石,石英,黒色粒を含む	内・外面:灰N6/0	上半:平行叩き後カキ目,下半:平行叩き,下端:摩耗	青海波	反転図

第４表　(伝) 横岡山古墳出土遺物 (土器) 観察表

（　）の数値は残存値を示す

旧報文番号は，香川町教育委員会2005『片岡古墳 附 万塚古墳・剣山古墳等出土遺物の調査』のもの

番号	出土遺構名	種別	器種名	法量(cm) 口径	器高	底径	焼成	胎土	色調	調整 外面	内面	備考
21	—	須恵器	提瓶	6.8	19.4	—	良好	砂粒をほとんど含まない	内・外面:灰N4/0～6/0	回転ナデ,体部背面:未調整(回転ヘラ切り)	回転ナデ	津森氏所蔵 反転図
22	—	須恵器	無蓋高杯	15.0	8.5	11.0	不良	砂粒をほとんど含まない	外面:灰白N8/0 内面:灰白N7/0	回転ナデ	回転ナデ	旧香南町保管品+浅野小学校保管旧報文番号10-7と接合
23	—	須恵器	高杯脚部		(5.7)	11.2	良	砂粒をほとんど含まない	外面:灰N5/0 内面:灰N6/0	回転ナデ	回転ナデ	旧香南町保管品+浅野小学校保管旧報文番号10-5と接合
24	—	須恵器	長頸壺	7.8	17.3	6.5	良	1～2mm大の長石,石英を含む	内・外面:灰N5/0	回転ナデ,体部下半:回転ヘラケズリ	口・頸部:回転ナデ	旧香南町保管品+浅野小学校保管旧報文番号10-12と接合
25	—	須恵器	無蓋高杯	16.6	14.4	12.1	良好	砂粒をほとんど含まない	外面:灰N5/0 内面:灰白7.5Y7/1～灰	回転ナデ,脚部:カキ目	回転ナデ	旧香南町保管品,浅野小学校保管(伝)剣山古墳出土品3と接合

26	—	須恵器	台付広口壺	17.0	32.3	17.2	良	微砂粒を含む	外面:灰N6/0～オリーブ黒5Y3/1 内面:灰N5/0	口縁部:回転ナデ,頸部:カキ目後沈線3条,2区画に斜線文,体部中位:カキ目,下半:回転ヘラケズリ,脚接合部に粗いケズリ,脚部上半:カキ目,下半:回転ナデ	脚部:回転ナデ	旧香南町保管品+浅野小学校保管旧報文番号10-1と接合,他に同一個体とみられる脚部片あり,口・頸部の内側,肩部外面に灰オリーブ色の自然釉掛かる,脚部の歪み大きい
27	—	須恵器	壺	7.8	4.8	-	良好	1mm大の長石,石英,黒色粒を含む	外面:灰N5/0 内面:灰5Y4/1	回転ナデ,沈線による区画に斜線文	回転ナデ	浅野小学校保管品。旧報文番号10-8
28	—	須恵器	坏	9.5	5.4	—	良好	微砂粒を含む	内・外面:灰N5/0	回転ナデ,上半部:沈線による区画に斜線文	回転ナデ	浅野小学校保管品。旧報文番号10-10。底部外面に暗オリーブ～灰色の自然釉掛かる
29	—	須恵器	坏	10.0	4.6	—	良	2mm以下の長石,石英を含む	内・外面:灰N6/0	回転ナデ,底部:回転ヘラケズリ,下端未調整(回転ヘラ切り)	回転ナデ	浅野小学校保管品。旧報文番号10-11。轆轤回転:右方向
30	—	須恵器	坏蓋	14.0	4.3	—	良	微砂粒を含む	外面:灰N5/0 内面:灰N6/0	回転ナデ,天井部:回転ヘラケズリ,頂部未調整(回転ヘラ切り)	回転ナデ,天井部:不調整	浅野小学校保管品。旧報文番号10-14。轆轤回転:右方向
31	-	須恵器	坏蓋	13.8	5.0	—	不良	1mm大の長石,石英,黒色粒を含む	外面:灰白7.5Y8/1 内面:灰白2.5Y7/1	回転ナデ,天井部:回転ヘラケズリ,頂部未調整(回転ヘラ切り)	回転ナデ	浅野小学校保管品。旧報文番号10-16。轆轤回転:右方向
32	—	須恵器	坏身	12.8	4.7	—	不良	1mm大の長石,石英,黒色粒を含む	外面:灰白5Y6/1 内面:灰白5Y7/1	回転ナデ,底部:回転ヘラケズリ,下端未調整(回転ヘラ切り)	回転ナデ,見込:仕上げナデ	浅野小学校保管品。旧報文番号10-17。轆轤回転:右方向
33		須恵器	無蓋高坏	13.2	9.2	11.0	良	1mm大の長石,石英,黒色粒を含む	内・外面:灰N6/0	回転ナデ	回転ナデ	浅野小学校保管品。旧報文番号10-4
34	—	須恵器	無蓋高坏	13.0	8.6	11.0	良	1mm大の長石,石英,黒色粒を含む	内・外面:灰N5/0	回転ナデ	回転ナデ	浅野小学校保管品。旧報文番号10-6
35	·	須恵器	高坏蓋	13.8	4.6	—	良	1mm大の長石,石英を含む	内・外面:灰N5/0	回転ナデ,天井部:回転ヘラケズリ	回転ナデ	浅野小学校保管品。旧報文番号10-9。轆轤回転:右方
36		須恵器	長頸壺体部	—	(9.9)	—	不良	微砂粒,黒色粒を含む	内・外面:灰5Y6/1	上半:回転ナデ,下半:回転ヘラケズリ	—	浅野小学校保管品。旧報文番号10-13。轆轤回転:左方向,底部は摩滅し,中央部に焼成後の穿孔?
37		須恵器	広口壺	16.0	22.2	—	良好	2～3mm大の長石,石英を含む	外面:灰N4/0 内面:灰N5/0	口・頸部:回転ナデ,頸部:カキ目,沈線2条,斜線文,体部中位:カキ目,下半:回転ヘラケズリ	口・頸部:回転ナデ	浅野小学校保管品。旧報文番号10-2。内面から外面上半に灰白色の自然釉掛かる。轆轤回転:右方向
38	-	須恵器	坏蓋	14.0	(3.7)	—	良	1mm大の長石,石英を含む	外面:灰N6/0 内面:灰5Y6/1	回転ナデ	回転ナデ	旧香南町保管品。反転図
39	—	須恵器	坏蓋	14.2	(3.3)	—	良	砂粒をほとんど含まない	外面:灰N5/0 内面:灰N6/0	回転ナデ	回転ナデ	旧香南町保管品。反転図
40		須恵器	坏蓋口縁部?	13.4	(2.6)	—	良好	1mm大の長石,石英を含む	外面:灰白7.5Y7/1 内面:灰N5/0	回転ナデ	回転ナデ	旧香南町保管品。反転図
41	—	須恵器	坏蓋	13.4	(3.9)	—	良	微砂粒を含む	外面:灰N5/0 内面:灰N4/0	回転ナデ	回転ナデ	旧香南町保管品。反転図
42	—	須恵器	坏身口縁部		(2.9)	—	良好	砂粒をほとんど含まない	外面:灰7.5Y6/1 内面:灰N6/0	回転ナデ	回転ナデ	旧香南町保管品。
43	—	須恵器	坏身口縁部	—	(2.3)	—	良	微砂粒を含む	内・外面:灰N6/0	回転ナデ	回転ナデ	旧香南町保管品。
44	—	須恵器	高坏蓋	12.9	4.9	—	不良	微砂粒を含む	外面:灰白N8/0 内面:灰白N8/0	回転ナデ,天上部:回転ヘラケズリ	回転ナデ	旧香南町保管品。反転図
45		須恵器	高坏蓋	13.6	5.1	—	良	微砂粒を含む	外面:灰N4/0 内面:灰N5/0	回転ナデ,天上部:回転ヘラケズリ	回転ナデ	旧香南町保管品。轆轤回転:左方向
46	—	須恵器	脚部	—	(1.6)	11.2	良	微砂粒を含む	内・外面:灰7.5Y6/1	回転ナデ	回転ナデ	旧香南町保管品。反転図
47		須恵器	高坏脚部	—	(11.3)	(1.7)	良	微砂粒を含む	外面:灰N6/0 内面:灰N5/0	回転ナデ	回転ナデ	旧香南町保管品。反転図
48	—	須恵器	ハソウ体部	—	(5.2)		良	砂粒をほとんど含まない	内・外面:灰N5/0	回転ナデ	回転ナデ	旧香南町保管品。反転図
49	—	須恵器	広口壺口縁部	16.8	(2.8)	—	良好	砂粒をほとんど含まない	外面:灰N5/0 内面:灰白5Y7/1	回転ナデ	—	旧香南町保管品。反転図。頸部内・外面に暗オリーブ色の自然釉掛かる
50	—	須恵器	広口壺口縁部	—	(9.1)	—	良好	1mm大の長石,石英,黒色粒を含む	外面:オリーブ灰2.5GY5/1 内面:灰5/0	回転ナデ	回転ナデ	旧香南町保管品。頸部外面に暗オリーブ色の自然釉掛かる
51	-	須恵器	広口壺頸部	—	(7.6)	—	良好	微砂粒,黒色粒を含む	内・外面:灰N5/0	回転ナデ,頸部:斜線文	回転ナデ	旧香南町保管品。頸部外面下半に暗オリーブ色の自然釉掛かる
52		須恵器	体部	—	—	—	良好	砂粒をほとんど含まない	外面:灰赤2.5YR5/2 内面:鈍い橙2.5YR6/3	格子目状叩き	青海波	旧香南町保管品。
53	—	土師器	[illegible]壺	—	(8.8)	—	良	微砂粒を含む	外面:鈍い黄橙10YR7/3 内面:鈍い黄橙10YR7/2	ナデ	ナデ	旧香南町保管品。一部反転復元
54	—	弥生土器	甕口縁部	—	(2.5)	—	良	1mm大の長石,雲母を含む	外面:黄褐10YR5/6 内面:鈍い褐7.5YR5/4	凹線,[illegible]文	横ナデ	旧香南町保管品。
55		石器	石包丁	長さ:(3.9),幅:(3.8), 厚さ:0.9,重さ:18.7g				—	—	—	—	旧香南町保管品。サヌカイト製
56	—	石器	太型蛤刃石斧	長さ:(13.8),幅:7.8, 厚さ:5.0,重さ:981.5			—	—	—	—	—	旧香南町保管品。砂岩製

第6表　城所山1号墳出土遺物（土器）観察表

（　）の数値は残存値を示す

番号	出土遺構名	種別	器種名	法量(cm) 口径	器高	底径	焼成	胎土	色調	調整 外面	内面	備考
1	1号墳	須恵器	坏蓋	15.3	(4.5)	—	良	砂粒をほとんど含まない	内・外面:灰N6/0	回転ナデ,天井部:回転ヘラケズリ	回転ナデ	
2	1号墳	須恵器	坏蓋	14.0〜14.4	4.3	—	良	微砂粒を含む	外面:灰N4/0 内面:灰N5/0	回転ナデ,天井部:回転ヘラケズリ	回転ナデ	轆轤回転:右方向
3	1号墳	須恵器	坏蓋	13.6	4.6	—	不良	2mm以下の長石,石英,黒色粒を含む	内・外面:灰白2.5Y8/2	回転ナデ,天井部:回転ヘラケズリ,頂部未調整	回転ナデ	轆轤回転:左方向
4	1号墳	須恵器	坏蓋	13.6	3.7	—	良	1mm大の長石,石英,黒色粒を含む	外面:灰N4/0 内面:灰N5/0	回転ナデ,天井部:回転ヘラケズリ,頂部未調整(回転ヘラ切り)	回転ナデ	轆轤回転:左方向
5	1号墳	須恵器	坏蓋	13.0	4.1		不良	微砂粒を含む	外面:褐灰10YR6/1	回転ナデ,天井部:回転ヘラケズリ,頂部未調整	回転ナデ	轆轤回転:右方向
6	1号墳	須恵器	坏蓋	12.7	4.2	—	不良	2mm以下の長石,石英,黒色粒を含む	外面:灰黄2.5Y7/2 内面:灰N6/0	回転ナデ,天井部:回転ヘラケズリ,頂部未調整	回転ナデ	轆轤回転:右方向
7	1号墳	須恵器	坏蓋	12.7	4.9		不良	2mm以下の長石,石英,黒色粒を含む	外面:灰7.5Y6/1 内面:灰白10Y7/1	回転ナデ,天井部:回転ヘラケズリ,頂部未調整(回転ヘラ切り)	回転ナデ,天井部:仕上げナデ	轆轤回転:左方向
8	1号墳	須恵器	坏蓋	13.9	(4.2)	—	良	1mm大の長石,石英,黒色粒を含む	外面:灰N6/0 内面:黄灰	回転ナデ,天井部:回転ヘラケズリ	回転ナデ	轆轤回転:右方向
9	1号墳	須恵器	坏蓋	13.4	(2.9)	—	良好	微砂粒を含む	外面:灰N4/0 内面:灰N5/0	回転ナデ	回転ナデ	
10	1号墳	須恵器	坏蓋	13.0	(2.7)		良	微砂粒を含む	内・外面:灰白5Y8/1	回転ナデ	回転ナデ	
11	1号墳	須恵器	坏身	12.4	4.6	—	良好	1mm大の長石,石英,黒色粒を含む	外面:灰オリーブ5Y5/2 内面:灰N6/0	回転ナデ,底部:回転ヘラケズリ	回転ナデ,見込み:仕上げナデ	轆轤回転:右方向 天井部:濃緑色の自然釉
12	1号墳	須恵器	坏身	12.0	3.4	—	良	砂粒をほとんど含まない	外面:灰N4/0 内面:灰N5/0	回転ナデ,底部:回転ヘラケズリ	回転ナデ	轆轤回転:右方向
13	1号墳	須恵器	坏身	11.7	3.8	—	不良	2mm以下の長石,石英,黒色粒を含む	外面:褐灰7.5YR5/1〜灰白2.5Y7/1 内面:褐灰7.5YR5/1	回転ナデ,底部:回転ヘラケズリ,下端未調整	回転ナデ,見込み:仕上げナデ	轆轤回転:左方向 外面に同法量の重ね焼痕
14	1号墳	須恵器	坏身	11.8	(4.2)	—	不良	2mm以下の長石,石英,黒色粒を含む	外面:灰黄2.5Y7/2 内面:灰N6/0	回転ナデ,底部:回転ヘラケズリ	回転ナデ	轆轤回転:右方向
15	1号墳	須恵器	坏身	11.0	3.8		良	2mm以下の長石,石英,黒色粒を含む	外面:灰白N7/0 内面:オリーブ灰N5/0	回転ナデ,底部:回転ヘラケズリ	回転ナデ	轆轤回転:右方向
16	1号墳	須恵器	坏身	11.4	(2.9)	—	良	2mm以下の長石,石英,黒色粒を含む	内・外面:灰7.5Y6/1	回転ナデ	回転ナデ	
17	1号墳	須恵器	椀	9.6	5.6	—	良好	1mm大の長石,石英,黒色粒を含む	外面:オリーブ黒5Y3/1 内面:灰N4/0	回転ナデ,底部:回転ヘラケズリ	回転ナデ	轆轤回転:右方向
18	1号墳	須恵器	(短頸壺)蓋	9.9	(3.4)	—	良好	1mm大の長石,石英,黒色粒を含む	内・外面:灰N5/0	回転ナデ,天井部:回転ヘラケズリ	回転ナデ	轆轤回転:左方向,外面に灰オリーブ色の自然釉
19	1号墳	須恵器	短頸壺蓋	10.1	(2.8)	—	良好	1mm大の長石,石英を含む	外面:灰白N7/0 内面:灰N6/0	回転ナデ,天井部:回転ヘラケズリ	回転ナデ	
20	1号墳	須恵器	無頸壺	7.4	8.0	—	不良	2mm以下の長石,石英,黒色粒を含む	内・外面:灰白5Y7/2	摩滅,体部:カキ目,底部:静止ヘラケズリ	摩滅	
21	1号墳	須恵器	短頸壺口縁部	—	(3.5)	—	良	微砂粒を含む	外面:灰N5/0 内面:灰N5/0	回転ナデ	回転ナデ	
22	1号墳	須恵器	長頸壺	8.4	13.1	—	良	1mm大の長石,石英,黒色粒を含む	内・外面:灰N6/0	回転ナデ,頸部:ヘラ記号,頸・体部:カキ目,底部:回転ヘラケズリ,下端未調整(回転ヘラ切り)	口・頸部:回転ナデ	轆轤回転:右方向
23	1号墳	須恵器	壺(平瓶)体部	—	(7.7)	—	良	微砂粒を含む	内・外面:灰N6/0	体部:回転ナデ,底部:回転ヘラケズリ	回転ナデ	轆轤回転:左方向
24	1号墳	須恵器	(平瓶)体部		(9.9)		良	1mm大の長石,石英,黒色粒を含む	内・外面:灰N6/0	体部:回転ナデ,底部:回転ヘラケズリ	回転ナデ	轆轤回転:左方向
25	1号墳	須恵器	ハソウ体部	—	3.8	—	良	1mm大の長石,石英を含む	内・外面:灰N6/0	回転ナデ	回転ナデ	
26	1号墳	須恵器	ハソウ体部	—	(5.0)		良	微砂粒を含む	内・外面:灰N6/0	体部上半:回転ナデ,体部下半:回転ヘラケズリ	回転ナデ	轆轤回転:右方向
27	1号墳	須恵器	提瓶	6.4〜6.6	19.2	—	良	微砂粒を含む	内・外面:灰N6/0	口・頸部:回転ナデ,体部,腹面:円盤充填後,回転ナデ,背面:回転ヘラケズリ,側面:ナデ	口縁部:回転ナデ	背面に灰白色の自然釉
28	1号墳	須恵器	提瓶体部	—	(14.2)	—	良	1mm大の長石,石英,黒色粒を含む	内・外面:灰N6/0	回転ナデ	回転ナデ	図上復元
29	1号墳	須恵器	短頸壺蓋	—	(3.3)	—	良	微砂粒を含む	内・外面:灰N5/0	回転ナデ,天井部:回転ヘラケズリ	回転ナデ	轆轤回転:右方向,19と同一個体か
30	1号墳	須恵器	坏身口縁部	—	(1.5)	—	良	砂粒をほとんど含まない	内・外面:灰N6/0	回転ナデ	回転ナデ	

番号	出土遺構名	種別	器種名	口径	器高	底径	焼成	胎土	色調	外面	内面	備考
31	1号墳	須恵器	瓶 口縁部	—	(2.0)	—	良	砂粒をほとんど含まない	内・外面:灰N5/0	回転ナデ	回転ナデ	
32	1号墳	須恵器	瓶体部	—	(5.0)		良	砂粒をほとんど含まない	内・外面:灰N6/0	ナデ	ナデ, 円盤充填痕	
33	1号墳	須恵器	甕		(12.1)	—	良	砂粒をほとんど含まない	内・外面:灰5Y6/1	口縁部:回転ナデ, 頸部:平行叩き後回転ナデ, 体部:平行叩き後カキ目	口・頸部:回転ナデ, 体部:青海波	

第7表　城所山2号墳出土遺物（土器）観察表

（ ）の数値は残存値を示す

番号	出土遺構名	種別	器種名	法量(cm) 口径	器高	底径	焼成	胎土	色調	調整 外面	内面	備考
34	2号墳	須恵器	坏蓋	14.9	4.3	—	良	2mm大の長石, 石英を含む	内・外面:灰N5/0	回転ナデ, 天井部:回転ヘラケズリ, 頂部未調整(回転ヘラ切り)	回転ナデ	轆轤回転:左方向 坏身35とセットか
35	2号墳	須恵器	坏身	12.8	4.3	—	良	微砂粒を含む	内・外面:灰N5/0	回転ナデ, 底部:回転ヘラケズリ, 下端未調整	回転ナデ	轆轤回転:左方向 坏蓋34とセットか
36	2号墳	須恵器	坏蓋	13.7	4.4	—	不良	2mm以下の長石, 石英, 黒色粒を含む	外面:灰7.5Y6/1 内面:褐灰10YR6/1	回転ナデ, 天井部:回転ヘラケズリ, 頂部未調整(回転ヘラ切り)	回転ナデ	轆轤回転:左方向 坏身37とセットか
37	2号墳	須恵器	坏身	12.6	4.8	—	不良	2mm以下の長石, 石英, 黒色粒を含む	外面:灰7.5Y6/1 内面:褐灰10YR6/1	回転ナデ, 底部:回転ヘラケズリ, 下端未調整(回転ヘラ切り)	回転ナデ	轆轤回転:左方向 坏蓋36とセットか
38	2号墳	須恵器	坏蓋	13.1	4.1	—	良好	微砂粒を含む	内・外面:灰N6/0	回転ナデ, 天井部:回転ヘラケズリ	回転ナデ, 天井部:仕上げナデ	轆轤回転:右方向 坏身39とセットか
39	2号墳	須恵器	坏身	12.1	4.9	—	良	微砂粒を含む	内・外面:灰N6/0	回転ナデ, 底部:回転ヘラケズリ	回転ナデ, 見込み:仕上げナデ	轆轤回転:右方向 坏蓋38とセットか
40	2号墳	須恵器	坏蓋	14.4	4.8	—	不良	2mm以下の長石, 石英, 黒色粒を含む	内・外面:灰白2.5Y7/1	回転ナデ, 天井部:回転ヘラケズリ, 頂部未調整(回転ヘラ切り)	回転ナデ	轆轤回転:左方向 坏身41とセットか
41	2号墳	須恵器	坏身	12.0	5.1	—	不良	2mm以下の長石, 石英, 黒色粒を含む	内・外面:灰白2.5Y7/1	回転ナデ, 底部:回転ヘラケズリ	回転ナデ	轆轤回転:左方向 坏蓋40とセットか
42	2号墳	須恵器	坏蓋	13.7	4.2	—	不良	1mm大の長石, 石英, 黒色粒を含む	内・外面:灰黄2.5Y7/2	回転ナデ, 天井部:静止ヘラケズリ	回転ナデ	坏身43とセットか
43	2号墳	須恵器	坏身	12.2	4.2	—	不良	1mm大の長石, 石英, 黒色粒を含む	内・外面:灰黄2.5Y7/2	回転ナデ, 底部:回転ヘラケズリ, 下端未調整(回転ヘラ切り)	回転ナデ	轆轤回転:左方向 坏蓋42とセットか
44	2号墳	須恵器	坏蓋	14.2	4.5	—	良	微砂粒を含む	内・外面:灰N5/0	ヘラ記号, 回転ナデ, 天井部:回転ヘラケズリ	回転ナデ	轆轤回転:右方向
45	2号墳	須恵器	坏蓋	14.2	5.1	—	良	砂粒をほとんど含まない	内・外面:オリーブ灰10Y5/1	ヘラ記号, 回転ナデ, 天井部:回転ヘラケズリ, 頂部未調整	回転ナデ	轆轤回転:右方向
46	2号墳	須恵器	坏蓋	13.7	4.4	—	良	砂粒をほとんど含まない	外面:灰N4/0 内面:灰N5/0	ヘラ記号, 回転ナデ, 天井部:回転ヘラケズリ	回転ナデ	轆轤回転:右方向 坏身17とセットか
47	2号墳	須恵器	坏蓋	13.8	4.1	—	良好	1mm以下の長石, 石英, 黒色粒を含む	外面:灰N6/0 内面:灰N7/0	回転ナデ, 天井部:回転ヘラケズリ?, 頂部未調整(回転ヘラ切り)	回転ナデ	天井部:濃緑色の自然釉, 粘土塊溶着
48	2号墳	須恵器	坏蓋	12.4	4.0		良好	2mm以下の長石, 石英, 黒色粒を含む	内・外面:灰N5/0	回転ナデ, 天井部:回転ヘラケズリ, 頂部未調整	回転ナデ	轆轤回転:右方向
49	2号墳	須恵器	坏身	13.0	4.4	—	良	2mm以下の長石, 石英, 黒色粒を含む	外面:灰オリーブ5Y6/2 内面:灰5Y6/1	回転ナデ, 底部:回転ヘラケズリ	回転ナデ	轆轤回転:左方向
50	2号墳	須恵器	坏身	12.1	3.7		不良	1mm以下の長石, 石英を含む	外面:灰白2.5Y8/1 内面:灰白2.5Y8/2	摩滅, 回転ナデ, 底部:回転ヘラケズリ, 下端未調整(回転ヘラ切り)	回転ナデ, 見込み:仕上げナデ	轆轤回転:右方向
51	2号墳	須恵器	壺	9.7	13.[illegible]	—	良	微砂粒を含む	内・外面:灰N6/0	回転ナデ, 底部:静止ヘラケズリ	口・頸部:回転ナデ	
52	2号墳	須恵器	提瓶	6.2～5.4	18.6	—	良好	微砂粒を含む	内・外面:灰N5/0	口・頸部:回転ナデ, 体部:カキ目, 背面中央:未調整, 側面:ナデ	口・頸部:回転ナデ	
53	2号墳	須恵器	提瓶	6.6～7.4	18.8	—	良	微砂粒を含む	内・外面:灰5Y6/1	口・頸部:カキ目, 体部上半:ナデ, ヘラ状圧痕, 腹面:カキ目, 背面:回転ヘラケズリ, 側面:ナデ	口・頸部:回転ナデ	
54	2号墳前溝内	須恵器	坏身	13.4	(3.6)	—	良	微砂粒を含む	内・外面:灰N6/0	ヘラ記号, 回転ナデ, 底部:回転ヘラケズリ	回転ナデ	轆轤回転:右方向か 坏蓋44とセットか
55	2号墳前溝内	須恵器	坏身	12.2	(3.9)		良好	精良	外面:灰N7/0 内面:灰N6/0	回転ナデ, 底部:回転ヘラケズリ	回転ナデ	轆轤回転:右方向
56	2号墳前溝床	須恵器	坏身	12.3	4.1		良	精良, 黒色粒を含む	内・外面:灰N6/0	ヘラ記号, 回転ナデ, 底部:回転ヘラケズリ		轆轤回転:右方向 坏蓋45とセットか
57	2号墳前溝	須恵器	ハソウ口縁部	12.8	(8.0)		良好	微砂粒を含む	内・外面:暗灰N3/1～灰5Y6/1	口縁部:回転ナデ, 頸部:カキ目, ヘラ記号	回転ナデ	
58	2号墳前溝	須恵器	壺	8.0	8.2	-	良	微砂粒を含む	内・外面:灰N6/0	回転ナデ, 底部:回転ヘラケズリ	回転ナデ	轆轤回転:左方向

第12表　池谷窯跡表採遺物観察表

（ ）の数値は残存値を示す

実測番号	出土遺構名	種別	器種名	法量(cm) 口径	器高	底径	焼成	胎土	色調	調整 外面	内面	備考
1	表採	須恵器	蓋	14.7	(1.4)	—	不良	石英, 長石, 赤色粒を含む	内・外面:橙 5YR7/6	摩滅のため不明	摩滅のため不明	酸化焔焼成のため赤焼け
2	表採	須恵器	皿	18.4	2.4	16.4	不良	石英, 長石, 赤色粒を含む	内・外面:橙 5YR7/6	摩滅のため不明	摩滅のため不明	酸化焔焼成のため赤焼け
3	表採	粘土塊	—	長さ:6.8, 幅:5.6, 厚さ:4.8, 重さ:137.3g						—	—	
4	表採	粘土塊	—	長さ:5.8, 幅:5.1, 厚さ:4.9, 重さ:76.4g						—		
5	表採	粘土塊	—	長さ:5.3, 幅:4.4, 厚さ:3.7, 重さ:56.6g						—		

第13表　山下墳墓跡出土遺物観察表

（ ）の数値は残存値を示す

番号	出土遺構名	種別	器種名	法量(cm) 口径	器高	底径	焼成	胎土	色調	調整 外面	内面	備考
1	上層?	弥生土器	片口鉢	42.2	(16.1)		良	石英, 長石, 金雲母, 角閃石を少量含む	内・外面:鈍い褐 7.5YR5/4	口縁部:ヨコナデ, ヘラミガキ 体部:ヘラケズリ	口縁部:ヨコナデ 体部:ヘラミガキ	
2	上層	弥生土器	壺		(28.6)	13.4	良好	石英, 長石, 角閃石を含む	内・外面:橙 7.5YR6/6	頸部〜体部:縦方向のハケ, 体部上半:6分割による横方向のヘラミガキ	頸部〜体部上半:指押さえ	体部上半に焼成前の穿孔が1箇所, 体部から底部にかけて粘土帯が4箇所認められる

第14表　古田1号塚周辺出土遺物観察表

（ ）の数値は残存値を示す

挿図番号	出土遺構名	種別	器種名	法量(cm) 口径	器高	底径	焼成	胎土	色調	調整 外面	内面	備考
1	地権者採集品	石器	打製石斧	長さ:(12.1), 幅:6.1, 厚さ:2.8, 重さ:231.8g			—	—	—	—		サヌカイト製
2	地権者採集品	土師質土器	足釜口縁部	-	(3.8)	—	良	1mm以下の砂粒を含む	内・外面:橙 5YR6/6	口縁から鍔部:ヨコナデ, 鍔下端から体部:指押さえ	—	
3	地権者採集品	土師質土器	足釜口縁部	—	(3.3)	—	良	1mm以下の砂粒を含む	内・外面:灰白 10YR8/2		—	
4	地権者採集品	土師質土器	足釜口縁部	—	(4.7)	—	良	1mm以下の砂粒, 赤色粒を含む	外面:橙 7.5YR7/6 内面:鈍い黄橙 10YR7/4	外面:口縁から鍔部ヨコナデ, 鍔下端から体部指押さえ		
5	地権者採集品	土師質土器	羽釜口縁部		(3.7)		良	2mm以下の砂粒を含む	内・外面:鈍い黄橙 10YR6/6	ナデ	摩滅	
6	地権者採集品	土師質土器	足釜脚部	—	(7.4)	—	良好	2mm以下の砂粒を含む	内・外面:鈍い褐 7.5YR6/3	板状工具によるナデ	指押さえ	煤付着
7	地権者採集品	土師器	足釜脚部	-	(8.0)	—	良	1mm以下の砂粒を多く含む	内・外面:鈍い橙 7.5YR7/3	板状工具によるナデ	指押さえ	

第5表　旧香南町所蔵（伝）横岡山古墳出土遺物（鉄器）観察表

保存処理前の値で，（ ）の数値は残存値を示す

番号	出土遺構名	器種名	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
57	—	刀身部	(15.30)	3.10	0.80		
58	—	刀身部	(9.20)	3.00	0.90	60.7	
59	—	刀関部	(7.70)	3.00	0.80		
60	—	鐔	(3.90)	3.20	0.40		無窓板鐔
61	—	柄縁金具	(2.60)	0.80	0.45	33.7	
62	—	轡	(6.70)	2.60	0.80	22.1	引手部
63	—	轡	(6.70)	2.90	1.00	24.3	引手部
64	—	轡	(9.70)	1.40	1.10	45.6	引手部
65	—	轡	(7.60)	1.00	0.90	38.7	引手部
66	—	轡	(16.60)	(6.50)	0.80		環状鏡板(衔)引手部
67	—	轡	(3.90)	(3.50)	0.60	6.5	環状鏡板付轡
68		環状鉄製品	3.10	3.10	0.50	5.7	
69		菱形飾金具	6.80	2.70	0.30		
70		雲珠・辻金具	2.35	2.35	1.50	5.4	
71	—	爪形留金具	3.25	2.35	0.25	7.3	
72	—	鉄鏃	(3.85)	(3.00)	0.30	9.0	
73	—	刀子	(3.90)	1.30	0.50	6.1	
74	—	鉄斧?	(6.00)	4.00	(0.50)	30.3	

第8表　城所山古墳群出土（耳環）観察表

保存処理前の値で、（ ）の数値は残存値を示す

番号	出土遺構名	器種名	外径（cm）		断面径（cm）		重量（g）	構造	材質	備考
			上下	左右	上下	左右				
59	—	耳環	2.10	2.20	0.20	0.20	1.9	中実	鉄製？	
60	—	耳環	2.00	2.25	0.30	0.35	3.4	中実	銅芯？	
61	—	耳環	2.50	2.70	0.55	0.50	7.1	中実	銅芯	62と対か
62	—	耳環	2.50	2.80	0.40	0.45	5.4	中実	銅芯	61と対か
63	—	耳環	2.75	2.85	0.70	0.70	13.7	中実	銅芯銀箔張	
64	—	耳環	2.80	3.10	0.70	0.75	21.1	中実	銅芯銀箔張	65と対か
65	—	耳環	2.95	3.15	0.70	0.80	23.7	中実	銅芯銀箔張	64と対か
66	—	耳環	2.70	3.05	0.70	0.66	18.8	中実	銅芯銀箔張	67と対か
67	—	耳環	2.90	3.25	0.65	0.60	17.9	中実	銅芯銀箔張	66と対か
68	—	耳環	3.20	3.55	0.80	0.90	7.8	中空	銀管	69と対か
69	—	耳環	3.15	3.50	0.80	0.90	7.2	中空	銀管	68と対か

第9表　城所山古墳群出土（玉類）観察表

（ ）の数値は残存値を示す

番号	出土遺構名	器種名	径（cm）	長さ（cm）	孔径（cm）	重量（g）	色調		備考
							表面	断面	
70	—	練玉	0.70	0.60	0.10	0.3	黒7.5YR1.7/1	—	
71	—	練玉	0.70	(0.65)	0.10	(0.2)	黒7.5YR2/1	鈍い橙7.5YR7/3	胎土精良
72	—	練玉	(0.85)	0.70	0.10	(0.5)	黒7.5YR1.7/1	鈍い黄橙10YR7/3	胎土精良
73	—	練玉	(0.85)	(0.75)	0.10	(0.6)	黒7.5YR1.7/1	鈍い黄橙10YR7/3	胎土精良
74	—	練玉	0.85	0.90	0.10	0.7	黒7.5YR2/1	浅黄橙10YR8/3	胎土精良
75	-	練玉	0.90	0.85	0.10	0.7	黒7.5YR2/1	鈍い黄橙10YR7/3	胎土精良
76		練玉	0.95	0.80	0.10	0.8	黒7.5YR1.7/1	—	
77		練玉	0.95	(0.80)	0.10	(0.6)	黒7.5YR2/1	鈍い黄橙10YR7/3	胎土精良
78		練玉	0.95	0.90	0.10	(0.5)	黒7.5YR1.7/1	鈍い橙10YR7/4	胎土精良、両側からの穿孔
79	-	練玉	0.95	0.90	0.10	0.7	黒褐7.5YR3/1		
80	—	練玉	0.95	0.90	0.10	0.8	黒7.5YR1.7/1		
81	—	練玉	0.95	0.85	0.10	0.7	黒褐7.5YR3/1		
82	—	練玉	0.95	0.90	0.10	(0.7)	黒7.5YR2/1	鈍い橙10YR7/4	胎土精良
83	—	練玉	0.95	0.85	0.10	0.7	黒7.5YR1.7/1		
84	—	練玉	1.00	0.85	0.10	0.8	黒7.5YR2/1	-	
85	—	練玉	1.00	0.95	0.10	0.9	黒褐7.5YR3/1	—	
86	—	練玉	1.05	0.85	0.10	0.7	黒7.5YR1.7/1	—	
87	—	練玉	1.05	0.95	0.10	1.0	黒7.5YR1.7/1	—	
88	—	練玉	1.05	0.95	0.10	1.0	黒7.5YR1.7/1	—	
89	—	練玉	1.05	0.95	0.10	0.9	黒7.5YR1.7/1	鈍い黄橙10YR6/3	胎土精良

第10表　城所山古墳群出土（鉄器）観察表

（ ）の数値は残存値を示す

番号	出土遺構名	器種名	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
90	—	刀身部	(14.8)	3.5	1.0	210.0	
91	—	刀身部	(13.7)	3.8	1.4	112.9	
92		鐔	(5.5)	(2.8)	0.55	21.8	無窓板鐔
93		柄,若しくは鞘金具	(2.6)	1.2	0.2	2.0	
94		鞘	—	—			棒状鉄板に巻
95		刀子	(5.3)	0.9	0.4	2.8	
96		刀子	(5.5)	1.7	0.55	11.0	
97		刀子	(4.9)	(1.7)	0.5	6.8	
98	—	刀子茎部	(5.5)	1.1	0.4	3.8	
99	—	刀子茎部	(4.3)	1.1	0.5	6.2	
100	—	刀子,若しくは長頸鏃頸部	(2.8)	1.1	0.5	3.0	
101	—	鉄鏃	(6.2)	2.8	0.25	9.8	方頭鏃
102	—	鉄鏃	(6.6)	1.2	0.4	7.9	柳葉式長頸鏃
103	—	鉄鏃頸部	(2.7)	0.8	0.45	6.1	長頸鏃頸部
104	—	鉄鏃	(2.4)	(2.0)	0.4	1.4	
105	—	鉄鏃	(3.1)	(2.75)	0.4	5.4	柳葉式鉄鏃
106	—	鉄鏃	(5.4)	2.25	0.45	—	柳葉式有頸鏃
107	—	鉄鏃	(5.7)	(2.7)	0.3	—	柳葉式鉄鏃
108	—	不明	(4.3)	1.2	0.4	1.9	
109	—	曲刃鎌	(13.3)	2.5	0.7	—	
110	—	袋状鉄斧	11.1	4.8	3.3	247.7	
111	—	鉄板	(11.7)	8.1	0.5	150.6	
112	—	鉄板	(7.9)	(6.0)	0.6	53.3	

第11表　(伝)万塚古墳出土鉄器観察表

（　）は推定値を示す
gの数値は土錆を含む

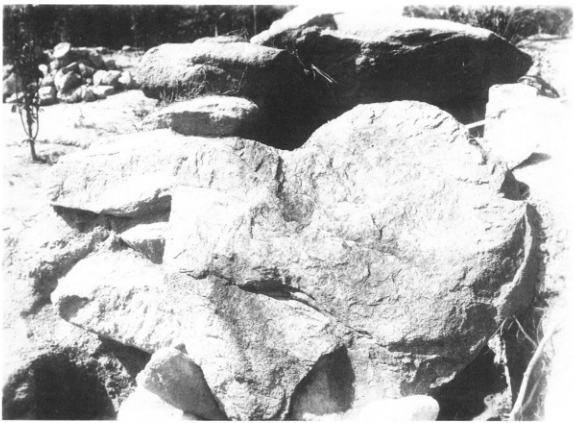
番号	出土遺構名	器種名	残存長 (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
1	—	鉄矛	9.4	0.4	0.6	28.6	
2	—	鉄矛	7.5	0.6	(0.5)	14.1	
3-1	—	鉄矛	6.3	(0.3)	(0.3)	13.7	曲なって中止している
3-2	—	鉄矛	3.4	0.2	0.2		
4	—	鉄刀	6.6	0.85	0.4	23.1	
5	—	鉄刀	6.6	0.45	(0.5)	17.4	
6	—	鉄刀	6.4	0.4	(0.45)	18.4	
7	—	鉄矛	6.4	0.3	(0.35)	6.7	
8	—	鉄刀	6.3	0.3	0.25	8.2	
9	—	鉄刀	5.6	(0.35)	(0.4)	5.6	
10	—	鉄刀	6.8	0.4	0.4	19.0	
11	—	鉄刀	6.6	0.4	0.4	10.9	
12	—	鉄刀	4.6	0.3	(0.35)	9.4	
13	—	鉄刀	4.9	0.35	(0.45)	7.2	
14	—	鉄刀	4.2	0.45	(0.4)	9.5	
15-1		鉄刀	3.0	0.3	0.3	16.0	土錆の中には木炭もまじっている
15-2		鉄矛	1.0	0.2	0.3		
16		鉄刀	2.9	0.4	(0.4)	7.1	
17		鉄刀	3.0	0.4	(0.4)	6.7	
18		鉄刀	3.0	0.4	(0.45)	5.6	
19		鉄矛	2.9	0.35	0.4	5.6	
20-1		鉄刀	2.9	0.3	0.25	5.8	曲なって中止している
20-2		鉄刀	1.0	0.2	0.2		
21	—	鉄刀	1.5	0.3	0.3	2.6	
22	—	鉄刀	4.2	0.35	0.25	5.0	
23	—	鉄刀	3.1	0.4	0.3	4.0	
24	—	鉄刀	3.1	0.3	(0.3)	2.7	
25	—	鉄刀	2.2	0.3	(0.2)	1.9	
26	—	鉄矛	4.0	0.4	0.4	8.1	
27	—	鉄矛	3.9	0.3	0.3	6.9	
28	—	鉄刀	3.9	0.3	(0.3)	2.9	
29	—	鉄刀	3.0	0.35	0.35	3.3	
30	—	刀子	2.0	1.3	0.5	2.8	
31	—	刀子	2.7	1.1	0.4	7.3	
32	—	鎌	2.4	0.9	0.9	14.9	断面は、茎が、刃面から突出のようなものは見られる。
33		用途不明鉄器	6.3	3.6	0.1	0.6	カミの一部か
34		用途不明鉄器	2.4	1.2	(0.3)		刀子の柄に付着
35		用途不明鉄器	2.0	1.0	(0.2)		刀子の柄に付着
36		武具（冑）	（前長さ）15.7、（横板長さ）7.0、		（刀子長さ）16.5	292.9	横板鋲板付冑
37		刀子（刀子状）	2.9	2.1	0.7	9.7	

1. 横岡山古墳　遠望－鎌田共済会郷土博物館所蔵－

裏書：香川郡浅野村字カラト　鰹山古墳（一）　昭和六年八月二十七日発掘／香川郡浅野村鰹山（古墳）全景　鰹山頂上ノ向ツテ右端中腹ニ斗出シ来レル所稍秃ゲタル所ノ上部ニ古墳アリ

2. 横岡山古墳　前面－鎌田共済会郷土博物館所蔵－

裏書：香川郡浅野村字カラト　鰹山古墳（二）前面



1. 槇岡山古墳　塚穴最後部ノ外面－鎌田共済会郷土博物館所蔵－
裏書：香川郡浅野村字カラト　甑山古墳（三）塚穴最後部ノ外面

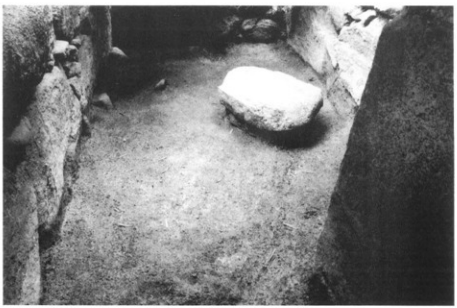
2. 槇岡山古墳　側面（向テ左ハ前）－鎌田共済会郷土博物館所蔵－
裏書：香川郡浅野村字カラト　甑山古墳（四）向テ左ハ前

1. 横岡山古墳　遺物（土器・刀破片・鉄鏃）－鎌田共済会郷土博物館所蔵－
裏書：香川郡浅野村横山古墳　遺物其一　土器，刀破片，鉄鏃

2. 横岡山古墳　遺物（石器・銅環・小玉）－鎌田共済会郷土博物館所蔵－
裏書：香川郡浅野村字カラト　鏡山古墳（六）遺物　石器，銅環，小玉

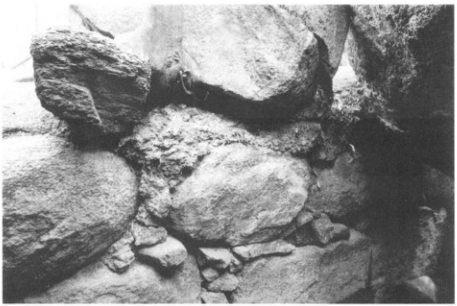
1. 横岡山古墳　石室正面
－平成 19 年度調査時－

2. 横岡山古墳　玄室奥壁
－平成 19 年度調査時－



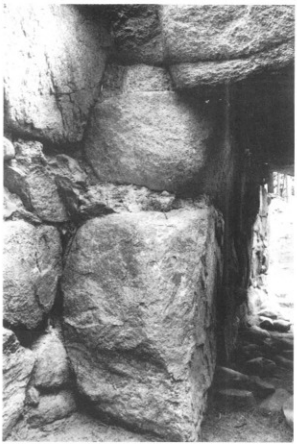
3. 横岡山古墳　玄室床面
－平成 19 年度調査時－

1. 横岡山古墳　玄室左側壁
－平成19年度調査時－

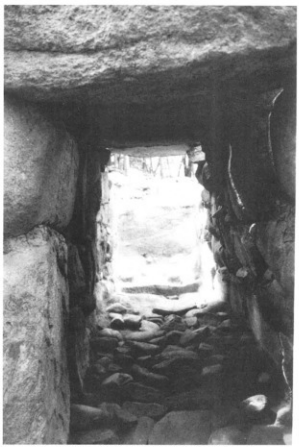


2. 横岡山古墳　玄室右側壁
－平成19年度調査時－

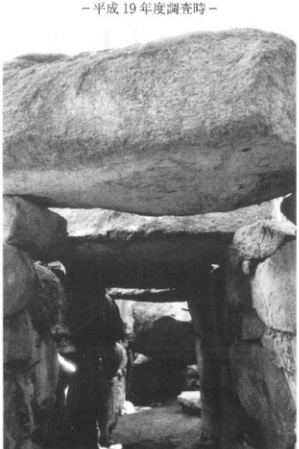
3. 横岡山古墳　玄室前壁
－平成19年度調査時－



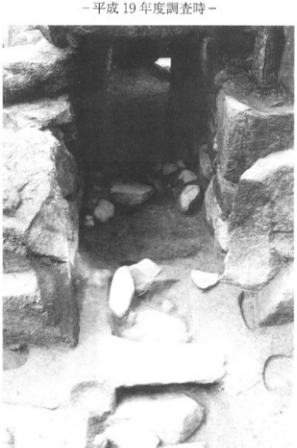
1. 横岡山古墳　石室袖部
－平成19年度調査時－



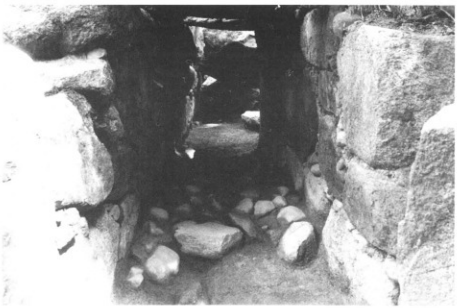
2. 横岡山古墳　羨道（玄室方向から）
－平成19年度調査時－



3. 横岡山古墳　羨道天井（羨門方向から）
－平成19年度調査時－



4. 横岡山古墳　前庭部トレンチ排水溝
・ピット－平成19年度調査時－



1. 横岡山古墳　羨道側壁
（羨門方向から）
－平成19年度調査時－

2・横岡山古墳　羨道礫床
（玄門方向から）
－平成19年度調査時－

3. 横岡山古墳　羨道遺物
出土状況1（玄門方向から）
－平成19年度調査時－

1. 横岡山古墳　羨道遺物出土状況 2
－平成 19 年度調査時－

2. 横岡山古墳　羨道遺物出土状況 3
－平成 19 年度調査時－

3. 横岡山古墳　羨道遺物出土状況 4
－平成 19 年度調査時－

4. 横岡山古墳　羨道遺物出土状況 5
－平成 19 年度調査時－

5. 横岡山古墳　羨道部排水溝（羨門側）
－平成 19 年度調査時－

6. 横岡山古墳　羨道部排水溝断面（玄門側）
－平成 19 年度調査時－

7. 横岡山古墳
前庭部トレンチ南壁東部土層

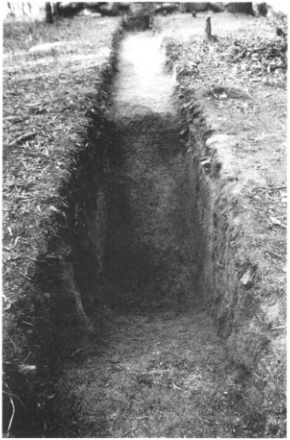
8. 横岡山古墳
前庭部トレンチ南壁西部土層

1. 横岡山古墳
前庭部トレンチ
－平成19年度調査時－

2. 横岡山古墳
前庭部トレンチ北壁土層
－平成19年度調査時－

3. 横岡山古墳
前庭部トレンチ縦断土層
－平成19年度調査時－

1. 横岡山古墳　第１トレンチ（西方向から）
－平成 19 年度調査時－



2. 横岡山古墳　第１トレンチＳＤ１
（西方向から）－平成 19 年度調査時－

3. 横岡山古墳　第１トレンチＳＤ１土層断面
（南方向から）－平成 19 年度調査時－

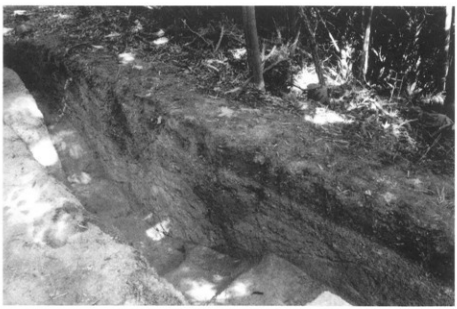
4. 横岡山古墳　第４トレンチＳＤ１土層断面
（南方向から）－平成 19 年度調査時－

5. 横岡山古墳　第１トレンチ墓壙検出状況
（北方向から）－平成 19 年度調査時－

6. 横岡山古墳　第１トレンチＳＸ１
（西方向から）－平成 19 年度調査時－

1. 横岡山古墳
第2トレンチ（西方向から）
－平成19年度調査時－

2. 横岡山古墳
第3トレンチ（北方向から）
－平成19年度調査時－



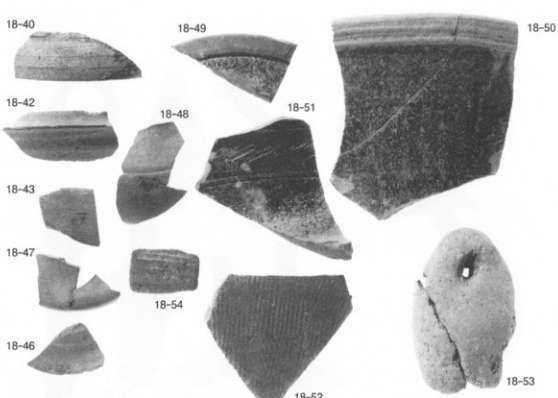
3. 横岡山古墳
第4トレンチ（南方向から）
－平成19年度調査時－

1.（伝）横岡山古墳出土須恵器（浅野小学校展示品と旧香南町歴史民俗郷土館保管品との接合資料）

2.（伝）横岡山古墳出土須恵器（浅野小学校展示品）

1.（伝）横岡山古墳出土須恵器
（香南町歴史民俗郷土館旧保管品）

2.（伝）横岡山古墳出土石器
（香南町歴史民俗郷土館旧保管品）



3.（伝）横岡山古墳出土須恵器・土器類（香南町歴史民俗郷土館旧保管品）

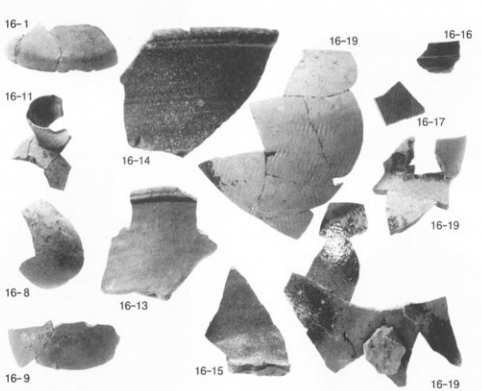
1.（伝）横岡山古墳出土須恵器
（津森明氏所蔵品）

2.（伝）横岡山古墳出土刀・刀装具
（香南町歴史民俗郷土館旧保管品）

3.（伝）横岡山古墳出土鉄斧・刀子
（香南町歴史民俗郷土館旧保管品）

4.（伝）横岡山古墳出土馬具（香南町歴史民俗郷土館旧保管品）

1. 横岡山古墳　平成19年度調査出土遺物1



2. 横岡山古墳　平成19年度調査出土遺物2

16-2

16-3

16-4

16-5

16-6

16-20

16-18

16-7

16-10

16-12

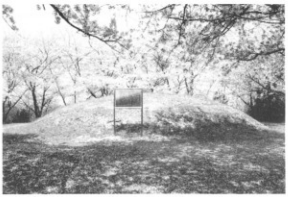
横岡山古墳　平成19年度出土遺物

1. 城所山2号墳
（墳丘背面から）－現況－

2. 城所山2号墳正面
－現況－

3. 城所山2号墳石室
－現況－

1. 城所山２号墳遠景（西方向から）



2. 城所山２号墳墳丘背面－現況－

3. 城所山２号墳石室上面－現況－

4. 城所山２号墳石室奥壁－現況－

5. 城所山２号墳石室左側壁－現況－

6. 城所山２号墳石室右側壁－現況－

7. 城所山１号墳比定地点遠景（２号墳から）

8. 城所山１号墳比定地点

26-3

26-5

26-6

26-7

26-11

26-13

26-15

26-18

26-20

26-22

26-24

26-27

城所山1号墳出土須恵器1

27-34

27-35

27-36

27-37

27-38

27-39

27-46

27-40

27-41

27-42

27-43

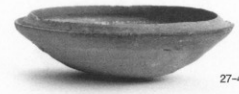
27-44

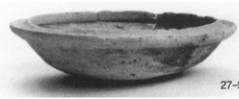
27-45

城所山2号墳出土須恵器1

27-47

27-48


27-49


27-50

27-56

27-51

27-57

27-52

27-53

27-58

城所山２号墳出土須恵器２